

暫くして、

『原さんから便りがありますか？』

『え、もう歸つて來ます。先生も海城で病氣にかゝつて、病院に一と月も居たさうで……來月の初めには歸つて來る筈です。』

『それちや遼陽を見ずに……』

『え。』

衰弱した割合には長く話した。寺にゐる時分の話なども出た。

其翌日は彌勒の校長さんが見舞にやつて來た。

『こんなになつて了ひました。』

と細い手を出して見せた。

『學校の方はいゝやうにして置きますから、心配せずにお出でなさい、缺席届さへ出して置くと二た

月は俸給が下りるんですから。』

校長さんはかう言つた。

戦争の話が出ると、

『遅くも、休暇中には旅順が取れると思つたですけれどなア。餘程難かしいと見えますな。此頃ちや

容易に取れないなんて、悲觀説が多いぢやないですか。常陸丸に色々必要な材料が積んであつた相ですな。』

こんなことを言つた。

二三日して、今度は關さんが來た。女郎花と薄とを持つて來て呉れた。彌勒の野から採つたのであると言つた。母親は金盃に水を入れて、取敢へず、それを病人の枕元に置いた。清三はうれしきさうな顔をしてそれを見た。

關さんはやがて風呂敷包みから、紙に包んだ二つの見舞の金を出した。一つには金七圓、生徒一同よりとしてあつた。一つは金五圓、下に教員連の名前がずらりと並べて書いてあつた。

六十一

遼陽の戦争はやがて始まつた。國民の心は總て滿洲の野に向つて注がれた。深い沈黙の中に却つて無限の期待と無限の不安とが認められる。神經質になつた人々の心は鳥渡した號外賣の鈴の音にもすぐ驚かされるほど昂ぶつてゐた。さうして居る間にも一日は一日と經つ。鞍山站から一押と思つた首山堡が容易に取れない。第一軍も思つたやうに出ることが出來ない。雨になるか風になるか解らぬ中に、また一日二日と過ぎた。——その不安の情が九月一日の首山堡占領の二號活字で忽ちにして解かれたと思ふ

と、今度は鬱積した歡呼の聲が遼陽占領の喜ばしい報に連れて、凄じい勢で日本全國に漲り渡つた。

遼陽占領！ 遼陽占領！ 其聲は何んな暗い汚い巷路にも、何んな深い山奥のあばら家にも、何んなあら海の中の一孤島にも聞えた。號外賣の鈴の音は一時間と言はずに全國に新しい詳しい報を齎らして行く。何處の家でも其話が繰返される。其の烈しかつた戦のさまがいろ／＼に色彩を傳けて語り合はされる。太子河の軍橋を焼いて退却した敵將クロバトキンは、第一軍の追撃に逢つて全く包圍されて了つたといふ虚報さへ一時は信用された。

全都國旗を以て埋まるといふ記事があつた。人民の萬歳の聲が宮城の奥まで聞えたといふことが書いてあつた。夜は提灯行列が日比谷公園から上野公園まで續いて、櫻田門附近馬場先門附近は殆ど人て埋らるゝ位であつたといふ。京橋日本橋の大通りには、數萬燭の電燈が晝のやうに輝き渡つた。花電車が通る度に萬歳の聲が終夜聞えたといふ。

清三はもう充分に起上ることが出来なかつた。容體は日一日に悪くなつた。昨日は便所から這ふやうにして辛うじて床に入つた。でも、其枕元には國民新聞と東京朝日新聞とが置かれてあつた。瘦せかけた骨立つた手が時々それを取上げて見る。

遼陽の占領が始めて知れた時、かれは限りない喜悅を顔に湛へて、

『母さん！ 遼陽が取れた！』

とさも／＼うれしそうに言つた。

それからいろ／＼な話を母親にしてきかせた。二千何人といふ死傷者の話をもしてきかせた。

戦争の話をする時は、病氣などは忘れたやうであつた。蒼白い瘦せた顔にもほのかに血が上つた。醫師が来て、新聞などは讀まない方が好いと言つた。病人自身にしても、細かい活字を迎るのは随分難儀であつた。手に取つても五分と持つて居られない。疲れて、ちき傍に置いて了つた。時には半分讀み懸けた頁を、鬚の生えた瘦せた顔の上に落して、暫くちつとして居ることなどもある。

日本が初めて歐洲の強國を相手にした曠古の戦争、世界の歴史にも數へられるやうな大きな戦争——その華々しい國民の一員と生れて来て、其名譽ある戦争に加はることも出来ず、その萬分の一を國に報ゆることも出来ず、其喜悅の情を人並に萬歳の聲に顯はすことすらも出来ずに、かうした不運な病の床に横つて、國民の歡呼の聲を餘所に聞いて居ると思つた時、清三の眼には涙が溢れた。

屍となつて野に横はる苦痛、その身になつたら、名譽でも何でもないだらう。父母が戀しいだらう。祖國が戀しいだらう。故郷が戀しいだらう。しかしそれ等の人達も私よりは幸福だ——かうして希望もなしに病の床に横つて居るよりは……。かう思つて、清三は遙かに滿洲のさびしい平野に横つた同胞を思つた。

枕元に坐つた醫師の姿がくつきりと見えた。

父親は其れに向つて黙然として居た。母親は顔を掩つて、絶えず歎歎げた。

室の中央に吊つたランプは、心が出過ぎてホヤが半ば黒くなつて居た。室には陰深の氣が充ち渡つて、あたりがしんとした。鬚を長く、頬骨が立つて、眼を半開いた清三の死顔は、薄暗いランプの光の中におぼろげに見えた。

醫師の注射はもう効がなかつた。

母親の歎歎げる聲が頻りに聞える。

其處に、戸口にけた、ましいい足音がして、白地の緋を着た菰生さんの姿があわた、しく入つて來たが、づか／＼と醫師と父親との間に割込んで坐つて、

『林君！……林君！ もう、たうとう駄目でしたか！』

かう言つた菰生さんの頬を涙はホロ／＼と傳はつた。

母親はまた歎歎けた。

遼陽占領の祭で、町では先程から提灯行列が幾度となく賑かに通つた。何處の家の軒にも鎮守の提灯

が並んでつてあつて、國旗が闇にもそれと見える。一三日前から今日占領の祭をするといふ廣告を彼方此方に張出したので、近在からも提灯行列の群が幾組となく遣つて來た。菰生さんは危篤の報を得て、其の國旗と提灯と雑沓の中を、人を突退けるやうにして飛んで來た。一時間ほど前には、清三は其の行列の萬歳の聲を聞いて、『今日は遼陽占領の祭だね、』と言つて、その賑かな聲に耳を傾けて居た……。

今、また其行列が通る。萬歳を唱へる聲が賑かに聞える。やがて暇を告げた醫師は、丁度其處に酸漿提灯を篠竹の先につけた一群の行列が、子供や若者に取巻かれてわい／＼通つて行くのに逢つた。

『萬歳！ 日本帝國萬歳！』

晝間では葬式の費用がかゝると言ふので、其翌日、夜の十一時にこつそり成願寺に葬ることにした。菰生さんは父親を扶けて何彼と奔走した。町役場にも行けば、桶屋に行つて棺を誂へても遣つた。和尚さんは戦地から原杏花が歸るのを迎へに東京へ行つて生憎不在なので、清三が本堂に寄宿して居る頃、よく數學を教へて遣つた小僧さんがお經を讀むことになつた。近所の法類から然るべき導師を頼むほどのお布施が出せなかつたのである。

夜は星が聰しげにかゝやいて居た。垣には蟲の聲が雨のやうに聞える。椿の葉には露が置いて、大家

の高窓から洩れたランプの光線がキラ／＼光った。樹の黒い影と家屋の黒い影とが重り合った。

棺が小路を出る頃には、町ではもう起きて居る家はなかつた。組合のものが三人、大家のあるじ、それに父親と荻生さんとがあとについた。提灯が一つ造花も生花もない列をさびしげに照して、警察署の角から、例の溝に沿つた道を寺へと進んだ。

溝の錆びた水が動いて行く提灯の光に微かに見えた。蔽ひ冠さつた樹の葉裏が明るく照されたり消えたりした。路傍の草にも、畠にも、藪にも蟲の音は絶えず聞える。一行は歩むにつれてバタ／＼と足音を立てる。誰も口をきくものはなかつた。

寺の本堂は明放されて、如來様の前に供へられた裸蠟燭の夜風にチラ／＼するのが遠くから見えた。やがて棺は昇き上げられて、讀經が始まつた。

丈の低い小僧はそれでも僧衣を着て、拂子を持つた。一行の携へて來た提灯は灯をつけられたまゝ、人々の並んだ後ろの障子の棧に引つけられてある。廣い本堂は蠟燭の立てられてあるに拘はらず何となく薄暗かつた。父親の禿頭と荻生さんの白地の單物が微かに其中に透されて見える。

讀經の聲には重々しい處がなかつた。厭にさえ走つたやうな調子であつた。鉦がけた、ましい音を立て、鳴る。

『此處でかうして林君のおとむらひをしようとは夢にも思ひがけなかつた。』

荻生さんは菓子竹皮包を懐に入れてよく晝寢に此處に來た頃のことを思ひ出して、かう心の中で言つた。

式が濟んで、階段から父親が下りると、其處に寺の上さんが立つて居て、

『この度はまア……飛んでもないことで……それにお悔みにもまだ上りも致しませんで……生憎宿で留守なものですから。』

と、きれ／＼の挨拶をした。

夜はもう薄ら寒かつた。單衣一枚では何となくヒヤ／＼する。棺がやがて人足にかつがれて墓地へと運ばれて行く。

選ばれたのは、畠と寺とを割つた榛の木に近い處であつた。ひよろ長い並木の影が夜の闇の中に微かにそれと指さされる。垣の外に徒らに伸びた桑の廣葉がガサ／＼と夜風に靡く。

穴は型のごとく掘つてあつた。赤土と水が出て、四邊は踏立てられぬほど路がわるかつた。組合の男は逸早く草履を踏込んで、買立の白足袋を散々にしたと言つて居る。穴掘男は頭髪まで赤土だらけにながら、『どうも水が多くつて、かい出してもかい出しても出て來るので、困つたちやねえだ!』などと言つた。

父親は提灯を振翳して、穴をのぞいて見た。穴の底の赤く濁つた水が提灯にチラ／＼映つた。

荻生さんも覗いて見た。

やがて棺が穴に下される。土塊のバタ／＼と棺に當る音がする。時の間に墓は築かれて、小僧の僧衣姿が黒く其前に立つたと思ふと、例の調子外れの讀經が始まつた。暗い闇の中の提灯は、木槿垣を脊にして立つた荻生さんの蒼白い顔と父親の禿頭と其他の群の圓く並んで居るのを微かに照した。

六十四

一年ほどして、其處に自然石の石碑が建てられた。表には林清三君之墓、下に辱知有志と刻んであつた。荻生さんと郁治とが奔走して建てたので、その醜金者の中には美穂子も雪子もしげ子もあつた。

一人息子を失つた母親は一時は殆ど生効もないやうにまで思つたが、しかしさう悔んで嘆いてばかりも居られなかつた。かれ等は老いても猶獨り働いて食はなければならなかつた。母親は息子の死んだ六疊でせつせと裁縫の針を動かした。父親の禿頭は矢張その街道ををり／＼見られた。

墓には絶えず花が手向られた。花好の母親は其節毎の花を携へて來ては常に其前に供へた。荻生さんも羽生の局に勤めて居る間はよく墓參をした。ある秋の日、和尚さんは、庇髮に結つて、矢絣の紬に海老茶の袴を穿いた女學生風の娘が、野菊や山菊など一束にしたのを持つて、寺の庫裡に手桶を借りに來て、手づから前の水草の茂つた井戸で水を汲んで、林さんの墓の所在を聞いて、其前で人目も忘れて久

しく泣いて居たといふことを上さんから聞いた。

『何處の娘だか。』

などと其時上さんが言つた。

處がそれから二年ほどして、其墓參をした娘が羽生の小學校の女教員をして居るといふ話を聞いた。

『あの娘は林さんが彌勒で教へた生徒だとサ、』と上さんは何處かで聞いて來て和尚さんに話した。

秋の末になると、いつも赤城おろしが吹渡つて、寺の裏の森は潮のやうに鳴つた。その森の傍を足利まで連絡した東武鐵道の汽車が朝に夕に凄じい響きを立て、通つた。

幼
兒
外
六
編

幼 兒

多喜子は此のごろ肥つた兩足を立て、膝ぐらかゞみといふことをした。
そして廻らぬ舌で、

『ねんね、ねんね。』

母親は蒼い顔をして居た。『もう、後が出来たと見える。餘り早いと、多喜ちゃん可哀相ですがねえ、』などと言ふものもあつた。姉に當る人は、『お前、またお目出度いね、……好いさね、出来るものなら今の中にたんと拵へて置くが好いよ。あとで樂が出来るから、』と言つて笑つた。
多喜子を見ては、

『何うも不思議さね、後が出来ると、何處でも屹度ねんね、ねんねつて、あゝいふ眞似をするからねえ。不思議さね。……矢張後が出来たのが、こんな小さな兒にも解るんだねえ！』

多喜子は漸くつかまり立ちが出来る位であつた。莞爾といつも笑つて見せた。あ——とか、む——とかまだ言語でない言語を常に立てた。何方かと言へば、丈夫ないたづらな兒で、一時も手足を動かさずに居ることはなかつた。

それにつひぞ人見知をしなかつた。よく誰の手にも抱かれて行つた。

『チヨンキナ、チヨンキナ、チヨン／＼キナ、キナ、チヨンガナノハデ、チヨチヨンガチヨン——』

母親が膝の上に抱いて、かう歌つて、搖ぶつて見せると、多喜子は嬉しさうに躍り上つて、小さな手を合せて、チヨウチチヨウチの眞似をして高笑ひをした。

カイグリカイグリも出来れば、トウ／＼ノメも出来た。バ、バ、ア、ア、タ、タなどと意味もなく語つた。イヤ／＼と母親が言つて見せると、機械人形のやうに頭を矢鱈に振つた。

玩具などをもうぢつとして見ては居なかつた。でん／＼太鼓などを持つて遊んで居るかと思ふと、何時の間にかそれをメチャ／＼に壊して居た。跛ふことに熟練した兒は、鳥渡も眼が離されなかつた。今、其處に居たかと思ふと、もう何處かに其の姿が見えなくなつてゐた。時には高い縁側の處へ行つて、危ないなどといふことは少しも知らずに、平氣で下を覗いて居ることなどもあつた。

それに、障子を破ること、抽斗を明けることとが大好きであつた。障子の棧につかまり立ちをして、おとなしくぢつとして居る時には、屹度小さい穴を見附けて、それに小さい指を入れて、段々それを大きくすることに骨を折つて居た。バリ／＼と紙の破れる音を聞くのが子供には何よりもめづらしく感じられるやうに見えた。抽斗は火鉢の抽斗、茶篋の抽斗、裁縫箱の抽斗、凡そ引手のついて居るもので、自分の手に合ふものは何れも是れもあけて見た。そして中から茶呑茶碗を出す、茶托を出す、煎餅の入つた袋を出す、古曆を出す、唐辛子を出す、鳥の羽箒を出す、母親が來て見ると、總ての物を出してつた後に、肥つた足を無理やりに二本入れて、そして莞爾と笑つて居た。

時には裁縫箱の抽斗を三つとも残らず開けて、紅だの、紫だの、茶色だの、紺だの、淺黄だの、小片を其處等一面に散らばして居ることもあつた。

『何て、まあ、いたづらな子だらう。』
と母親はいつも呆れた。

『整子の時には弱くつて困つたけれど、今度の子はまあ丈夫なこと、いたづらなこと……これちや今にどんなにお轉婆になるか解りやしませんよ。』

などと父親に言ふことなどもあつた。

『女の兒と謂ふものは、初めは育て悪いものだがな……矢張、多喜子は一體が丈夫なんだねえ。』

父親はかう言つた。

『けれど、初めは男の兒の方が樂ですねえ。勉でも清でも、生れてから百日位は滅多に泣いたことなぞはない位でしたからねえ。……それから比べると、整子……あれには本當に困りましたねえ。今でこそ、あんなに丈夫になつて、言ふことをきかなくなりましたけれど。』

『それは男の兒の方が何處かサツパリしたところがある。』

『さうねえ、女の兒は一體ぐじぐじして、氣分に面倒なところがありますねえ。』

『その代り、男の兒は大きくなつてからが育て難いさうだ。十六七になつてからが……』

『さうですかねえ。』

『それから……整子の骨の折れたのは、氣分が難かしかつたばかりではないねえ。初めてで、まだ馴れなかつたといふやうな處もあるねえ。』

『それはさうですなえ。』

整子は十一歳、勉は八歳、清は六歳になつて居た。

三

ある日の夕方、多喜子は泣いて泣いて何うしても泣き止まない。

今までにこんなためしはなかつた。何んなにむづかつても、母親が膝に抱き上げて、胸をひろげて、白い大きな乳房を見せると、泣顔をそれに押附けて、すぐ泣き止んで了ふのが例であつた。『ヤア、母さんのお乳にだまされた、ヤア、』などとハイカラな十八になる此家の姪に囃されるのが例であつた。それが何うしたのか、其日は母親が抱上げてだましても後ろに返り返つて聲を擧げて泣いた。乳房を宛がつて遣つても、それを押附けるやうにして顔を背けて了つた。

疊の上に仰向けになつて、肥つた兩足をじたばたさせて、いかにも悲しさうにして泣いた。

『何うしたんだらう、まあ、此子は。』

母親も終には呆れて了つた。

其處へ婢が來てなだめ賺した。ふだんよく懷いて居て、いつもは自ら進んで其脊に負はれて行くほどであるが、今日はそれも甲斐がなかつた。抱き起さうとすると、矢張後ろに反りかへつて了つた。

『さあ、多喜ちゃん、私とおんもに行きませうかねえ。』

田舎出の肥つた大きな婢は、幾度となくそれを抱起した。その度に多喜子は火のつくやうに烈しく泣いた。

『構はんでお置きよ、何うかしたんだから……さういふ時には却つてその儘にして置く方が好いよ。』
母親の頬には血が上つて居た。

夕方は忙しかつた。其處には茶湯臺が置かれて、煮た物からはもう薄暗くなり懸けた室に湯氣が白く立つて居た。今まで縁側の近くで西洋きしやごを弾いて居た子供等は、やがて母親に呼ばれて、茶湯臺の周圍に集つた。

整子が夕飯を終つて、いろ／＼に賺して抱起した頃には、多喜子ももう泣き勞れて居た。『ねえ、好い兒だねえ、姉ちゃんに負ふしておんもに行きませうねえ。』かう言つて整子は小さい妹を後ろに負つた。多喜子はまだ歎歎けて居たが、それでも今度は素直に負はれて行つた。

『好い兒だねえ、多喜ちゃんは。……誰が泣かしたえ。母ちゃんが。母ちゃん、めんめして上げませうねえ。』

こんなことをませた口吻で言つて、整子が縁側を下りて、下駄を穿いて行く氣勢が多喜子の歎歎に交つて聞えた。

戸外はもう薄暗かつた。近所の牛舎で牛の鳴く聲がをり／＼聞えた。垣について裏に廻ると、葉が落ちて幹ばかりになつた栗の林が烟るやうに立つて居るのが見えた。向うの家屋の引窓から夕炊の烟が颯つて、もう燈火のついた家もちらほらした。多喜子はまだ歎歎けて居た。

『もう、ねえ、好い兒だから泣くんぢやないの。』かう言つて、後ろに負つた子を見かへるやうにして、『ホラ、上を御覽、お星様が。餘り泣くと、怖いよ。』

空には星がキラ／＼光つた。

四

乳は段々細くなつて來た。乳房も次第に黒くなつて、今までのやうに張り切つたみづ／＼しい暖かい皮膚の色はもう見られなくなつた。腹の中の兒の大きくなるにつれて、母親の姿も形も段々衰へて來た。母親の顔は青い時があつたり、赤い時があつたり、厭に煤氣立つて艶が失せたやうに見える時があつたりした。非常にはしやいで面白さうに見える時があるかと思ふと、今度はすつかりふさぎ切つて、黙つて一日口も利かずに居ることなどもあつた。多喜子のまつはつて來るのを殊にうるさがつて居るやうに見える時もある。

多喜子は以前よりも一層母親の後を追つた。母親の姿が鳥渡ても見えないと、すぐ聲を擧げて泣いた。

五

『本當に多喜ちゃんの氣難かしくなつたこと、何うしたつて言ふんでせうねえ、奥さん。』

婢も持扱つて時々こんなことを言つた。泣き出すと、何時までも泣き止まない。おとなしく遊んで居ることなどはもう尠くなつた。段々細くなつて來た乳でも、兎に角それに縋りついて居る中はおとなし

くして居るが、それを離れると、ちきむづかり出した。

ある親戚のお婆さんが言った。

『本當にお可哀相ねえ。後が出来ると、乳が何うしても細くなりますからねえ。少し牛乳でも上げて見たら何うですかねえ。おまんまももう柔かくして上げれば、上げて好う御座んすから、精出して上げて見るやうになさいませよ。後が早く出来ると、本當にお可哀相で。』

父親はまた母親に言った。

『お前、此頃、もう乳が出なくなつたんぢやないか。それで多喜子はあんなに難かしくなつたんだらう。此頃、何だか少し瘦せたやうだ。』

『まだ、出ないことはないんですがねえ。』

かう言つて、母親は胸をあけて、乳房をしぼつて見せた。元のやうに多くは出ないが、しかし少しは出た。

『成たけ離して乳を飲ませないやうにしなくつてはいかんよ。醫師に言はせると、後に子供が出来てからは、乳を飲ませてはいけないんだつて言ふよ。』

『さうですつてねえ。ちつと牛乳でも飲まして見ませう。』

勉の時に使つて、不用になつて、藏つて置いたミルクの罐を出した。罌と吸口とが何處へ行つたか見

當らなかつた。婢は多喜子を負つて、近所の場末の小間物屋へ行つてそれを賣つて、歸りに牛乳屋から牛乳を一合取つて來た。

多喜子は始めは何うしてもそれを飲まなかつた。母親も婢もいろく勧めて見たが、矢張りいけない。それを何うやらかうやら飲むやうにするのは容易でなかつた。母親は成たけ乳を飲ませないやうにした。すると多喜子は火の付いたやうに泣き出す。兎に角牛乳の罌の吸口に吸付かせるまでには、尠なからぬ骨折が要つた。後には、多喜子は罌を片手に玩弄にして、母親の顔を見ながら、拙さうにして飲んだ。

『何うでせう、あんな顔をして。』

婢はかう言つて笑つた。『矢張拙いんでせうねえ。本當のお乳に比べてはねえ、多喜ちゃん。……奥さん、お腹が空いたんですよ、御覽なさいよ、そら、もう、あんなに飲んで了つて……』

『これから、成たけ牛乳とおまんまで馴らすやうにしなければいけないからねえ。旦那様もさう仰しやるし、身體にも悪いんだつて言ふからねえ。』

母親はかう言つた。

六

『もう本當に多喜子には厭になつて了つた。』

母親は時々こんなことを獨りてつぶやくやうになつた。癪癪持になる、氣むづかしやになる。何ぞと言つてはヒュー泣く。今まで種々な藝を覚えて、可愛らしく發達して來た子とは丸で別な子のやうになつて了つた。今までの子供にもそれはいろ／＼な變遷はあつた。可愛くなつたり、氣難しくなつたり、厭になつたりした。智慧のつく毎に、常に子供の心持の推移をいろ／＼に其前に展げて見せた。しかし今度のやうな烈しいことはなかつた。

多喜子が晝寢をして居る時など、ぢつと靜かに裁縫の前に坐つて居ると、腹の中の兒が頻りに動いた。しかもをり／＼は針を留めて、ぢつと腹の處を見詰めて見るほどその動くのが分明と解つた。神經質になつた母親にはメリンスの帶の模様が動くやうにすら思はれた。すると、まだ生れぬ兒のことが頻りに想像されて來る。腹の中に居て、乳を呑んで居る兒——まだ見ぬ兒！ 針を運んでは止め、止めては又運んだ。晴れた日の山の手は靜かで、日の光が流るゝやうに庭先にさし込んで來た。物音と言つては、雀の百轉があたりの靜けさを破る位のもので、いつも通る物賣の聲も聞えない。次の間に寢て居る多喜子の小さい躰さへ微かにそれと聞取られた。

母親の心は絶えず動く腹の中の兒に引かれて居た。

其處に、小さい足音がして、遊びに行つた清が『母さん』と言つて障子を明けて入つて來た。おとなしく長火鉢の前に坐つて、母親のせつせと針を運ばせて居るのをぢつと見て居たが、やがて茶箆の上にあるボール箱の中から西洋きしやごを出して何か獨語を言ひながら弾き始めた。母親は子供等の順々に成長くなつて、段々世話の焼け方が違つて來ることなどを考へた。午になると、勉は學校から歸つて來て、肩にかけて雑囊をドサリと縁側に音させて置いて、汚れた足でドカ／＼と座敷へ入つて、

『母さん、何か。』

行儀が悪いといくら叱られてもたしなめられても、決してこの『母さん、何か』をやめなかつた。

七

腹の兒が目立つやうになる頃には、多喜子は常に険しい青い顔をして居た。みづ／＼した頬の艶などはもう見たくも見られなかつた。乳が出ぬので、ついろいろ／＼なものを食はせるやうになる。鹽煎餅、あんころ、果物、くづ湯——とりわけ甘いものを好んで食つた。むづかる時には、わるいと知りながら、つい傍にあるものを持たせて機嫌を取つた。段々暑い夏は近づいて來た。

其頃多喜子は腸を悪くして居た。汚いものをしくじつては、よくヒュー泣いて居た。母親も婢も、此頃ではもうほと／＼持餘して困り切つて了つた。いつそ里子にでも出さうかななどと母親は心から思つて、眞面目に父親に相談したことなどもあつた。

『物を食はせさへすれや好いと思つて、無闇に食はせるから、腸をこはすんだ。泣く方はいくら泣い

たつて、……子供は一體泣くもんだから構はんけれど、餘りいろくものを遣つて身體を壊しちや大變だから、注意しなければいかんよ。』

父親はこんなことを言つた。

癩癩は矢張強かつた。此頃ではもう覺束ないながらも立つて歩くことが出来るやうになつたが、しかし以前のやうに眼に見えた發達はしなかつた。『ねんね——ねんね』の次に、『うまく——うまく』を覺えて、次に、『かアア』から『かアちゃん』と何うやらかうやら母の名を呼ぶやうになつた。母親の胸へ行つた後までも追ひ懸けて、『かアちゃん、かアちゃん』と呼んで泣いた。瘦せたのが著しく目に立つて、曾て肥えて居た股のあたりも大分肉が落ちて居た。

ある日、體が焼けるやうに熱かつた。『奥さん多喜ちゃんが、大變熱がありますねえ』と婢が言つた。スヤ／＼と寢て居たかと思ふと、不意に眼を覺して、けた／＼と泣き出した。『風邪を引いたと見えるねえ。……でなくつてさへ、喧しくつて困るのにねえ、』と母親は暢氣なことを言つた。

下に寢て居ない時は、大抵は婢の脊に負はれて居た。

母親の顔を見て、恨めしさうにべそをかい居る時などもあつた。

今まで何んな物にでも手を出して、勉や清の持つて居るものをさへ欲しがつたのに、熱が出てからふつつりと物を食はなくなつて、あんこを持たせてやつても、それを喜んで取らうとはしなかつた。

『多喜ちゃんの體は熱いことねえ、奥さん。』

婢は度々母親に言つた。

母親も夜抱いて寢て、

『本當に熱いねえ。餘程熱があるねえ。粒甲丹でも飲ませて見ようか。』

かう言つて、寢卷のまゝで立つて、箆筒の底を捜し廻して、古い藥袋の中から金色や銀色をした小さい粒を五つほどスヤ／＼寢て居る多喜子の口の中へ入れて遣つた。

醫師にかけようと思はぬでもなかつたが、晝の中——殊に午前は何うかすると、めづらしく機嫌の好い時があつて、獨りて何か言つて玩具をいちつて遊んで居ることがあるので、その中には治るだらうなぞと思つて捨て、置いた。

それでも母親は時々頭に觸つて見た。熱は矢張あつた。

月の明るい晩であつた。近所に、村の若者達のする茶番があつた。其處は村の世話役か何かの廣い庭で、稻荷さんがその一隅に祀られてあつた。新開地に住む官吏の奥さんや軍人の奥さん達は夕方からぞろ／＼出かけて行つた。郊外の林を抜けて通る風は涼しく人々の袂を吹いた。酸漿提灯が二つ三つ樹の枝に釣るされて赤く見えて居る。婢は多喜子を負つて、丁度其時來合せて居たハイカラな姪と一緒に、涼みがてら見に出かけた。

見て居る間、婢は餘りおとなしい多喜子を氣にして、ゆすり上げるやうにして幾度か顔を覗いた。」
姪に、

『多喜ちゃん、何かしやしませんか、……餘りおとなしいから。』

姪は覗いて見て、

『何うもしやしないよ。顔を押付けてよく寝てるよ。』

何うも餘りおとなしい。それに體もかなり熱いし、夜風に當つては毒だからと、婢は姪がまだ見て居ようと言ふのを強ひて勸めて、夜の十時頃に月の明るい郊外の屋敷町を家へと歸つて來た。

家ではもう座敷に床が敷いてあつて、蚊帳の夜風に動くのが青く洋燈にうつつて見えて居た。母親はまだ起きて居る整子と縁側に涼んで月を見て居た。

庭の樹の影はくつきりと黒く地上に見えて居た。

父親は居なかつた。

婢は多喜子を寝かさうと思つて、そのまゝに座敷に入つた。さて、兒を脊からそつと下して、蚊帳の中に入らうとすると、突然、多喜子は身を戦はして、アツと言つた。同時に抱いて居た婢の腕には、小さい體の固く突張つたやうな一種の力を覺えた。

慌て、明るいところへ來ると、多喜子は白く眼を釣り上げて居た。

『奥さん——大變、多喜ちゃんがひきつけて——。』

けた、ましいい聲で言つた。

四邊の静けさは忽ちにして破られた。母親は唯その白く釣上げた多喜子の眼を見たばかりであつた。抱いたまゝ、婢が慌て、近所の醫師に走つて行くその後を趁つて、母親も姪も續いて走つた。

桑の繁つた影が黒く道に落ちて居た。ガサ／＼と玉蜀黍が夜風に戦いだ。小さな門の前に赤い軒燈が出て居て、衛生醫院——田野としてあつた。郊外の開けて屋敷町になるにつれて、此頃引越して來た醫師の家は畠の中にあつた。

中年の八字鬚の醫師は、立關の三疊に洋燈を持つて來させて、慌て、懸け込んで來た小さい患者を診察した。

多喜子は其時はもう氣が附いて、眼を大きく明いて居た。

『流動物ばかり上げるやうにしなければいけません、腸をこはして居るんですから、……ひきつけたのは、腸の熱でひきつけたんですから、腸を治すやうにしなければ駄目です。』

醫師はかう言つて聞かせた。

『誕生位で跡がお出來になると、何うしても腸を壊しますからな。』

多喜子はもうひきつけるやうなことはなかつた。しかし長い間腸を病んで居た。熱は除れたと思ふと出たり、出たと思ふと除れたりした。絶えず元氣の無い顔をして、大きな腹を抱へた母親の後を常に追つた。茶湯臺の傍にえんこをしては、母親が大急ぎで拵へて呉れるミルク罌の牛乳を待ち兼ねて泣いた。

八

夏も過ぎた。

秋も来てやがて暮れた。

落葉のある寒い朝、多喜子は婢に負はれて遠い處へ行つた。途中のある牛舎で、婢はミルクの罌を出して、牛乳を一合買つた。其の牛舎の家の傍には、長く取廻した柵があつて、牛が五六頭モー／＼と啼いて居た。霜解の垣根道に、薄黄い日が當つた。

ある家の格子戸を開けて入つて、婢は出て來た丸髻の莞爾した女に言つた。『奥さん、急いで行つて下さいまし、産氣が附いたやうですから。』

『さうかえ、ぢや今すぐ行くよ、彼方には誰れか行つてるのかえ。』

『私が来る前、産婆さんが見えて居ましたつけ。それに、お袋さんが昨夜から來て居ました。』

『ぢや、お前は今日は一日多喜ちゃんのお守だね。』

『傍に居ちや、お産婦さんも氣をもみなんすからなア。』

婢はかう言つて長火鉢の前に坐つた。

産婦の姉に當る未亡人は、支度をしてそこ／＼に出て行つた。

多喜子は未亡人の一人娘と婢とを相手にして終日長く遊んだ。牛乳も一合はぢき飲んで了つて、近所の牛乳屋から又一合買つて飲ませた。腸を病んでから、食物には嚴しく注意を拂つて居たが、消化の好いかステラや朝鮮飴などは常に食はせた。多喜子もいつの間にか段々食物にも馴れて來た。夏の頃のやうなヒステリックなところは此頃ではなくなつて、今でも母親の後を追つても、以前のやうに烈しく泣くことはもうなかつた。子供の發達——いかやうな迫害の中に居ても、自然に發達して行く子供の力といふやうなことを人々に思はせた。

次第に智慧もついて來た。

その一日は暢氣に遊んだ。其家の娘に負はれて、近所の牛モウ／＼を見に行つたり、娘の友達の家のお池の金魚を見せて貰つて、躍り上つて喜んだりした。娘は歸りに、角の玩具屋でピー／＼や人形を買つて呉れた。

『もう、多喜ちゃんは姉さんになつたでせうねえ……姉さんになつたらおとなしくするのよ。あんあん泣いたりなんかしてはいけないのよ。好いかえ、解つたかえ。』

幼

兒

『うむ、うむ。』

かう多喜子は頭を動かして見せた。

『よく解るねえ、多喜ちゃんは。……多喜ちゃんはもう姉さんなんだから、あんく、いやくよ。』

『あんく——いやく。』

多喜子は機嫌よく口眞似して見せた。

『さうく……お利口ねえ、おとなしくしますねえ、これからは。』

路行く人は、唯おんぶをした可愛い兒と頻りに無邪氣な會話をして行く鹿髪に結つた色の白い娘を振り返つて見た。

安産——女の兒といふ報知がやがてあつた。婢は午後四時過の日影を受けて、今朝來た路を家へと歸つて來た。

下へおろすと、母親を思ひ出すといけないと言ふので、矢張ねんねこで負つて居た。産室は奥の六疊にある。茶の間から通つて行く長い縁側の硝子戸には、冬の夕日が一面にさして、庭の山茶花の紅白の絞りが美しく見えた。子供等は大騒ぎをして一人々々産室の中を覗きに行つた。整子はまだ産れぬ中から、障子を明けて伯母さんに叱られたり、『子供は彼方へ行つて入らつしやい、今に好いね、さんを見せて上げますから、』と産婆に言はれたりした。鹽でお湯を使はせて居る時には、丁度勉強が入つて來て、び

つくりしたやうな顔をして、棒立に立つて、大きな枕をして寢て居る母親と微かな啼聲を立て、湯を使はせられて居る赤兒とを比べて見て居た。整子は逸早く近所へ吹聴して歩いた。

婢が多喜子を負つて夕日の當つた縁側の處に立つて居ると、産室から出て來た清は、莞爾と笑つて其處に來て立止つた。

『清さん、い、ね、さんが出來たでせう？』

婢が笑つてかう訊くと、

『何でい、あんなあかんぼなんか。』

かう言つて、婢の袖の處をすり抜けて活潑に向うへ行つた。

やがて母親は耳敏くも多喜子の聲を聞きつけた。

『もう、歸つて來たかえ？ 多喜子は？』

『え、歸つて來たやうだよ。』

傍に居た姉がかう言つた。

『おとなしくして居ると見えるねえ。』

『え、大丈夫ともねえ。』

『鳥渡、此處へつれて來て……』

幼

兒

婢はやがて呼ばれた。産室の障子を半ば開けて婢が入つて来た。母親は笑つて見せた。

『ほら、かアちゃん、居たてせう。』

かう婢は多喜子の顔を寢て居る母親の方へ向けて見せた。』

『かアちゃん。』

と多喜子は身をもがいた。

姉は母親の枕元にあつた朝鮮飴を一つ取つてやつた。

『かアちゃん、ねんねして居たてせう。かアちゃん。キーキ。』

かう言つて婢は縁側の方へ出て行つた。多喜子は別にむづかりもしなかつた。

夕餉の時には、下におりて、おとなしく婢に匙でお粥をやしなつて貰つて居た。それに、機嫌も好かつた。

姉は産婦の用を足しに其處へ来て、

『多喜ちゃん、本當におとなしいね。……これちや苦勞にしたほどのことはなかつたね。』

かう言つて通つて行つた。

夕方は整子や勉などと一緒になつて遊んで居た。今日買つて貰つたピイ／＼などを鳴らして居た。

清と勉とは、額を合せて、熱心に西洋きしやごを弾いて居た。

整子は急に、

『多喜ちゃん、ね、さんの處へ行つて見ませうねえ。』

かう言つて多喜子を負つて長い縁側を通つて産室に來た。産室には丁度姉も居なかつた。

母親の傍に寢かしてある赤兒の處に整子は多喜子を下した。

『ほーら、御覽なさい、好いね、さんでせう？』

多喜子は生れた兒と始めて相對した。しかし別に何の感覺をも起さなかつた。整子は、

『そら、好い兒でせう、そらお目目を明いて？』

かう言つて見せた。

向うむきに寢て居た母親は、子供等の氣勢を聞いて此方に向いた。其顔を見ると、多喜子はいきなり其方へ行つた。『かアちゃん、かアちゃん。』

其處に姉が入つて來た。

九

其前から、夜は婢が多喜子を抱いて寢ることにして居た。大分馴れては居たが、それでも夜寢る時と、

夜中に眼覺めた時と、朝起る時とは常にむづかつて泣いた。

枕元にはミルクの罐が置かれたり、甘薯のふかしたのが用意されてあつたりした。泣き出すと、吸口を宛がつてやつた。それでも猶泣き止まぬ時には、甘薯を持たせて何彼と賺した。

それによく粗相をした。家の人々が寝る時には、屹度一度づつ起して小便を遣つてやるのが例になつて居るが、此頃では咽喉を乾かせてよく湯や水を飲むので、何うかすると、夜中にぐすり遣つて居ることなども度々あつた。それも、其時は屹度身體を動かしたり、聲を立てたりするので、少し注意さへすればすぐわかるのであるが、眠い盛りの婢などにさうした餘裕を求めることは出来なかつた。

物干竿にかけられた濡れた蒲團や毛布に朝日がいつも當つて居た。

子供の多い家では、お宮まるりまでを暢氣に産室に送るなどといふことは出来なかつた。二七夜を過ぎた頃から、産婦はもう茶の間に出て来て働いた。新たに生れた兒は、古い肩掛で昆布卷のやうに巻かれて、母親の腕に抱かれたり姉の脊に負はれたりした。目をパツチリとあけて、指を遣つても目ばたきもせずに居る。

『本當に毛の濃いお子ですことねえ、』などとお祝に來た人々が皆言つた。

母親が長火鉢の前に出て居ることなどがあると、多喜子は屹度、『かアちゃん、かアちゃん』とめづらしい人を見付けたやうに遣つて來て、膝の上に乗つて、いきなり懷の中に手を入れた。流石にもう口を

當てようとはしないが、それでも乳首をいぢくり廻したり、新に張り切つた暖かい乳房に顔を押附けたりした。

母親は、

『これは、赤ちゃんのお乳ね。』

わざとこんなことを言つて、はだけた胸の襟を合せて藏つて見せる。生れた兒を抱いて、乳を飲ませて居る處に、多喜子がちよろ／＼と遣つて來て、めづらしさうにぢつと見て居ることなども時にはある。何うかすると、機嫌が悪く、癩癩を起して、母親の後を追つて困ることもあるが、大抵は平氣で、莞爾して居た。

『ねんね——赤ちゃん。』

などと言つて指して居る。

『よくしたものさね、赤ん坊が出来れば出来たで、何うかかうか廻つて行くものだねえ！……これて、本當に多喜ちゃんが、この夏頃のやうに難かしかつたら、それこそ本當に里子にでもやらなければ仕方がないんだけれどね。』

手傳ひに來た姉はこんなことを言つた。

けれど幼児の心は常に變つた。

満足して居る時には、おとなしく遊んで居るが、寒くなるとか飢じくなるとかすると、すぐ母親を思ひ出した。

母親を思ひ出すと、其膝に抱かれて居る赤兒を續いて思ひ出した。

母親が乳房をふくませて、赤兒を眠らせようとして居ると、多喜子は其傍に遣つて来て、びしやりと頭を打つて行つた。

またある時は、パツチリと開いた赤兒の眼に、あぶなく指を入れようとするなどもあつた。

段々寒くなるにつれて、朝晩は可哀相であつた。朝は早く目を覺した。暖かい床の中でもまだ一人では寢て居なかつた。多喜子は着物を着せて貰つて、母親の赤兒を抱いて寢て居る枕元に來ては常に坐つた。

『かアちゃん、ねんね。』

かう言つては泣いた。

大きい子供達を學校へ出して遣つて、中間の火燵に母親が赤兒を抱いてあたつて居ると、其時も屹度、多喜子は其處に遣つて來て、自分も一緒に抱かれようとした。赤ちゃんが居るからと、嚙んでふく

めるやうに言つて聞かせても何うしてもそれは解らなかつた。母親の體に寄りかゝつて、無理やりに膝の上に乗つて、冷たい手をその胸の中に入れた。

『しやうがない兒ねえ、本當に。』

母親はかう言つて、赤兒を傍の小さい蒲團の中に寢かした。

多喜子は喜んで、躍り上つて、飛びつくやうにして母親に抱かれて來た。

ある日、多喜子は赤兒のいつもする紅色木綿の小さい枕を母親の傍に持つて來て、何かわからぬことを頻りに言つて居た。

『おんぶするのcae?』

母親はかう言つて、抱いて居た赤兒を鳥渡下に置いて、其處にあつた結付紐を取つて、小さい枕を其の脊に負はせてやらうとした。

多喜子はイヤ／＼をして脊を外した。

『何うしたのcae、此の子は? おんぶしようと言ふのちやないのcae。』

母親は再び赤兒を抱き上げた。

多喜子は頻りにむつかりながら、その小さい枕を母親につきつけることを止めなかつた。

『何うしたのcae、本當に。それちや、多喜ちゃんがこの枕をして、ねんねをしようと言ふのcae?』

さうでもなかつた。

母親にも暫しは幼児の心が讀みかねた。
其處に婢が來た。

『奥さん、それは、赤ちゃんをその枕にねかせて、そして自分を抱いて呉れろと言ふんですよ。』

『まア……』

母親も呆れざるを得なかつた。

『本當に、多喜ちやんの賢いこと、……さうですね、かうするんですねえ、』と母親の手から赤兒を抱取つて、婢が其枕に寝かせてやると、多喜子は喜んで母親の膝の上に行つた。

『まア、ねえ、誰も教へなくてもねえ……何だか恐いやうな氣がするねえ。』

母親は深い淺間しい人の心を見たやうな氣がした。

それから多喜子はいつも其枕を母親の前に持つて來た。』

十一

冬も過ぎて春が來た。

子供の發達には障るものがなかつた。馴れるといふことには常に著しい發育が伴つて居た。』

梅の咲く頃には、多喜子ももう餘程大きくなつてゐた。鶯の啼聲の眞似をしたり、物賣の聲に耳を敏て、居たりした。智慧も段々ついて來た。此頃では日當りの暖かい縁側で、長い間獨遊びをして居ることもをりくはある。朝の飯の時など、大勢の子供に母親が手が廻り兼ねて居ると、多喜子は飯椀と匙とを自分で持つて、ぼろく／＼こぼしながら獨りて食つた。

げんげ

郊外に住んで居るかれは、辨當を抱へて、電車に乗つて、いつも濠の中にある大きな役所に勤めに行つた。大抵は洋服で、新しい帽子を冠つて、手にはステッキをついて居た。六疊、八疊、四疊半、二疊の借家住ひで、出かける時には、子供を生んでもうすつかり色の褪めた細君と二人の子供とがいつも上り端まで送つて出て来て、『行つて入らつしやいまし』と丁寧に後から聲を懸けた。

毎日五時になると、かれはきまつて役所から歸つて来た。常に父親の靴の音に聞き馴れてゐる七歳になる總領の女の兒は、五六間先から、そらお父さんのお歸りと飛んで出て來るのが例になつて居た。其頃には、細君は襷がけになつて、勝手に、夕飯の支度に忙しがつて居た。牛肉を煮る匂ひなどがいつも餓ゑ勞れたかれの食慾を刺戟した。

雇から段々立身して、今では四十圓ほどの月給取になつて居た。家賃が六圓、米代が五圓、主人の飲む牛乳が二圓足らず、薪炭、醬油、其他の雜費を合せて七八圓、毎月二十三日頃に月給がさがつて、そ

れから來月の十日頃までは、主人の財布にも細君の財布にも一二圓の剩つた金が入つて居て、時にはそれを出し合つて、子供を伴れて、賑かな町の方へ出かけて行つた。

かれの扮装はそれでも綺麗にしてあつた。月賦で買つた洋服、それをかれは自分で丁寧に刷毛で拂つた。靴も自分で上り端の處にある下駄箱から出して、クリームをつけて、絹布で拭つた。それに、かれは頭や顔に常に心を用ゐてゐた。道樂と謂つては他にないが、こればかりは他から見ても可笑しいと思はれるほどで、髪はきまつた理髮舗で刈り、上等な香水を身分不相應な高い錢を出して買ひ、西洋剃刀を傍に置いて、毎日のやうに顔を剃つた。

ネクタイとカラー、それにもかかれは浮身をやつした。流行の色や好みや、さういふものが西洋小間物屋の店頭に並べてあると、かれはいつも財布を倒にしてそれを買つた。『本當に、それが貴郎の道樂ねえ。まだあのネクタイなど綺麗ぢやありませんか。』細君は其まゝに捨て、あるネクタイを見て、いつもこんなことを言つた。しかし綺麗な顔や、キチンとした扮装を見るのは氣持が悪くもないと見えて、細君も別に深く咎め立てをしようともしなかつた。それに自分の夫に對する近所での評判もうれしかつた。『好い方ね、好い旦那さまねえ。』近所の細君達はかう言つていつも話し合つた。『奥さんとは、うつりがわるいわねえ。旦那さまが可哀相ねえ。』『あれで月給さへ餘計に取ると、それこそ大したものですけれどねえ……仕方がないものねえ。』こんな話がいつも近所の細君や娘達の口の上つた。

かれの朝に夕に通つて行く電車までの路には、西洋草花の見事に咲いてゐる大きな邸の花園があつたり、春は美しく咲揃ふ櫻の並木があつたり、毛氈を敷いたやうな綺麗な芝草の庭があつたりした。新たに開けた郊外には、新建の家が多く、中には大工がせつせと家を建て、居る處などもあつた。此方の丘から向うの丘へ行く處には、植木屋が角に一軒あつて、其向うは空地になつて居た。細い川には板橋が架つて居た。

その少し先は町の通りになつて居た。靴屋だの、菓子屋だの、豆腐屋だの、下駄屋だのが續いた。其處等の上さん達は、いつもかれの通つて行くのを見送つた。高いところにある電車の停留所でも、かれの姿はいつも女達の目を惹いた。

かれ等の生活は、平和に穩かに靜かに經つて行つた。事といふ事は一つもなかつた。夫婦の間柄も至極圓滿で、子供達も可愛く溫和しかつた。世の中にいろ／＼な事件や活劇のあるのは不思議に思はれる位であつた。新聞を透して見る種々の悲惨な事件や、恐ろしい罪惡や、思ひもかけない秘密や、さうしたものはかれ等には全く没交渉であつた。平凡を平凡とも思はずにかれ等は暮した。

細君は三番目の子を妊娠して、やがて男の兒を産んだ。それは脾弱な發達の十分でない瘦せた兒であつた。細君はまた細君で、産前に煩つた脚氣が治らないで、長い間、醫師にかゝつた。乳は生れた兒に

飲ませられなかつた。止むなく牛乳やミルク罐を買つて哺育した。四十圓取りの安官吏に取つては、これ等の費用は小さい打撃ではなかつた。かれは何うかしてその費用を得なければならなかつた。かれは郷里の先輩が大學の教授をして居るのに頼んで、寫字の口をさがした。かれは幸ひにも國語に就いての素養があつた。更に幸ひにも、その大學の教授は、神田あたりの大きな書肆の依頼を受けて、片手間に國語の大辭典の編纂をして居た。かれは毎週金曜日の夜だけそこに詰めることにして、毎月十圓の手當を貰ふ身となつた。

金曜日には、『今日はお父さんは遅いのねえ。』かう言つて子供達は早くから寝た。かれは大學の教授連や助手や書肆の編輯員などの居る洋館の二階で、明るい電燈に照されながら、夜遅くまで一隅に小さくなつて仕事をして居た。十時半が退出時間になつて居るが、仕かけた用事があつたり、教授連が雑談に身を入れて容易に歸らうと言ひ出さなかつたりして、時には十一時を過ぐることもあつた。郊外に歸る電車は、最終が十一時半で、其處から停留場まで十分を要する身には、時計が十一時の處を指すと、もう間に合はないかと氣が氣でなかつた。かれは走つて行つて、辛うじてその赤の電車に間に合つた事も一度や二度ではなかつた。

春先や夏は眠くもなつた。それを眠るまいと思つて辛抱するのは大抵な辛さではなかつた。一日役所の仕事に齷齪した體は、夜まで縛られて、歸ると、つかれ切つて綿のやうになつて居た。

かうして一年ほど経つた。

ある夜のことであつた。かれは十一時過ぎに編輯所の門を出た。其夜も教授連はくだらぬ話に笑ひ興じて居た。郷里の先輩は、「君の方は電車が間に合はないといけないから失敬したまへ、」と言つて呉れたが、さうかと言つて先に歸る譯にも行かなかつた。かれは門を出る時、時計を出して入口の電燈に照して見た。もう時間はいくらもなかつた。夏の初めの蒸暑い漆のやうな闇の中を衝いてかれは走つた。

電車はまだ來なかつた。かれは暗い停留場に立つて待つて居た。疲勞に伴つて起つて來る欲望がいつものやうに萌して來た。かれは家に寢て待つて居る細君を想像した。

轟と音して電車は遣つて來た。赤い電燈は佗しさうにあたりを照して、疲れ切つた車掌の顔をぼんやりと見せた。かれを載せると、電車はすぐ出た。

電車には客が二人乗つて居た。一人は法被を着た労働者らしい男であつた。一人は二三四位の、髪を庇髪に結つた、色の白い、何方かと言へば綺麗な女であつた。銘仙の派手な着物を着て居た。

かれは女の前に腰をかけて居た。氣が附くと、かれの眼と女の眼とは、時々宙に會つて居た。女は見ないやうにして、飽かずに男の顔を見た。

電車は全速力を出して走つて居た。労働者は隅の方に寄りかゝつて目をつぶつてゐるが、とある停留場に着くと、慌てゝ下りて行つて了つた。其處からは、誰も乗るものはなかつた。

車掌は終日の勞働に勞れ切つたといふやうに、車内に入つて來て、今まで労働者の居た一隅に腰をかけたが、襲つて來る睡魔に抵抗することが出來ないやうに、コックリコックリやり始めた。

女は猶頻りにかれの方を見て居たが、俄かに、

『代々木はまだで御座いますか。』

かうかれに向つて訊ねた。やさしい艶のある聲であつた。

『私も代々木で下りますから。』

『あら、ま、さうで御座いますか。』よろこばしさうに、『私はこちらの方は初めてで御座いますものですから。……』かう言つて莞爾と笑つて見せた。

女は絶えず笑を顔に湛へて居た。女の眼には、意氣なネクタイと綺麗な房々した髪とやさしさうな單純な色の白い顔とが映つた。女の顔にも疲れ切つて眠むさうな表情がそれとなく見えて居た。肉附の好い、膝のあたりの肥えた、好い艶の顔をした女であつた。

停留場をいくつ乗越しても、客は遂に一人も乗らなかつた。かれはかう夜遅く一人で電車に乗つて居る女のことなどは餘り深く考へなかつた。先程言葉を交した後は黙つて只相對して居た。かれは自分の顔の上をりり／＼注がれて來る女の眼の意味を解し得るやうな男でもなかつた。

電車は千駄ヶ谷を通り越して、やがて代々木に着いた。

女も後からつゞいて下りた。切符を受取る男は、電燈の明るいテーブルの上に突伏して、グウ／＼軒を立て、居た。

夜は暗かつた。空には星の光もなかつた。闇はあらゆる人間の秘密を深く包みかくして居るやうであつた。停留場から下りる階段には電燈の餘光が微かに照つて、せんだんの細かい葉の夜風にそよぐのがそれと見えた。下の雜貨店の雨戸はすつかり閉つて、よろづ荒物と書いた軒燈が淋しさうに闇に點つて居た。女は後を追ふやうにして跟いて來た。艶かしい聲は再びかれの耳に入つた。

『代々木に山谷といふ處が御座いますか。』

『え、……私も山谷に行きますから。』

『まあ、左様で御座いますか。』最初の時の會話と同じやうな調子で女は喜ばしさうに言つた。すぐ言葉を續いで、『御迷惑で御座いますけれど、御一緒に願へますまいか。』

『よう御座んすとも、……どうせ歸るんですから。』

かれは步調を緩くした。女は引添ふやうにして、小刻みに早く歩いた。靴の音とゴム草履の音とが絡み合つて、靜かな夜の空氣に響いた。

女の胸の鼓動の高いのが男にも知れた。かれは成だけ靜かに歩いた。角の交番の前を通る時には、巡查は怪しむやうにして二人の方を見た。

『山谷はどちらへお出でです?』

かれは暫くしてからかう尋ねた。

『二百十五番地ださうで御座いますが……中田と申すんですが。』

『二百十五番地——中田。』かれは考へて、『私の居ます處が百二十番地ですが、……どの邊になりますかな……何でも御料地の方でせう。』

『本當に遅くなつて、困つて了ふんで御座いますよ。』

今通つて居る處は、靴屋だの豆腐屋だののある町の通りであつた。大抵はもう戸を閉めて居る中に、一軒電燈がぱつと闇に照つて居る家があつた。それは菓子屋で、丸い硝子の饅やビスケットの大きな鐘などが並んで居た。

靴屋の角から曲ると、路はさびしく暗くなつた。女はいよく男に寄添ふやうにして歩いた。微かな夜風が通る度に、白粉の匂ひや香水の匂ひが男の鼻を撲つた。女は矢張スウ／＼と呼吸を高くして居た。坂を下りようとする處で、女は何物にか躓いたやうにアツと言つて轉んだ。一步先に行つた男は、『危い!』と思はず言つて引返したが、俯伏になつたまゝ女は容易に起きようもしないので、

『何うかしましたか?』

かう言つて、顔を傍に寄せて見せた。女は呼吸をはずませて居た。

『何うかしましたか？』

かれは覗くやうにして、もう一度かう言つて見た。

『いゝえ、別に……』

女の聲は微かてそゝるやうな聲であつた。かれも流石に胸を躍らした。兎に角起してやらうと思つて、女の肩の處に手をやると、女は右の手で、しつかと絡みつくやうに男の體に寄りかゝつた。暖い柔かな血が二人の體を動搖させた。

起き上りざまに、女は男の手を堅く握つた。其時女の艶に笑つた顔が闇にもそれとあざやかに見えた。

……火と水とが俄かに一緒に襲つて來たやうな氣がした。二つの黒い影が纏れ合つて、だら／＼坂を下へと並んで下りて行つた。水の音が微かに靜かにやさしい夜の音楽を奏でて居た。橋を渡ると、其處に毛氈を敷いたやうな草場があつた。

『送つて行つて上げようか。』

『いゝえ、大丈夫ですよ。』

『でもかう遅くつては、訊く人がないと困るでせうから。』

『いゝえ、本當に大丈夫よ。』

女はそは／＼して居た。男から何か訊かれるのを恐れるやうにも見えた。其處から十間ほど行くと、路は二つに岐れて居た。

『では、私は此方へ参りますから。』

一刻も早く別れるのを女は望んで居た。男は新しい驚きを重ねたやうに、かう忽卒に別れて行く女を見送つて居た。

『では、左様なら。』

『左様なら。』

女は足早にスタ／＼と向うの方へ歩いて行つた。かれは喪心した人のやうに、ちつと其處に立盡して居た。女の足音も遠くなつて、遂には聞えなくなつて了つた。ふと氣がつくと、かれも家の方へ無意識に歩いて居た。

悪夢に襲はれたやうな氣分で、かれは家の門の戸を明けて入つた。細君は眠むさうな顔をして、ランブを手にして迎へに出て、かれの脱いで上つた靴を下駄箱の中にしたつた。

長火鉢の前に不思議な顔をして、黙つて彼は坐つて居た。細君はいつものやうに、其處で夫の脱いだ洋服を疊みに掛つた。不意に、『何うしたの？ 貴方、大變泥がついてゐるのね。何處かで轉んだんですか。』

『うむ。』

げ ん げ

かれは生返事をして、『まあ、疊まないで、其處等にかけて置く方が好い。』

『さうませう。大變に泥がついてゐる。ほらズボンにも上着にも。』細君はかう言つて、それを衣紋竹にかけた。

其夜はかれは容易に眠られなかつた。二時を聞くまで床の上に輾轉反側してゐた。

朝、目が覺めると、昨夜のは、あれは夢ではないかと思つた。しかし夢ではなかつた。洋服が其處に懸つて居た。

かれは起きて、上着やズボンを調べて見た。泥は其處此處について居た。かれは思ひ出して、不思議な笑みを顔に湛へた。

自分の體が何うかなつて居やしないかとも思はれた。何處の誰だか知れない女……自分の肉は腐れて行きはしないかと言ふやうなやないやな気分にもなつた。一方ではまたそれが非常にめづらしくなつた。自己の今まで夢にも知らなかつた世界が其前に開けたやうな氣もした。二百十五番地の中田、今朝はまだ屹度其處に居るに違ひない、行つて尋ねて見ようかとも思つた。別れ際の女の冷淡な態度も、かれには不思議に思はれてならなかつた。

いつもの様子と違つて居るので、細君は三度まで、『貴郎何うかなすつて?』と訊ねた。其度毎に、かれはズツとした。われとわが身を振返つて見た。

其女と細君との關係を併せて考へて見たりなどした。今までは、かれと細君との間には秘密といふものはなかつた。細君一人を守つて他に女などを知らなかつた身には、何だか昨夜のことが非常な罪惡であるやうにも考へられた。かういふ風に、男が細君以外の女に關係を持つといふことは、かれには少くとも一問題として考へなければならぬ事實であつた。

別れた路の角から、停留場に至るまでの間は、鮮かにかれの前に現はれて見えた。かれは朝飯をも沈黙の間に濟ました。やがて出勤の時間が来た。

かれは刷毛で洋服を拂つた。ズボンに附着した泥は容易に除れなかつた。

朝は美しく晴れて居た。植木屋の松が蒼い空に見事に聳えて居た。やがて女に別れた路の角に来て、かれは鳥渡立留つてあたりを見廻した。

『まだ其處に居るに相違ない。』

かれはこんなことを思つた。

草場には露が朝日にキラ／＼と光つて居た。夜の秘密が此處に潜まうとは何うしても思はれぬやうな明るい日影があたりを照した。川は依然としてさゝやかな音を立て、流れた。

昨夜女の轉んだ跡を捜すやうにして、かれは下を見ながら、坂を登つて行つた。何も落ちては居な

つた。其の箇處もはつきりとはわかぬなかつた。靴の跡もゴム草履の跡もなかつた。

何時も見知り越しの此處等に住んで居る人達は、洋服を着たり、羽織袴をつけたりして、彼方此方の巷路から其姿を現はして、停留場の方へと出て行つた。角の門構への家からは、相變らず綺麗な女學生が紫のメリンスの風呂敷包をかゝへて學校へ出かけた。

通りでは、靴屋の亭主はいつものやうにせつせと靴を拵へて居た。交番の前には巡査が立つて居た。これが此のまゝで終らうとは、かれには何うしても思はれなかつた。かれは再び逢ふ時を豫期した。

何處かで屹度逢ふに相違ない。愛嬌に富んだ黒い眼、房々した髪、それをかれは常に明らかに眼の前に描き出した。役所の忙しい仕事の中でも、時々それを描いて見た。……ゆくりなく途中で逢ふ、オヤと言つて聲をかける、それから戀人か夫婦のやうにして一緒に歩く、別れてからの話をする、何處かに行く……氣が附くと、いつもこんなことを際限なく想像して居た。

代々木にその知つてゐる人の住んで居るといふことが、殊に有力な豫期をかれに與へた。東京の何處かに住んで居る女は、屹度また此處に遣つて來るに相違ない。林の角、路の角、町の角、垣の角、何處かで再びその笑顔を見るに相違ない。かれはかう思つて毎日その路を通つて役所に出かけた。

金曜日の夜は、殊にさうであつた。電車に乗る時には、屹度、其女がその一隅に腰をかけて、自分の乗つて來るのを待つて居るやうに思はれた。しかし其希望はいつも徒らに過ぎて行つた。

二百十五番地の中田といふ家を訪ねて、それとなく其女を探らうと思ひ立つたのは、それから二月ほど経つてからのことであつた。これまでもかれはそれを思はぬではなかつた。時々はそれとなく家を探つて見ようとも思つた。しかし、いつもそれを實行する氣分にはなれなかつた。

夕飯を済してから、細君には内所で散歩をしようとつて、獨りて出かけた。夏はもう暑くなつて居た。浴衣を着た人がぞろ／＼と街頭を通つた。

かれは其番地を彼方此方と搜した。其處は丁度丘の蔭になつて居るやうなところで、要垣やら、芝草の土手やら、冠木門やらが長く續いた。中田……成程其處にその名の記された軒燈の出で居る家があつた。かなり大きい門構への邸で、裁込の高野槇や、椎や、八つ手や、寒山竹などが外からも見えた。二階には硝子戸がはまつて、籐椅子が置いてあるのが眼に入つた。

女關から入つて、それを訊くやうな心持には容易になれなかつた。かれは其前を行つたり來たりした。最後に、思ひ切つて、かれは門のくゞりを明けた。

鈴の音がけた、ましく鳴つた。

書生が出て來た。かれは顔を赧くして、二月ほど前に夜遅く此處をたづねて來た女のことを訊いた。

『あまりに雲をつかんだやうな話で御座いますけれど——』かう言つたかれは幾度かどもつた。

書生は一度奥に入つて行つたが、暫くして出て来て、『何うも解りませんさうです。……二月ほど前に夜遅く来た女などないさうです。名前でもわかりますと、見當がつかませうけれど……何うも解りかねます。』かう言つて、怪しい男でもあるやうに、じろく〜とかれの顔を見た。かれは要領を得ずに歸つて来た。女は果して眞實を言つたか何うか、それもやがては疑問の一つになつた。——時は段々經つて行つた。雨の降る日にも、風の吹く日にも、かれは其草場に添つた路を通つて、停留場の方へと歩いて行つた。かれはもう以前のやうな快活な氣分を失つて了つた。かれには世の中が一種の謎のやうに思はれ出して来た。解すべからざる神秘——意味のない神秘が、突如としてかれを襲つて、平和と平凡とに安んじて居たかれの生活を粉微塵に碎いて行つて了つた。

秋はやがて来た。さびしい雨が郊外の大きな樺の林から涙のやうにバラ〜とこぼれて落ちた。霧が一面に野をこめて、朝日が灰色に曇つて見えた。蟲の音も絶え〜に、やがては野分が凄じい勢で、野の草を薙ぎ倒した。

細君や子供を伴れて賑かな町に出懸けて行くやうなことはもう稀になつて了つた。かれは黙つて物を考へるやうな人になつた。

草場には草が枯れたり萌えたりした。雪が一面に白く埋み盡して居る朝もあつた。春はげんげが綺麗に咲いた。

拳銃

『お前も馬鹿なことを言ふねえ、己にそんな眞似が出来ると思ふのか。』

『いゝえ、さうちやないんですけれども……』と妻は夫が眞面目になつたにも拘らず猶笑つて、『それやそんなことはないのは知つてますけれど……魔がさすといふことがありますからねえ。』

『魔がさす?』

馬鹿なと言つたやうな調子で、夫は笑つて妻の肥つた丸い顔を見た。

『だつて、此方でいくら大丈夫でも……向うで熱心なら何うなるか解りやしませんからねえ。』

『向うで熱心かねえ?』

『それや熱心ですとも、先生、先生つて、貴郎が戦地に居る間、どれほど口癖に言つて居たか解りやしませんよ。貴郎も手紙をよくよこしたちやありませんか。』

『それやよこしたさ。先生が弟子に手紙をよくこしたつて、何でも無いぢやないか。』

『それや何でもなければ……』

『お前そんな馬鹿なことを言つて人に聞かれたら何うする。種子に聞かれても恥かしいぢやないか。』
妻は今年産れた兒に、胸をひろげて、乳を吞ませながら、

『だから私は何とも思つて居やしませんよ。貴方と種子さんとは別なんだから……普通の人間の心持ちや解らないんだから。』かう言つて笑つた。

妻の心と、自分の心と、種子の心と、かうも違つて居るのだと夫は思つて黙つて了つた。鐵瓶がグラグラ煮え立つて、湯気が上つた。午前の十時、秋の晴れた朝日が次の座敷に流るゝやうに射し込んで居る。勝手元からは下女の跡仕舞をする音がをりゝ聞えて來る。

夫は猫板の上の藥罐を取つて、鐵瓶に水をさした。兒は赤い頬を母親の柔かい乳房に當て、半は眠りながら、スバ／＼吸つてはやめ、吸つてはやめしてゐる。

『でも此間も、皆なが言つてましたよ。停車場へ迎へに行つた時も、種子さんの様子つて無かつたつて……一體あの人、誰れにでも變な眼附をしたり、様子をしたりしますのねえ。何か言ふと、あらまア奥さん……なんて言つて、袖で……』と袖を羞かしさうに口に當てる眞似をして、『かう遣るんですもの、二十一にもなつて、あんな眞似はしないといんだけれども……』とまた笑つて、『今度見て御覽なさいよ、屹度しますから……』それに、眞直ぐにちやんと坐つたことはつひぞなくつてねえ、いつも屹度横にだら

しなく品をして坐つて居ますのねえ。だから、刑事につられたり、鎌田さんには、あれは好い家庭に育つた娘ぢやないなんて言はれるのですよ。』

『それや、お前なぞの時代の娘とは違ふからねえ。』

と言つたが、『まア好いよ、そんなこと何うでも……』と夫は立つて座敷に行つた。

座敷の一隅に、軍用カバンと行李とが置いてあつた。軍用カバンには、白い漆で第二軍從軍寫眞班と書いてあるのが際立つて見えた。かれは四五日前に、戦地から歸つて來たのである。寫眞班附の從軍記者として、第二軍の上陸當時からつい半月以前の遼陽陷落まで、雨に濡れ、風に曝され、砂塵に塗れ、炎熱に苦しめられ、ある時は砲彈の破裂する高粱畑の掩壕に半日を送つたこともあれば、蠅の多い病院の一室に熱を病んで寢て居たこともあつた。停車場に迎へに行つた時、人々は頬はこけ髭は生え體は瘦せたかれの姿に一方ならず驚かされた。『何うしませう、奥さん、先生があんなにお瘦せなすつて?』と種子は細君に言つた位であつた。

今日は社を休んで、少し四邊を整理しようと思つて、主は軍用カバンと行李とを明けた。中には手帳、書籍、水筒、道明寺糯、雜誌、手紙などが一杯にごたく／＼と入れられてある。拳銃が一箇、彈丸を入れ

た革の箱と一緒に其隅にあつた。
主は書籍と雜誌とを整頓して、次に手筒を揃へた。種子から來たのが一番多かつた。細い器用な達者

な字で、すら／＼と書いてある。紫インキで走り書きにした端書も二三枚交つて居た。かれは其手紙を別にして揃へて見た。一つ／＼何れにも記憶のないものはない。廣島の汚ない旅館の生活から、上陸當時の荒涼たる砂埃、楊の樹のかげのさびしい支那民家、村夫子らしい支那人の顔、砲兵陣地の凄じい土烟、朝の忙しい行軍まで、其手紙についての種々の記憶と共に新しく眼の前を通つた。ことに野戦郵便の初めて開けた日のことがはつきりと頭腦に残つて居る。丁度其時は夕暮であつた。管理部から懇意な軍曹が來て、『寫眞班にも手紙が澤山來て居るから取つて來給へ、』と教へて呉れた。かれは班員の一人と野を越えて行つた。野には夕日がさし渡つて、その餘照を受けた楊が司令部のある村にこんもりと茂つて、民家の灰色の土壁の前に、歩哨が銃を肩にして立つて居るのが小さく明かに見える。受取つた手紙の中には果して種子のが一通入つて居た。歸りには近道をして、淺い砂川をザブ／＼涉つて來た。川には赤い雲が映つた。

今一つかういふ記憶がある。大石橋の戦が濟んでからである。軍は暑い日を毎日々々前進した。郵便を受取る暇がない。處がある日前方の都合で、司令部は一日ある所に滞在することになつた。管理部の行李が後から追付いて一緒になつた。かれは一番先に其處に行つて郵便をさがした。野の末の褐色の路に、管理部の行李が幾つとなく並んで、カーキー色の服を着た軍曹や上等兵や傭人が傍の楊の蔭の涼しい處を選んで寝ころんで居る。郵便は寫眞班の行李の中に入れられてあつた。種子の手紙を歩きながらかれは讀んだ。

遼陽の戦後、戦死した士官の隠袋に女の手紙が血に染つて入つて居た。身につまされて悲しい氣がした。かれの汚れた隠袋にも矢張女の手紙が入つて居た。

手紙の中には妻からのもの無論交つて居た。

それを整頓しながら、かれはふと、

『難かしい問題だ!』

と思つた。

『そんなことがこの己に出来るか、』と續いて考へて、『けれど何が恐ろしいと言つて、自然から來る災害ほど恐ろしいものはない。自然の力に向つては、人間は何んなことをするか解らない。自分では飽まですれと戦ふつもりで居ても、いつの間にか負けて了ふ。……妻の心配するのも無理はない。』

『自分は妻に向つて、己にそんな眞似が出来るかと言つた。確かに眞面目で言つた。けれどこれを自分は誓ふことが出来るか。』

かれは時々暗い心を起した。妻の死を考へることもあつた。今、妻が……妻が死んで呉れたら……

……妻が死んで、この身體が自由になつたら……

其周囲を種々の空想やら幻像やらが旋風のやうに早くく通つた。妻を毒殺した夫、夫を毒殺した妻、盲目なる自然の力に餘儀なくされた罪惡を頭腦に浮べて見てゾツとした。

妻が兒を寝つけて其處に來た。

『種子さんからの手紙がまアこんな……』

と突然整頓した手紙を取つた。

『まア、そんなもの見たつて仕方がない！』

夫が奪はうとすると、『好いぢやありませんか、見せたつて……』と、妻は急いでそれを後にかくして笑つた。

夫はがらんとつたやうな頭で、妻が手紙を展げるのを見て居た。

妻は封筒から手紙を出しては展げて見て居る。人の心の明かに見えるのは、手紙に若くはないといふ風で、平生の無頓着にも似もやらず、ある秘密を其處から發見しようとするかのやうに、一つく、熱心に忠實に讀んで居た。

別に意味があつたのではないが、丁度一通の手紙を半ば讀まうとしてゐる時、

『まア、そんなもの何時まで見て居たつて仕方があるもんか！』と言つて、夫は手を延して引奪つた。

『あれ、鳥渡、お見せなさいよ。大變なことが書いてあつた！』

と、顔を真赤にして、妻はそれを取返さうとする。

『大變なこと！ 何が大變なことが書いてあるものか。』

『まア、好いからお見せなさい！』

と言つた妻の顔は眞面目に眼は据つた。

夫が頓着なく手紙を藏はうとするので、

『ちや、疑はれても仕方がありませんねえ。』

『疑ふも疑はれるもありやせんぢやないか。馬鹿々々しい。見るなら見ろ！』

と投げて遣る。

妻は眼を睜つて、

『まア、こんなことがありますよ、——先生も餘り水臭いの何のつて、呆れるねえ、種子さんにも……』

……

それは別に呆れるやうな手紙ではなかつた。種子の一身上の將來について、少し意見を言つて遣つた其返事である。で其譯を細々と夫は話した。けれど全く腑に落ちるやうに話すのには容易でなかつた。

『だつて餘りですなえ。弟子の身で先生に向つて、水臭いのなんのつて……』

『どうせ、お前には解らんよ。』

『解らなくつても、何でも好いから見せて頂戴！』
『勝手に見ろ。』

と夫も妻のわからずやに呆れたといふ風に、其處にある種子の手紙を皆な押しして遣つた。妻は熱心に展げて讀んで居る。

少時経つた。

やがて、夫が、

『何うだ、何か面白いことがあつたかね？』と皆な讀んで了つたのを見て、わざと笑ふと、

『餘りですよ、種子さんも……』

『何が餘りだ？』

『だつて、先生に向つて、水臭いのなんのつて……私、吃驚した。』
と前のことを繰返して居る。

夫はそら見たことかといふやうな勝誇つた態度で、軍用カバンの中から、いろ／＼のものを出して其處に並べた。遼陽で拾つて來た砲彈の破片、露西亞語の小説雜誌、記念の爲めにわざ／＼持つて來た道明寺繻、それからクロバトキン將軍の宿舍の庭で拾つた女のリボンなども出した。最後に拳銃を取出したのを、細君は手に取つて見て、

『これは彈丸が入つて居るのですか？』

『いや——』

『これを打つたことはありませんか？』

『たうとう打つたことはなかつた。』

『ぢや持つて歩いたばかりですなえ。』

『さうさ、重い思ひをして持つて歩いたばかりさ。けども戦地ではいつどんな眼に逢ふか知れないから、こればかりは身から離されなかつたさ。遼陽の宿舍で、一發も打つて見ないではつまらんからつて、皆が揃つて打つて居たつけ。』

『無駄なことをしたもねえ。』

と妻は笑つた。

『でも、これでも持つてると持つてないでは、心丈夫さが違ふからねえ。』

『それはさうでせうとも……』と言つて、妻はある事を思出して、

『これはねえ。貴方、宅に置く方が好い。盜賊の用心になつて好う御座んすから。姉さんの家にも一箇これと同じやうなのがありましたよ。義兄さんが死んでから袋町に一人で住んで居る時分よく盜賊の用心にするんだつて、彈丸をこめて、高い棚の上に置きましたよ。いつかなんぞ夜中に郵便々々つて戸

を叩く奴があるんですつて。時計を見ると、十二時頃なんですつて。今時分、郵便の来る筈がない。あやしいと思つたから、宅にはピストルがあるから、入るなら入つて見ろ！ つて言つてやつた相ですよ。するとすぐ行つて了ひましたつて……』

『ピストルで女が盗賊を追つてやつた話はよくあるさ。』

『宅に取つて置くと好う御座んすねえ。』

妻はいちくり廻して居た。

夫はやがて手に取つて、弾丸をこめた處をぐる／＼廻して見て、なんの氣もなく引金を起して——これは遼陽を出發する時、途中萬一の災厄を慮つて、弾丸を三箇入れて來たことを全く忘れて居た——それをパチンと落した。と驚くまい事か、妻の方に向けた筒先から、煙と共に火が出て、凄じい音がした。瞬間、只瞬間であつた。妻が顔を反ける暇もなく、夫がはつと思ふ間もなかつた。二人の心には此の時言ふべからざる恐怖と戦慄とが烈しく襲つて通つた。幸ひ弾丸は妻の頭の上五六寸の處を過ぎて、唐紙を打通して向うに行つて了つたが、二人は眞青になつて顔を見合した。

暗い恐ろしい或物が二人の暗い心を更に一層明かに二人の間に展げて見せたやうな氣がした。これで妻を殺したなら……と夫は思つて戦慄した。妻はかうして自分を殺す氣が夫にあつたのではないかと思つて戦慄した。

あ る 死

整次が起きた時には、風雨が凄しく闇に荒れて居た。

『ひどいしけだね。』

かう聲をかけながら、かれは流し元の方へ歩いて行つた。乳を搾る男はもう一時間も前に起きて、ボンヤリした洋燈の光の下で、大きなバケツを牝牛の乳房に當て、居た。乳房からは乳が流れるやうに落ちた。

整次は今一度聲をかけようと思つたが、平生無口な男なのを知つて居るので、其儘黙つて自分の仕事に取懸つた。しぼつた牛乳を大きなバケツから更らに幾つかの小さな罐に分けて、それを運搬車に載せて、毎朝得意先に配達して行くのがかれの役目であつた。

整次は此處に來て、もう一年ほど同じやうな労働を續けて居た。かうした青年にはめづらしいほど堅い男で、女郎買に行くではなし、買食ひをするではなし、近所の婢達にからかつて見るではなし、毎月

貰ふ幾らかの給金は、ちやんと郵便局に持つて行つて、それが好い加減の高になると、きまつて故郷の一人の母親の許に爲替にして送つて遣つた。

『整次さんのやうにしても詰らないねえ。』若い上さんはいつもかう言つて笑つた。

風雨は今が絶頂かと思はれるほどに烈しく凄じく荒れ廻つて居た。向うの家の周囲の樺の樹は、潮のやうに鳴つて、物のへし折れる音や、垣の倒れるやうな響が其中に交つて聞えた。ドシヤブリに降つて居る雨の音もそれと解らないほど強く強く風が吹いた。今一吹き烈しく吹いたなら、屋根も、家も、樹も、すつかり吹飛ばされて了ふかとさへ思はれた。

整次は大きなバケツから小さな罐に牛乳を移しながら、をり／＼手を留めては、屋上を吹き荒るゝ風雨の音に耳を傾けた。しかし別段それが氣になつて居るのでもなかつた。心は寧ろ故郷の母の許に飛んで行つて居た。あと一月ばかりすると、かれは國に歸ることになつて居る。國では、貯めた金で、小商賣をすることに決めてあつた。昨日もかれは不用な着物を小包で國へ送りかへした。

子供の時分泳いで遊んだ川や、涼しい樹の蔭や、母の笑顔などが風雨の凄じい音に纏れ合つて、かれの眼の前を通り過ぎた。しかし丈夫さうな腕と體とは、絶えず無心に動いて居た。乳を搾る男の許から運んで來た大きなバケツも、段々空になつて行つた。

郊外の小さな牛舎では、婢も置いてなかつた。若い肥つた達者な上さんの起きた時には、それでももう餘程風雨が晴れ氣味になつて居た。夏の曉はそろ／＼明け始めて、戸の隙間からは、黎明の光が明るく見えて居た。モウ／＼と牛の鳴く聲が聞えた。

勝手元に入つて行つた上さんの口から、『まア大變!』と言ふ聲が聞えたので、整次は急いで走つて行つて見た。板葺の屋根が半分めくられて、自然に明いた引窓からは、板片や木の葉や木の枝が其處等一面に足の踏所のないほどに散らばつて居た。竈も鍋釜も板の間も全く雨に濡れて居た。

『これちや御飯も焚けやしない!』

上さんはこんなことを言つて、呆れたやうに棒立に其處に立つて居たが、それでも飯を焚かすには置かれないので、整次があたりを片附けるのを待つて、引窓を閉めて、竈の下に火を焚き附け始めた。しかしぬれた竈は容易に火が燃えつかかなかつた。煙が渦のやうに勝手に充ちた。

整次は罐の入れ替への方を濟まして、今度は表の戸を明けた。もう夜はすつかり明けはなれて居た。前の邸の建仁寺垣が見事に將棊倒しになつて居たり、空地の大きな栗の樹が根こぎになつて倒れて居たりするのを見た。かれは今更に風雨の烈しかったのに眼を睜つた。しかし幸ひにも空はいつの間にか拭つたやうに晴れてゐた。びしよぬれに濡れて車を曳いて行かなければならないと思つてウンザリした先程の考へも、これですつかり打消されて了つた。かれは何とも言ひやうのない生々した愉快な心持になつ

て勢よくいつもの處から運搬車を引出した。

『好い天氣になりましたぜ！』

勝手元の傍を通る時、かれは上さんに向つてさも心持好さうに聲をかけた。五升入、八升入、一斗入などの鐘を六箇ほどかれは運搬車の中に積み入れた。草鞋の新しいのを一足出して来て、帳場の上り端に腰をかけてそれを素足の上に穿いて、穿き加減を試めす爲めに、二三度土の上を力強く踏んで見た。『これで大丈夫。』かう口の中で言つて、今度は車の方へ行つた。

其時、奥から上さんの聲がした。『整さん、御飯が出来たよ。』

で、勝手元へ行つて見ると、七輪にかけた鍋からは湯氣が白くあがつて味噌汁の香ばしい匂が朝の食欲を誘ふやうに匂つて来た。かれはいつものやうに、膳と椀と箸とを出して来て、其處に腰をかけたが、傍に置いてある大きな飯櫃から飯を盛つて食つた。

『随分ひどい嵐だつたね。』

『本當に……一時は家が飛ぶかと思ひました。』

『別に何處も何うもならなかつたかね、家では？』

『其處の家根だけで、外には何うもなつてゐないやうです。前の栗の樹は倒れて了つたですよ。』

『さうかね、あの栗の樹が……』かう言つて上さんは驚いたやうに眼を睜つて、

『ちや、餘程大きな嵐だつたんだね？』

整次は體を延して、鍋から二杯目の味噌汁を盛りながら『まあ、こんな嵐は珍らしい。……損害が随分多かつたでせう。』

『一體、いつ頃からひどくなつたんだえ？』

『十二時半ごろからです。一時、二時頃が一番ひどかつたやうでした。私が起きてからも、家が持つて行かれやしないかと思ふやうな時が二三度ありました。』

『でも晴れてよかつたね。』

『え、本當に……氣分が清々した。』

飯を食つて了ふと、整次は、

『ちや、お上さん、行つて來ます。』

かう元氣よく言つて、運搬車の處へ行つた。ガラ／＼と威勢よく駛つて行く車の音が後ろに聞えた。

もう朝日が前の樺の森の中に紅く昇つて居た。空は曇したやうに碧く晴れて、嵐の名残の淡い雲が吹切られて綿の様に早く／＼飛んで行つた。樹の梢には風がまだ音を立て、居た。

垣は其處此處に倒れて居た。檜の樹の並んで倒れて居る處などもあつた。この春時分、よく牛乳を配

達した邸では、裏門が半倒れて、いつもは見えない井戸だの、外流しだの、硝子の嵌つた勝手口だのが見えた。其處に使はれて居た婢は、年は十八で、色は黒いが、小づくりな、鳥渡愛嬌のある可愛い娘であつた。その婢は子供を伴れて、よく牛モウくを見せに遣つて來た。紅いメリンスの帶や、島田に結つた後姿や中形の派手な單衣などがいつも整次の眼に附いて居た。

倒れかけた門を避けて通らうとして、ふと其處に其の婢が襷がけになつて水を汲んで居るのを整次は見た。

『お早う!』

かうかれは聲を懸けて通つた。

一夜暴れた風雨の跡は其處にも此處にも見えた。豪雨に洗はれた道路には、石が出て居て、それが車の轍にきしつて鳴つた。ある家の小屋は、誰れか力のある人でもそつと持つて來てそつと其處に置いて行つたといふやうに、道路の真中に幅をして吹飛ばされて居た。

荒物屋の前では、若い上さんが眠むさうな眼をして、前の戸を明けて居た。路の角では、近所の工場に出勤する労働者の群が、ガヤ／＼と何事か語り合ひながら通つて行つた。

此方の屋敷町から向うの屋敷町へ行く間には、緩い長い坂が電信柱に縁取られて、ずつと遠くつゞいて

ゐた。坂の下の低地は、まだところ／＼空地になつて居て、其處からは左へ續く平地から向うの丘に連なる竹藪やら、新建の家屋やらが晴れた碧の空にレリーフでも見るやうに見えてゐた。高い處を輾る電車の音がはつきり耳に立つて聞えて來た。

晴れた広い地平線を見た整次の胸には、愉快な、生々とした、生効のあるやうな心が脈々として波を打つて居た。若くつて壯健なかれに取つては、今の艱難な生活などは何うでもないやうにすら思はれた。かれの體には元氣が充ちてゐた。

法被に半股引を着けた整次の姿は、朝の晴れた空氣の中に鮮かな輪廓を見せて、長い坂を勇ましく向うへと走つて行つた。坂を下りてまた上ると、同じやうな屋敷町がつゞいて、やがて御料地の藪に突當つた。

それについて、猶曲つて行くと、栗と櫨の疎らな林があつて、片側には芝草の土手だの、大きな門だの、建仁寺垣だのが並んで續いた。一方の藪地には、葎だの萱だの薄だのの中に露草が交つて咲いて居た。

かねて見知つてゐる近所の牛舎の配達が向うから遣つて來た。

『お早う。』

『お早う。』

かう挨拶を取交したが、配達の方は振返つて、『其處に電燈線が切れて居るから注意して行き給へ。』

『難有う。』

かう言つたが、かれは別にそれを氣に留めようとしなかつた。

其處からはまた御料地になつてゐた。一番外れの坂の上の家は、大きな門構への新らしい二階屋であつた。硝子戸が立派に取廻してあつて、形の面白い庭の松が、垣の上に二本横になつて倒れて居た。朝日はなやかに硝子戸に照つた。

其門の前に、鞆を肩にかけた小學校の生徒が二三人、何かギャク言つて集つて騒いで居た。見ると、成程其處に、昨夜の風雨に斷たれた電燈線が、蛇でものたくつたやうにだらりと長く地上に垂れて居た。

『危いぞ、危いぞ！』

こんなことを言ひながら、整次は其處を通らうとした。

しかし路はその斷たれた電燈線にさまたげられて、自由に通行が出来なくなつて居た。暫く躊躇して立つて見て居たかれは、生徒の中に蝙蝠傘を持つて居るものがあるのを認めて、『おい、それを貸せ。』かう言つてそれを取つて、何の危険をも感じないかのやうに——邪魔物を除いて通つて行くのに何の遠慮もないといふやうに、いきなりそれを傍に拂ひ退けようとした。それは唯瞬間であつた。アツといふ聲と共に、かれは電氣に觸れて仰向けに倒れた……。

記念會

十八疊二間をぶつ通した廣間に客はずらりと並んで見られた。藝妓は明るい電燈の光の中に派手な姿をくつきりと見せて、長い裾を引きながら、一人々々靜かに膳を運んで行つた。

かれの席はなながし大佐となながし中佐との間にあつた。相對しては二間の床の間を後にして、名高いなながし將軍と軍醫總監とが笑ひながら頻りに何か話してゐた。ふと新たに膳を運んで入つて來た一人の藝妓を見た時、かれは思はず眼を疊の上に落した。かうした處で長く豫期した運命に邂逅さうとはかれは思ひもかけなかつた。

かれは烈しい胸の鼓動を感じた。

向う側に、矢張少佐の軍服をつけて、隣の軍人と熱心に話しあつてゐる四十男があつた。女は其處に行つて、髪の毛の多い銀杏返しの髷と、脊の高いすらりとした姿と、松葉の細かく出た金茶色の繻珍の帯とを此方に見せて、運んで來た膳を其處に据ゑて、靜かに立つて、元來た方へと引返して行つた。

『己の來てるのをもう知つてるか……それともまだ知らないか。』
かれはかう思つて見た。

膳の配附も濟んで、人々はやがて盃を取り始めた。半玉の綺麗なのと、一本になり立ての若い美しいのと、もう姐さん株になつた二十四五のと、口の達者な老妓とが具合よく並んで酒を勧めた。客の中には軍服の胡座をかき始めたものも一人や二人はあつた。ゆつたりした空氣が何處となく四邊に充ち渡つた。

かれの眼は其女の姿を多くの藝妓の中に求めた。女は其側の一番隅の處に坐つて、白い横顔を見せてゐた。

それは戦地の艱難と戦捷とを記念にするやうな會であつた。席に列つた人々は、軍人と言はず、軍屬と言はず、畫家と言はず、新聞記者と言はず、皆な飯盒の飯を食つたり、露營の憂目を見たり、砲彈の炸裂する下を往來したりした人達であつた。人々は一年一度の此の會を樂みにして、其時の艱難やら愉快やらを互に面白さうに話し合つた。中には遠い處からわざわざ出かけて來るものもあつた。

軍人達の胸には、大抵金鷄勳章がかゝやいてゐた。其時分、大尉であつた人はもう中佐になつてゐた。軍の參謀長であつた人は、其肩に星が二つ輝いて、全國でも有力な師團の師團長に昇進してゐた。參謀次長は旅團長になつてゐた。

會の始まる前に、餘興として講談と女義太夫とがあつた。元祿の義士の講談をしたなにがしといふ講談師は、海城から此の司令部に從屬して、遼陽の戦ひの濟んだ後に歸つて來た男で、戦地でも、何ぞと言つては、よくその講談を聞いたものだが、其のがつしりした體格と太く錆びた聲とは、人々をして其の當時を想起させるに十分であつた。袴をつけた若い綺麗な女義太夫は、『壺坂寺』を長く語つた。

少佐の軍服を着けた幹事がやがて立上つて、『此會は毎年年末に開會することになつて居りましたが、今年も、諸君に澤山轉任なさるゝ方が御座いまして、もうちき地方にお出かけになる方の御都合も御座いましたので、繰上げて今日開會することに致しました。……此次の幹事には誰少佐を推薦致して置きましたからよろしく御斡旋のほどを願ひます。……』かう言つて、少し間を置いて、『それから御報告致して置きますが、今日の會に諸君から寄附が御座いました。女義太夫は誰君から、繪はがきは誰君から。それから後で寫眞班で從軍された諸君が、今日の宴會の盛況を撮影して諸君にその寫眞を一葉つつ進呈さるゝといふことで御座います。』若々しい透つた聲が廣い一間に鮮かに聞かれた。

『何うか、皆さん、不行届で御座いますが——それに何にも御座いませんが、何うか充分に召上られんことを希望いたします。』

跡に拍手が高く一座に満ち渡つて聞えた。

客は皆な隣の人々を相手にして、いろ／＼と當時の話をしながら盃を重ねた。酒を替へに立つて行く

半玉と藝者とがをり／＼前を行違つて行つた。ゆつたりした打解けた氣分が何處となく一間に行渡つて、低い話聲が雜然として耳に入つて來た。

かれは隣の中佐が頻りに膳の上にある物を箸で挟むのを見ながら、一盃は一盃と盃の數を重ねた。庇髪に結つた肥つた年増の藝妓が來たり、一本になり立ての勝色納戸の着物を着た島田の美しい女が來たり、綺麗な甘つたれるやうな口の利き方をする半玉が來たりした。あの女が自分の此處にかうして坐つてゐるのを知つてゐることはもう確かであつた。藝妓が關係のある客と宴會の席上で顔を合せる時の態度は、かれは今までも度々見て知つてゐる。しかしその軽い心、皮肉な心で相對することが出來ないやうなのが、彼等の間柄であつた。『一生離れまい。』かう言合つたこともあれば、『何うせ一緒ににはなれないやうになつてゐる。お前だつて、若い身で何時までかうしてゐることもあるまい。其時は己が力になつてやる。男女と謂ふものは、一緒にゐる中は好いが、何方か一方別れれば、屹度他人になつて了ふものださうだ。途中で逢つても挨拶も出來なくなるものださうだ。しかし、己達はそんなことはすまい。何うかそんなことはすまい。』かう言つたこともある。

と、かれの眼の前には、別れて行くやうになつた一伍一什が歴々と浮んで通つた。別れるやうな理由もなかつた。しかしいつの間にか別れなければならなくなつてゐた。

歡樂の夢は今でもをり／＼繰返された。二階の廊下に籐の安樂椅子が置いてあつて、すぐ其前に梧桐がガサ／＼と動いてゐた。山王の森には大きな月が昇つて、その涼しい明るい光が軒燈の多い片側町に流るゝやうにさしてゐた。狭い通りをぞろ／＼と人が通る。夜目にもそれと知られる白粉をつけた女が艶かしい姿をして通つて行く。すぐ下の氷水の店には瓦斯が晝のやうに光つて、亭主がせつせと氷をかいてゐる。筋向うの高い二階屋の黒い影が屋根の上へ落ちて、灯の明るい簾の中から三味線の音が洩れて來る。其時男は湯上りの浴衣姿で、籐椅子に長く身を横へてゐた。其處には暗い四疊半の副室があつて、そこから人のゐない六疊の電燈が明るく見えた。女は旅歸りの大丸髻に結つて、白い顔を闇の中に見せてゐた。

女は土地では踊の巧いので聞えてゐた。脊の高い、やはらかな姿をしなやかに、扇をくると翻すのを見ると、誰も心を奪はれないものはなかつた。『春雨』などを踊つても自分で工夫した振がついてゐた。男は北州が好きで、よくそれを踊らせた。

『私、私は本當に好いと思つてよ——』

其聲——一種懐しい調子のある其聲がふとすぐ前に聞えた。見ると、名高い將軍の前に藝者が三人ほど集つて、頻りに何か饒舌つてゐる。その女は帶の松葉を此方に見せて其中に交つてゐた。

幹事が来て、前の長押しに、『金州南山——橘治子』と書いた長い紙を貼つて行つた。
やがて琵琶が始つた。

琵琶を弾く女は、女學生上りと言つたやうな風で、くすんだ栗梅の羽織を着て、海老茶の袴を穿いてゐた。初めに女中が碁盤を持つて来て、それを室の中央に置くと、女はやがて靜かに入つて来て、琵琶を抱へたまゝ、碁盤の上に置いた歌を書いた本の頁をくりかへした。藝妓達はかうした席にかうして藝を賣りに来る女を憐むやうな眼色をして、彼方此方から眼を注いだ。『金州南山とは面白いな、』などと言合ふ聲も處々に聞えた。敵の堅壘を一日に攻略した將軍は、別に當年を偲ぶといふ風でもなく、眼を疊に落してぢつとしてゐた。

さう大して上手でない琵琶の歌も、人々をして、當時を思ひ起させるには十分であつた。前夜の暴風雨、曉の深い霧、四面に轟き渡る敵味方の砲彈、此處に居る人達は其時狭い谷から丘陵の上へと登つて行つて、一時間後には、朝霧と共に晴れ渡る砲煙の中に蜃氣樓のやうに浮み上る南山の敵壘を見た人達であつた。省金山に司令部を移した頃には、金州城内に處々に火が起つて、敵の退却を追撃する味方の歩兵隊の前進するのが蟻のやうに小さく見えた。イタリアンブリウとも言ふやうな濃い晴れた海の色の中には、わが海軍の援護軍艦が一隻、二隻、三隻まで居て、それが玩具の軍艦のやうに、をりく／＼白い砲煙を波の上に漲らせるのがパノラマのやうに見えた。午後からの味方の苦戦、それをも押通して、落

日と共に國旗を敵壘の上に樹てた時の光景は、再び眼の前に現はれるやうに思はれた。

琵琶が濟むと、人々は拍手喝采した。

『思ひ出しますな。』

『あの時のやうに、はつきりと全局の見えた戦争は其後何處にもなかつたですな。』

『本當にあの戦争は、棧敷から芝居でも見て居るやうだつた。』

こんな言葉が彼方此方に聞えた。

かれの右隣に坐つて居る大佐は、其時の參謀で、軍の公報を起草した人であるが、かれに向つて、『それでも感心に事實だけは間違つて居ませんな。』かう言つて笑ひかけた。と、向うに居る矢張同じ佐官が、『公報を書くので騒ぎだつたナ、あの時は。』かう言つて此方を見て、『歌では、夕日が金州灣に沈みかけて居ると言つて居るが、もうあの時は夕日などありません。もう暗くなつて月が出て居た。大房身の敵の火薬庫の爆發した時はもうすつかり夜だつたからな。』

かう言つて笑つた。

此時藝者や半玉が幹事から吩咐けられて、畫家の寄贈した繪葉書やら、軍歌を刷つた紙やらを人々の前に配り始めた。ふと氣がつくと、其の女は軍歌の紙を一枚々々此方側に配つて、かれの居る三人目の處までやつて来て居た。かれは知らぬ顔をして、何うするかと思つて見て居た。女は流石に少し躊躇し

たといふ風であつたが、刷紙を持つて居ながら、今更そこから引かへして行くことも出来ないの、知らぬ顔で、一人々々配つて来て、たうとうかれの前にやつて来て、同じやうにして刷紙を出した。かれは隣の中佐から話しかけられた話の返答をしてゐたが、わざと顔を少し横にして、女から其横顔を見られるやうにして、平氣な態度をして、その軍歌の刷紙を受取つた。其時、女の手の顫へるのを男は感じた。女は矢張横顔を男に見せて居た。

幹事が再び立つた。

『諸君、これから前例によりまして、戦地に於ける昨夜と今日との軍の状況報告を朗讀いたします。三十八年の今日は、軍は沙河を隔て、敵と相對して居りまして、當司令部は十里河に宿營して居りました。十二月四日夜状況、敵の一小部隊は林盛堡の東南約二百メートルの處に顯はれ、わが第六師團の一部を攻撃せり。わが軍は直ちにこれに應じ、三十分にして全くこれを撃退せり。鐵道線路附近には敵に異狀なし。前面にも異狀なし。……十二月五日、即ち今日の状況、午前十時、新民屯にある敵の騎兵は漸時前進し來り、遼河を涉りてわが左翼方面に出でんとする状況あり。わが秋山支隊は其一部隊を前進せしめて、これに對する運動を開始せり。前面には異狀なし。』

簡単な状況報告は、却つて人々をして深く當時を想起させたやうに見えた。將軍を始め、其の隣に居る軍醫總監も其の報告を絶えず笑ひを含みながら面白さうにして聞いて居た。幹事が報告を終つて席に戻ると、喝采の聲が湧くがごとくに起つた。

若い藝者の踊も濟んで、幹事が框に張つた絹地と硯箱とを持出して、人々の筆蹟を求めて歩く頃には、もう人々の顔には大分酔が廻つて居た。將軍の前には、誰も彼も盃を持つて行つた。將軍は一々それを受けて返した。軍醫總監の前にはサイダアの饅と番茶を入れた徳利とが並んで居た。

フロツクコオトを着た有名な畫家は、幹事から押附けられた絹地に、大きく勢よく日本刀を描いた。見て居る中に、鐙が出來、鐙が出來、下緒が出來た。『これは好い、これは面白い、』などと彼方此方から聲がかつた。將軍から軍醫總監、師團長、旅團長、俳句を書くものもあれば、歌を書くものもある。唯簡単に署名だけして置くものもある。『僕の惡筆などを振つたつて仕方がない。』こんなことを言つて、わざと大きな書判を書いた佐官もあつた。

段々廻つて来て、やがてかれの順番になつた。かれはその一隅に金州南山で詠んだ歌を小さく書いて、そして筆を下に置くと、隣の中佐は『やア、僕の番か。』かう言つて大きな絹地を受取つた。

ふと見ると、其處に一本になつたばかりの若い綺麗な妓が坐つてゐた。

其妓をかれはよく知つて居た。

其頃はまだ半玉であつた。綺麗な着物をつけて、ませた姿をして、よく踊を踊つた。其女と同じ家に

居るので、二人の關係をもよく知つて居た。

笑ひを見せて、冷たくなつた盃を干すと、妓も矢張意味ある笑ひを目の邊に湛へながら、徳利を取つて酌をした。

黙つて互に顔を見合せてゐた。

其眼は絶えず物を語つた。

何事をか訊ねるといふ風が、歴々とその眼に見えた。

ふと、首を傾けて見せた。

『小常姐さん来て、よ。』その態度はかう言つた。

かれは笑つて點頭いて見せた。

再び首を傾けて何か訊かうとするやうな様子を妓はして見せた。

呼んで來ようかといふのであつた。

かれは首を振つて見せた。

でも承知しないので、『好いよ、好いよ、』と男は軽く言つた。

妓は顔を曇らせた。

黙つて男が出す盃に、妓は黙つて酌をした。男はそれを呷るやうに飲んで、それを前の盃洗で洗つて、

『何うだ、君、一つ飲み。』

『難有う。』

かう言つて、盃を取つて、男の酒を波々とつぐのを待つて、

『あら、まア、大變よ、』と言つて、一口唇を當て、飲んで、それを自分の前に置くと、すぐハンケチを出して、少し滴れた酒を拭いた。

『大きくなつたね。君、何時一本になつたんだ。』

『今年の夏。』

『一本になつた方が好いだらう？』

『何うですか。』と笑つて居る。

『一本になると、調子が丸で違つて來る。變るもんだねえ。……何處かかう姐さん振つたところが出來て來るから可笑しい。』

『さう……』かう言つて笑つて、『私はまた子供だつて思はれるかと思つて、そればかり苦勞よ。』

『榮龍、おい何うした。』

隣の大佐が紅い顔をして聲をかけた。

榮龍は笑つて、『木村さん、また飲んで追つかけては厭よ。私は、木村さん、酔拂ふと、怖くつて。』

『怖い？ あは、』

と大佐は笑つた。

『さつき、貴様のやつたのは何だ。』

『踊？ 一緒に踊つた人？』

『人は知つてる。一緒に踊つたのは實子ぢやないか。踊よ。』

『松の縁。』

榮龍はかう言つて笑みを口の邊に湛へた。

此時、大佐の前に同僚の大佐がやつて来て、ドカリと腰を据ゑたので、大佐は盃をそれにさした。榮龍がしようとするのを向うに居た老妓が引取つて酌をした。

榮龍は前にある盃を取つて、今一度唇を當てたが、其儘酒を盃洗の中に入れて、『何うも……難有う。』かう言つて、盃をかれに返した。

『暫く逢はなかつたね。』

『本當ねえ……』かう言つたが、『姐さん、呼んで來ませう。』

『好いよ、好いよ、呼んで來ない方が好いよ、可哀相だから。』

榮龍は再び黙つた。

暫くしてから、

『本當に暫くお目にかゝりませんでしたわ。何時お目にかゝつたきりてせう。』

『さうさな。』かれは考へて、『あの時きりだよ。』

『さうでしたねえ。』

隣の大佐の前に腰を据ゑた大佐は、此時不意にかれの方に身を向けて、『倉田君、何うだ。君は此土地をよく知つてるつて言ふぢやないか。』

『いや——』

かう言つて、かれは笑つて、『それよりも此處は貴郎方の繩張ぢやありませんか。』

『繩張。』大きく笑つて、『別品が居るだらう、君。今日はこれで中々好いのが來てるんだよ。此處でも指に折られる奴が來て居るんだ。』

『二三日前から幹事が此處に申込んで置いたさうですから、それで彼方此方から狩り催して來たのでせう。』其處に來てゐた大尉がかう言つて此方を見た。

『本當に狩り催して來たと見える。今日は中々別品が揃うてをる。』

かれの左隣の中佐もかう言つて大きく笑つた。

人々は席を離れて、彼方に行つたり此方に行つたりした。酒氣と烟草の烟とが一間に充ちて、彼方此

方で語り合ふ聲が一種の高低のある雑音をなして耳に入つて來た。三味線を持つて群の中に入つて行く老妓も見えた。

『諸君、これから寫眞を撮ります。』

幹事が高い聲で觸れ廻つた。見ると、向うの屏風の前には寫眞師が機械を組んで居て、今一人の男はマグネシウムを點火する準備をして居た。

人々は皆な立上つた。

軍服姿の幹事が將軍をつれて來て、それを中央の位置に就かせると、フロックコオトの今一人の幹事は、先程寄せ書きをした絹地を持つて來て其處に据ゑた。人々はやがて其の附近に寄り集つて來た。坐るものもあれば、立つて居るものもある。寫眞班で從軍して、毎年今夜の寫眞を寄附する例になつて居る寫眞師は、フロック姿の小づくりの體をちよこくさせて、寫眞機械の處に行つて、ピントを見たり此方に來て人々の位置を直したりした。藝者達もところ／＼にそのあてやかな姿を見せた。

かれはまだ立たずに居た。酔つて、何となく胸が苦しかった。一つ席を隔てた處には今まで居た人とは違つた見知らない中佐が、かなり酔つて割込んで來て居た。其の隣も矢張中佐の軍服を着けて居た。何處から來たか、今まで姿を見せなかつた小常が其處に立つて居る。

と、中佐はいきなり、

『おい、小常、此處へ入れ！』

かう言つて、體を半ば浮かせて、小常の手を取つた。小常はちらりとかれの方を見たが、其儘、かれと中佐との間の空いた席に引込まれるやうにして入つて來て、かれの方に横顔と後ろを見せて坐つた。

『おい、こら、何うした、小常？』

中佐は酔つた體を女の膝に凭らせて、白い女の手を握つた。女はわざと深い間柄であるやうな様子を見せて、其處にあつた敷島を一本取つて、前の火鉢で火をつけたが、それを細い指に挟んで、スパク音をさせて吸つた。

かれは女の心と自己の心とのピッタリ相觸れて居るのを感じずには居られなかつた。淺ましいやうな腹立たしいやうな淋しいやうな女を憐むやうな感じが簇々と胸を衝いて湧き上つて來た。一人離れて坐つて居るに堪へられなくなつた。

『さまを見ろ、苦しんで居やあがる。』

かう心の中に叫んで立上つたかれは、男性の勝利といふやうなものを強く感じた。一種の微笑が思はず口の邊に漂つた。

『それでは撮りますから。』

寫眞師はかう注意した。

ボツと音がして、マグネシウムが明るく燃えた。

もう歸らうと思つてかれは一座を見渡した。小常は其處に居なかつた。

將軍も軍醫總監ももう先程歸つて了つた。一人去り、二人去り、席は既に全く白けた。残つて居るものは、處々に環をつくつて、藝妓を擁して、頻りに三味線を弾かせたり、博多節を歌つたりして居た。かれも夥しく酔つて居た。踳踖として、中庭に添つた廊下を通つて、玄關に出た。女中の出して呉れたインバネスを被つて、山高の帽子を冠つて、下駄迄出して揃へて貰つたが、ふと小用が足しなくなつたので、そのまゝ急いで、明るい廊下を厠へと向つて行つた。

ふと氣がつくと、其處に小常が居る。

懷鏡を出して、廊下の電燈の明るいところに立つて、頻りに顔のつくりを直して居た。

かうなつては流石に挨拶しない譯には行かなかつた。かれの急いで此方に来るのを見ると、慌て、鏡を帶の間に藏つて、笑みを眼元に湛へて迎へた。

『久し振だつたね。』

男はかう聲をかけてそのまゝ摩違つて厠に入つた。

小用を足して出て來た時には、小常は手水鉢の處に來て立つて居た。『今日は大變に失禮をしました…』

…』

『いや——』

手拭で手を拭いて、

『それでも丈夫で結構だね。』

『お蔭様で…』かう微かに言つて、『貴方もお變りはないんでせう。』

『ウム。』

二人はこれきり何も言はなかつた。

小常は玄關まで送つて來た。其處に榮龍も他の客を送つて出て來た。

『左様なら、御機嫌よう。』

後からかけられる聲を聞流しながら、踳踖としてかれは戸外に出た。夜は暗かつた。』

幼きもの

一

道子は山の手の細い通りの小さな家で生れた。それは三間位しかないといふやうな家で、奥の暗い三疊の産褥には、若い母親が亂れた庇髪を枕に當て、靜かに心地よげに寢て居た。

父親もまだ若かつた。袴など穿いて、辛うじてさがし當てた新聞社へと出かけて行つた。夜遅く歸つて來ることもあつた。『美佐さん、美佐さん、』かう常にやさしい聲を懸けるのが近所にも聞えた。

道子は髪の濃い大きな子であつた。張つた吸ひつけない乳房をもどかしがつて、よく聲を立て、は泣いた。『何うしたのよ、ほら、此處がお乳ぢやないか。若い母親はいつもじれつたさうにして言つた。

海岸のさびしい一間——其處で生れなければならない運命を道子は持つて居た。道子が腹にある間、母親は遠い海の音を聞いたり、夕日に輝く波の閃きを見たり、松の生えた磯田道をさびしさうに歩いたりした。母親は人に見られるのを憚るやうな體であつた。道子が腹に出來てから、母親は始めて世間

と相對したやうな氣がした。不安、苦勞、羞恥——其處にはもう今までのやうな戀の歡樂はなかつた。

それはさびしい一間であつた。其處で彼女は始めて自分の通つて來た生活を振返つた。何一つ不足のない田舎の財産家の娘としての生活、無邪氣な楽しい何の苦勞もない學校での生活、それから東京に出て來てからの生活、それが忽ちにして嵐のやうな烈しい辛い波立つた巴渦の中に捲込まれて、自分で自分が自由にならないやうな境を通つて來た。繪葉書に書いた百合の花が見えたり、父母のやさしい顔が見えたり、師と頼んだ人の嚴かな顔がこんがらかつたさまゝな幻影の中を通つて行つたりした。道子を懷妊してからの彼女は、男の言ふまゝになるより他に爲方がなかつた。彼女は止むを得ず男に伴れられて身を匿した。父母から、世話になつた師匠から、今までの生活から、むしろ彼女の周圍の總てから……。

其一間からは貝殻の日に輝く家根だの、網を繕つて居る漁師の顔だの、汚い黒い溝などが見えた。松原の中には月見草が咲いて居て、其處の道を傳つて行くと、蘆の疎らに生えた濁つた川に土橋などが架つて居た。男は三里ほど隔つた田舎の停車場で下りて、其處から車で遣つて來た。彼女が其處に身を隠してから四度位は來た。來るといふ報知のあつた時には、彼女は屹度半里位は迎へに出て來た。車にかけた赤い毛布が松原の中の路の遠くから見えた。

彼女は人目に立つ腹を抱へて、莞爾といつも笑つて男を迎へた。
遠い遠い海の音が絶えず聞えた。

それは堪へ難い哀愁を常に彼女の胸に齎らして來た。ドウ、ドウ、ドウ——夜が更けると、殊にそれが分明と聞えた。彼女はもう寒くなり始めた夜を蒲團の上に坐つて、その遠い、單調な、しかし悠遠な音に耳を傾けながら、腹の子の氣味わるく動くのをちつと見て居た。

涙が留度もなくその蒼いヒステリックな顔を傳つて落ちた。

天氣の加減で海の音は低く聞えたり高く聞えたりした。

『今日は波の音が高いわね。』かう彼女は家の上さんに言ふ日もあつた。

『あの音を聞くと、私悲しくなるわ。』

かう男に言つたこともある。

『いつそ、海に行つて死なうかしら。腹おなかの兒は可哀相だけど……どうせこんなにして生れる位なら生れない方が幸福よ。』彼女は蒼い顔をして、その遠い波の音に引寄せられるやうに言つた。

その遠い遠い海の音から別れて、彼女は東京に來ることが出来るやうになつた。此方から捨てた師匠は、まだ彼女を捨て、は居なかつた。『もう、汽車に乗つては險呑かねえ。成るべく東京で生ませる方が好いがね。田舎ではもしものことがあつた時困る。醫師もなし、十分な手當も出来ない。』かう師匠は中

に入つた人に言つた。師匠は田舎の父母の中に入つてまでも、さうした不自然な生活からかの女を救ひ上げやうとして居た。彼女は都會の通りに注連飾の松や竹が立つて、青竹の籠に鴨や雁が並べられてあるやうな忙しい時に、其處から山の手に來て、男と一緒に新しい生活を始めることゝなつた。

其處で道子は生れた。

道子といふ名は、父親の親雄といふ名と母親の美佐子といふ名との頭字の假名を取つてつけたのであつた。戀の記念、熱い心と熱い心との間に出來た親達の記念、其時來て居た若い友達は『道子、道子、それは好い、好い名だ——』などゝ言つた。

『かういふ記念物がすぐ出来るから厄介だ。』

ある友達はこのことを言つた。

『貴様はぢき夢中になるから、かういふことになるんだ。其處へ行くと、僕など上手だからな、そんなけちな良になど入らんサ。』などゝいふ友達もあつた。

幼い兒は若い母親にはいかにも重荷のやうに見えた。泣く時には何うして好いか解らない。何か着物に針でも残つてゐるのではないかなどゝ心配した。『この子は親に似たと見えて、感情家だわねえ。』かうも言つた。産褥から母が離れる頃には道子はもうかなり大きくなつてゐた。何か物が見えるといふやうに、眼をぱつちり明いて、瞬きもしないで一ところを見てゐる。師匠の細君は度々訪ねて來て『この兒

は母さん似ね。眼などそつくりね。』かう言つてはつちり明いた眼のところに指などを遣つて見た。

近所のものに限らず、此處に遣つて來る人達は、若い者同士の生活のいかに單純で無造作であるかを見ないものはなかつた。箆笥もなければ長火鉢もない。竈もなければ鐵瓶もない。土鍋で飯を焚いて、土瓶で湯を沸かしてゐる。飯のない時には、角のパン屋で食パンを買つて來て、小さな茶湯臺の上に新聞紙を敷いて、それでボソ／＼やつて、朝飯や午飯などをすまして了ふかと思ふと、かういふ生活には見ること出ないやうな綺麗な派手な着物を着て、金の指環などをはめて、若い母親は出かけて行つた。

『新式の手鍋黨だね。』

誰か、こんなことを言つて笑つた。

何うかすると、道子は泣いたまゝ、其處に投げ出されてゐることなどもあつた。『たんとお泣き。』かう言つて若い母親はわざと知らぬ顔をしてゐた。『もう知らない！ 何うでも勝手におし！ お前の爲めには母さんが何んなに苦勞したか知れやしない。たんとお泣き！』道子は手と足を高く揚げてひい／＼泣いた。

かと思ふと、堪らなくなつたやうに、放つて置いた道子を抱き上げて、抱緊めて、『誰れが——お前の母さんがかえ？ 馬鹿な母さん、こんな可哀相な眼に逢はせるやうな母さん、本當に馬鹿な母さんだね。』若い母親の眼からは、熱い熱い涙が滴れてゐた。

過ぎ去つた歡樂は再び來なかつた。心と心がびつたり觸れて、互ひに顔を見合せて手を握つた時のやうな心持はもう來なかつた。夜は若い父親との間に道子が寝てゐた。

『こんな境遇に誰が私をしたんです？』

兎角さうした愚痴が若い母親の口から出た。

田舎の親達からは勤當され、一生の事業と思つた藝術からは離れ、學問上の努力からも見離され、かうした貧しい苦しい辛い生活を送るやうになつたのは誰の爲めか？ 良家のお嬢さんといふ位置をも失ひ、これまで遣つたこともない水仕事なども覺えなければならぬやうになつたのは誰の爲めか？——それを彼女は決して愚痴つほく言ふのではなかつた。また決してそれを男にばかり責める譯でもなかつた。けれど、少しは察して貰はなければ彼女の立つ瀬もなかつた。常にさういふ腹が若い母親にあるので、何ぞと謂つては、男の臍甲斐ないのが問題の種となつた。

『貴方に眞面目に努力して頂かなければ、私は何うするんです？』

こんなことも言つた。

『貴郎は私の分も一緒に働いて下さい。さうでなければ、私はかうしてゐられないんです。それが解らない貴郎でもありませんまい。』

平生感情の強いヒステリックな女だけに、何ぞと云つてはすぐ激した。若い父親の身にしては、それ

が無理だとは思はない。貧しい生活も氣の毒だ。自分の爲めに犠牲になつた女の一生も思はないではない。努力して出来ることなら、何んな努力でもして、一躍して立派な社會上の位置をも占めたい。自分の周圍の人々——女の父母、女の師匠の高慢な顔、さういふ人々を見返してやりたい。イヤ、いつかは必ず見返してやる。けれども、一日忙しい辛い埃だらけの新聞社の一階で、月二十圓の月給で齷齪して、歸つて来て、また女の愚痴を聞かされては、男の身にしても立つ瀬がなかつた。つい激した聲も出た。道子の生れたのを境にして、若い父親と若い母親とは、楽しい戀の歡樂の夢から次第に人間の辛い現實へと向つて行つた。

近所では時々二人の物争ひの聲を聞いて吃驚した。

『あんな夫婦でも喧嘩することがあるのかねえ。』

かう言つて笑つた。

ある時、二人のロマンチックな物語を知つてゐる人が通ると、若い母親の聲で、

『私の子ですから、私の勝手にします。生かさうと殺さうと私の勝手です。』

といふのが聞えた。道子のけた、ましく泣く聲もした。續いて高い尖つた泣聲が四邊に際立つて聞えた。

若い母親は滅多に道子を負つて外に出るやうなことはなかつた。綺麗な着物を着せて、ハイカラな頭巾を冠せて、両手で抱いて通りを歩いた。

『よく重くありませんね。』

人達はそれを見て言つた。

二人は伴れ立つて師匠の家に出かけて行くことなどもあつた。其家は郊外にあつた。高い處の電車の停留場から其處まで七八町はあつた。其時でも矢張道子は抱いて伴れて来た。擦れ違ふ人々は、若い綺麗な母親に並んで、年齢のいくらかも違はない若い父親が、可愛い女の兒を抱いて歩いて行くのを振返つて見て行つた。

ある日、電車の中で逢つた董色の袴を穿いた二十一、二の娘は、『まあ好いお子さんね……何と仰しやるの？ 道子さん。好い名ね。』かう言つて頬を指で觸つて見たりした。若い母親は顔を赤くしてゐた。

二

道子は段々笑ふやうになつた。母親の顔を見覚えて高笑ひをした。其頃は家はその山手から電車に近い處に引越して居た。坂の下のやうなところで、近所には銀行に通ふ若いハイカラな人だの、大店に通ふ番頭さんなどが住んでゐた。坂の中ほどにあるあふちの樹の繁つた影が、道子の母親に抱かれてゐる

室から見えた。

襤褸だの、よだれ懸けだの、小さい襦袢だのが縁側に山のやうに積まれてあつた。それを洗ふのも若い母親には一方ならぬ勞力であつた。それに井戸も深かつた。隣の細君は見兼ねて井戸繩をたぐつて呉れたりした。手の荒れるのを氣にして、勝手元の棚のリスリンを彼女は幾度となくつけた。

毎日一度づゝ道子は午睡をした。ソット乳房を離して立つて來てから、一二時間の間ほど、彼女に取つて貴い自由な時はなかつた。其間に裁縫もすれば手紙も書いた。時には努力といふやうなことを考へて、久しく向つたことのない十行二十字詰の原稿紙を出して、小品を書き出して見たりした。道子が目を覺して泣き出す時は、かの女も泣きたかつた。『もう眼を覺したのかねえ。』かう言つて彼女は道子を抱いた。

若い友達は矢張そこにも遣つて來た。ロシアの若い人達の話をするやうな夥伴で、一面満し難い生存慾から起る不平不満を持つて居るやうな群であつた。學校から始めて社會に出た人達には、物が總て新らしく鮮かに見えた。かれ等はよく激した。何うせ社會の醜惡に觸れなければならないものなら、其の底の滓^{おろ}までも嘗めやうとした。かれ等は酒を飲んで烈しい議論をした。

道子はさういふ若い人達の手によく抱かれた。『子供つて言ふものは無邪氣なやうなもので、實は何でもないんだ。笑つたり何かするのは動物本來の一種の保護色だね。』など、言ふ人もあれば『子供なんて一塊肉のやうな氣味のわるいものだ。』と言つて顔を背けて了ふやうな人もあつた。子供どころか、戀を

しないのを誇りとして居る青年もあつた。妻子を犬猫のやうに捨て、顧みない人などもあつた。

『何うももう少し大きくならなければ、玩具具にもならない。』ある髯の生えた青年はかう言つて抱いて見た道子を母親に歸した。

道子はかうした父母と周圍との中で、よく聲を立て、泣いた。何方かと言へば、弱々しい方で、聲もさう大して高い方ではないが、時にはそれが引切れさうにして泣いた。

『泣くのは幼児の運動の爲めださうだ。泣くだけ泣かせて置くと終には黙つて了ふから不思議だ。』かう若い父親は言つた。

母親も時には自分の體が堪らないといふやうに道子を其處に投つて置いた。雑誌や新聞に書いてある育兒法や哺乳法などは何の役にも立たなかつた。片時も乳房から離れまいとする羈絆が殊に母親には辛かつた。

母親は自分の遣つて來た過去ををり／＼振返つて見るやうな心持になつて居た。一年間！ その甘い蜜のやうな夜の歡樂とかうした今の灰色の佗しい苦痛との間には、僅かに一年に足りない月日が経つたばかりであるが、其短かい間に、何うしてかういふ氣分になつたか、何うしてかういふ生活の状態になつて行つたか。甘い／＼、女の肉體も溶けて行つて了ひさうな男の言葉、熱い／＼、女の心も全くそれに抱かれて了ひさうな男の胸、それを女は繰返して考へない譯には行かなかつた。氷のやうに溶けて行

つた男の情、それは實際虚偽であつたらうか。

一年間！ 其間には随分種々のことがあつた。懐妊と知れて、それを彼に打明けようか打明けまいかとしての苦悶、この羞かしい醜い形を世間に見せまいとして、一度は自分一人でひそかに死に赴かうと思ひ惑つた苦悶、その頃、男は打つて變つた女のさまに絶望して、蒼い顔をして、女の衣の裾にすがつて泣いてその心を復活させやうと悶えて居た。彼女は少くともそのことに就いて半月は惑つて居たことを思ひ出した。男にそれと打明けて話さうと決心したのは、忘れもしない、緑の影のチラチラした、あの公園のベンチの上で、其の時決心を捉したのは、男のなさけといふよりも、寧ろ腹の中の子に對する一種意識しない愛情であつたといふことが今で解つた。その時から二人の状態は變つて行つたのであつた。

三

道子がえんこをするやうになる頃には、道子の父親はよく家を明けた。赤い顔をして酔つて歸ることもあつた。母親の痾高い聲が夜遅く近所の人達を驚かした。

こんな生活なら——この無意味な光明のない生活なら、師匠の許に居た頃の以前の藝術的生活の方が好い。『そんなら私は先生の許に行きますから。』こんなことを若い母親は常に言つた。『この子は何うに

もします。貴郎が無責任で投つて置くなら、私は先生に相談して何うにでもしますから、本當に確乎とした考へを聞かせて下さい。』かう手詰の談判らしい物の言ひ方もした。

道子の父親の方には、女の言葉に對する有利な有力なものは少しもなかつた。自分の家らしい家もなかつた。親らしい親もなかつた。さうかと言つて名譽もなければ、財産もない。男の犠牲に女がなつて居るとは誰も皆な言つた。それに、『先生、先生』と言はれるのが辛かつた。師匠は師弟以上に美佐子を愛して居た。美佐子が道子の父親と戀に落ちなかつたならば、師匠は世間の道徳などは顧みずに妻子のあるのを問はずに美佐子と烈しく戀したかも知れないやうな關係になつてゐた。今度の事件などでも美佐子の成行が知りたければかりに、師匠は美佐子の父母との仲に立つて、美佐子を養女の籍にまで入れて、圓滿な解決を見ようとしたのであつた。従つて道子の父親の師匠に對する感情は、單なる感謝でもなければ、單なる競争でもなかつた。それは複雑した如何ともすることの出来ないやうなものであつた。かれと師匠とは打解けて話し合つても、心から打解けることの出来ないやうな處があつた。それを若い母親は何ぞと謂ふと持出して、『先生に聞いて御覽なさい』とか、『先生に行つて話して來る』とか、いつも口癖のやうにして言つた。時には、『藝術家つて、そんな無責任な、妻子を飢ゑさせて、自分ばかり酔つて歩くやうなそんな不眞面目な眞似をして好いんですか。先生に行つて聞いて御覽なさい』などと言つた。で、道子の父親はさうした間に起る空氣に悶えながら、益々鬱を酒に遣るやうになつた。愛

した女の機嫌を取るやうな気分ばかりでは居られなかつた。衝突は常に起つた。

其頃では、机の上の原稿紙は積まれたまゝになつて居た。

若い母親も蒼い顔をして居た。イラ／＼して暮すやうな日が續いた。神経の昂奮は釣り上つた眼にも見えてゐた。癪の高い若い女の聲は子の泣聲に交つて聞えた。

『美佐子さんは感情家だから困るんですよ。好いとなれば無闇に好くなるし、悪いとなれば無闇に悪くなるから困るんですよ。今日など聞いて居ると丸で氣が變になつたかと思ふ位でしたよ。いくら私が止めても、喰つてかゝつて行くんですからねえ。あれぢや親雄さんだつてたまらない。』師匠の細君は、夏の頃、其處に訪ねて行つて、歸つて來てからかう夫に話した。

『女だつて、あゝいふ生活状態では立つ瀬がないんだらう。』其時は師匠は美佐子に同情したやうな口の利き方をした。

さういふ生活の中でも、道子は日増に可愛ゆくなつて行つた。壊れた犬張子の置いてあるのをちつと見詰めたり何かしてゐた。可哀相で仕方がない——あの子を見ると。』かう師匠の細君は言つた。

月日は經つて行つた。

田舎の母親が上京した。美佐子は道子の父親に隠れてこつそり逢ひに行つたりした。田舎の豪家で何不足なく育つた娘は、亂れた髪をして、指環もない指をして、肥つた血色の好い母親と相對して泣いた。

この母親の出京が道子の母親と父親との間を一層悪くしたのは止むを得ないことであつた。それに、暫くしてから、父親の勤めてゐる新聞社に幹部の動搖があつて、退社しなければならぬやうな羽目になつたといふことも、この家庭をして終結に近づかせる一原因であつたに相違なかつた。酒、質屋、生活難、悪友、無責任、——かうした言葉が、若い母親から師匠に遣つた手紙の中に澤山書いてあつた。

押詰つた年の暮のある晩、道子は母に負はれて家を出た。其時戸外には風が寒く吹いて居た。磨いたやうな月が林の上に明るく出てゐた。ねんねこに負はれた道子の影は黒く地上に映つて居た。

それから道子は今までとは違つた人達に抱かれたりあやされたりした。それは明るい電燈の點いた室で、其處には頬鬚の濃い四十恰好の人だの、束髪にした三十位の細君だの、若い銀杏返しに結つた女などが居た。子供の多い家だつた。その子供達は道子のえんこをして驚いたやうな大きな眼を睜つてゐるのを珍らしさうに見た。

『ヤア、笑つてるア。』など、言つた。道子はえん、えん、えんなど、言つて、躍上つて高笑をした。

道子の父親は家庭を破壊しやうとは思はなかつた。師匠と美佐子と美佐子の田舎の父！との關係から、何うしても破壊しなければならぬやうな具合になつて行つた。かれは妻子を捨て、儂い一場の夢であつた戀を捨て、自由な生活へと向つて行つた。

若い銀杏返しに結つた女は、よく道子を抱いたりして呉れた。若い母親と其女とは、間もなく離れるこ

との出来ないやうな親しい間柄になつた『一緒に勉強させうね、ね、』など、感激したやうに若い母親は言つた。もう一度、師匠の監督の下に昔の藝術の生活に入らうとして彼女は居た。

師匠は飛んで行つた小鳥が歸つて來たやうな喜悅を以て彼女を迎へた。新しい生活、其處に彼女を導いて行かうとした。眞の藝術の生活に入るには、一度さうした現實から出て來たもの、方が好いなど、も思つた。

銀杏返に結つた女と美佐子とは師匠の家が狭いので、別に一軒家を借りることにした。年の暮の二三日前に、其人達は其處へ引越して行つた。落葉の音がしたり松の音が聞えたりするやうな家であつた。

道子は若い人達の間元氣の好い日を送つて居た。もうそろ／＼いざり這ひが出来る頃であつた。『みいちやん、みいちやん』と銀杏返しに結つた女は道子を可愛がつた。野から停車場に出る長い路を、二人はいつも都の方へと出て行つた。若い母親の脊には道子が常に負はれて居た。

茶湯臺の上に犬張子が置いてあつた。それを長い間、道子は取らうとしてゐた。えん、えん、と聲を擧げていつも這つて行つた。ある日思ひもかけず茶湯臺につかまつて立たうとして居るのを見た銀杏返しの女は『まア、みいちやんが——御覽なさいよ、もうぢき立つわねえ。』かう若い母親に言つた。

若い母親は男に別れて、また子に別れなければならぬやうな運命と相對して居た。一人で世に立たうとする彼女には、道子は如何ともすることの出来ない重荷であつた。それに子があつては勉強も出來

なかつた。師匠は又師匠で二人の間の鎚であつた子が再び二人を一緒にする情緒となりはしないかといふ事を窃かに恐れた。

若い母親に取つては、子に別れる悲哀もあるが、また一方では、自由な身輕な何處へでも勝手に出て行かれるやうな處女時代の生活に返れることを望んでも居た。

やがて里子に遣られる運命になつて行く道子を、人々は可哀相に思つた。『何アに近い所に遣つて置けばいつでも逢はれますからね……心配はありませんよ。』など、師匠の細君は慰めた。若い母親も後には自分から進んで里子の口を捜すやうになつた。好い貰手があるなら遣つても好いなど、言つた。

田舎へ行く汽車の中で、近く子をくくした母親と一緒に乗合せて、あの人ならばと不意に遣る氣になつて、その住んで居る東京の場末の町をさがして、それが石油を鬻ぐ家であつたので、もしや火事でも出すやうなことがありはしまいかと思つて、急にやることを止したり、見も知らない髻の生えた請負師のやうな男に手輕く遣る約束をして、歸つてから師匠に叱られて泣いたりした。一度はもと身を躲して居た海岸の家の上さんが世話をしやつても好いといふので、わざ／＼其處まで行つて置いて來たが、何うしても泣いて／＼なつかないので、その翌日上さんはわざ／＼伴れてかへしに來た。若い母親は銀杏返の女と一緒にそれを郊外の停車場まで迎へに行つた。

『私を見ると、ちゃんと覺えてゐて、にこ／＼笑つてゐるんですよ。』と道子に乳房を含ませながら、美

佐子は人々にその話をして聞かせた。

母親のあたゝかいふところから離されるのが幼い兒にも、わかるらしかつた。それから片時も母親の傍を離れまいとした。母親の姿が見えないとすぐ泣出した。若い銀杏返の女が手を出しても、決して以前のやうに氣安く抱かれやうとはしなかつた。いつも母親の方へ逃げて行つた。誰の脊にも負はれなかつた。周囲の人達は、若い同士の夢のやうな戀の中から、かうした悲しい母子の別の生れて來るのをさまふの心を以て見た。

正月に師匠の家に音づれて來た多い客の中に、田舎にゐる師匠の細君の兄さんがあつた。それは小作りなやさしい物の言ひ方をする人であつた。道子の母親は前から其人を知つて居た。田舎の大きな寺の住職をして居た。女の兒が一人きりでは淋しいから、呉れるなら貰つて育て、も好いと言ひ出した。和尚さんが行つて見た時には、道子は日の當る室の中を彼方此方と這つて元氣よく遊んで居た。和尚さんが手を出すと、不思議にも素直に抱かれて行つた。『まア、此子は何うしたんでせう、解るんだわねえ。』若い母親は目を睜るやうにして言つた。何處か悲しいやうな調子も籠つてゐた。

銀杏返の女の故郷は雪の深い寒い山國であつた。何かにつけて美佐子がくよくよしてゐるので、『一緒

に私の故郷の方へ行つて見ませんか、東京に居て何か考へて居るより山の温泉にでも行つて見る方が餘程好いと思ふわ。そして二月ほどゐて、歸りにみいちゃんを田舎のお寺に置いて來て、それから新しい本當の藝術に入らうぢやありませんか。』かう其女は美佐子に勧めた。

師匠もそれに賛成した。

美佐子は道子を負つて出かけた。寒い／＼雪の中の田舎町、凍豆腐と蒟蒻の御馳走、かん／＼と雪の凍つた町の道、家々の軒には氷柱が長く下つて、子供達は竹の輪の下駄を穿いて軒下で氷滑を遣つて居た。それでも二人が其の町に居る間は、晴れた好い日が續いて、四面の山々は雪が眩いほど碧い空にかがやいて居た。銀杏返の女の家には、朴訥な父母と肥つたやさしい姉さんとが居た。故郷の火燵の周囲の暖かい團欒は、親を離れた美佐子の心を動かさない譯に行かなかつた。彼女は三百里を隔てた遠い山中の父母の夢を毎晩のやうに見た。

二三日してから、二人は山の温泉へ行つた。其處には溪流が濃い錆鐵色に寒さうに流れて居た。大きい鐵の橋なども架つてゐた。縣廳のある町から人々の遊びに來るやうな處で、山の中には見られないやうな一種の賑かさを持つて居た。其處では三味線の音も聞えれば、女の騒ぐ聲もした。二人は大きい旅館の三階の一間で日を送つた。今日からは藝術の眞生活に入るのだなど、言つて、揃つて前髪を切つて支那の女のやうな髪形の形にしたりなどした。可愛い子を一人つれた此處等には餘り見馴れない二人を人

人は不思議にした。噂の種にもした。

その三階の一間には晴れた春のやうな日影がさしたり、烈しい吹雪が凄じく吹きかけたりした。二人は寒くなると日に何遍となく梯子を下りて、漲る湯壺の中に肌を浸した。全く世を忘れたやうにして二人は暮した。

其處で道子は最初の誕生日を祝つた。其日は婢に頼んで態々赤い御飯を炊いて貰つた。白酒を買つて来て飲んだりした。銀杏返の女は酔つて道子に髻を生やして見たりして笑ひ興じた。それは雪の降頻る日であつた。若い母親は、道子を抱いて、熱いキツスをして、『お前のお父さんは今日は何うしてるだらうねえ。何處かでお前さんの誕生日を祝つてゐて下さるだらうねえ。』など、言つた。

二人は一月以上も其處に居た。

歸りに寄つた田舎の寺では、和尚さんも上さんも喜んで迎へた。一人ぼつちの寺の女の兒も、嬉しうにして道子を見た。

野には芹、よもぎ、なづ菜などがもう蒔え出して居た。山から比べると、別な世界に來たやうに暖かであつた。梅なども咲いて居た。二人は寺の本堂の一間を借りて、其處で自炊をした。寺の人達に道子の昵むまで、かう言つて二人は一日一日と暮して行つた。鹽が辛くつて口の曲るやうな鮭だの、サンマせてゐた。

もう、物を食ひ習ふやうにと、鹽煎餅なども買つて來て置いた。

寺の上さんは道子を負つたり何かした。乳を離れさせるやうに、やうにと若い母親は骨を折つた。乳を飲まうとすると、目を險しくして叱つて見せた。と、道子は母親の機嫌を取るやうにしては乳に縋つて來た。若い母親は心の中で泣いた。

でも別れる二三日前には、寺の女の兒と一緒になつて、日當の好い庫裡の玄關で、元氣よく遊んで居るやうになつた。それは曇つた佗しい今にも雨が降つて來ようとするやうな日の午前であつた。『それぢや何うぞお世話を——』言ひかけて若い母親は急いで見附けられないやうにして寺から出て來た。道子が上さんに負はれて畠の方へ行つた間に、母親は銀杏返の女と一緒に汽車に乗つて別れて來た。

母親の眼は長い間赤かつた。

四

これから淋しい藝術の生活に入らうとする間際になつて、不思議にも美佐子の心は別れた男の方に向つて行つた。悔い改めた男は、美佐子が東京の郊外の家に歸ると間もなく、その所在をさがして遣つて來た。子から離れ、藝術に入る淋しさに堪へかねた女には、やさしい甘い男の言葉に昔の戀の復活を認めない譯には行かなかつた。一度男を知つた女の一人住ひの淋しさも堪へ難かつた。男は其時別れた間のさびしい苦悶を記した日記を女に見せなどした。道子の誕生日の條に圈點が施してあつて、その一日の淋しく悲しかつたことが細かに哀れに書いてあつた。それが深く美佐子を動かした。

男と美佐子と師匠と、この三つの心は再び生きて動いた。師匠の不賛成は美佐子と男との戀の復活に火をつけたやうな結果になつて行つた。『そんなことをするなら、一切構はん。もう路傍の人だ。』師匠は激した。

『自分の生んだ子が重荷だからツて、それを他人に育てさせて、また元の男と一緒にならうなんてよく言へたものだ。』こんなことも言つた。

美佐子は男の心に引かれて、ある日、銀杏返の女の留守の間に、戸締りをして、そして出て行つた。

『そんなことはない、そんなことはない筈ですが。』かう銀杏返の女は不思議にした。けれどそこには

他人には解らないやうな深い複雑した心理が三人の間に働いてゐたのであつた。

若い母親と道子との縁はこれで切れたも同じやうになつて了つた。『先生に頼んで道子を引取つて、』と云ふことは、男と美佐子と一緒にいる話の大きな條件になつて居たが、さういふことは言ひ出すことも出来なくなつて了つた。師匠の方でもそんな風にして行つた女にさういふ好意は持てなかつた。男が女の家へ行つてぢかに女を奪つて行つたといふ形が師匠には不愉快であつた。敵——かうした考を互ひに抱いた。

それから三月ほど二人は東京に居て職を求めた。しかし何處にも口はなかつた。やがて二人は相携へて田舎の新聞社へ行つたといふことを師匠は耳にした。男は始めて完全にその女を獲ることが出来たのである。

五

で、何も知らない道子は愈々頼りない位置に置かれた。師匠は美佐子の出踪以來、道子に對して一種憎惡の念を抱くやうになつた。美佐子の子としてではなく、其男の子として憎かつた。さういふ重荷を平氣で置いて行つて、再び戀の歡樂に身に任せた二人の憎いものにつれて、矢張道子も憎かつた。自己の不滿に對する焦燥の念もいくらかそれを手傳つた。

和尚さんは、『困つたもんだね、』など、言つた。けれど籍はもう和尚さんの方に入つて居た。何うすることも出来なかつた。『まさか先から返せとも言へまいが、返せと言つたつて、さういふ風にして行つたんではおいそれと返しても遣られないね……若い者はそれだから困るねえ。そんな真似をしないで、それならそれで、圓滿に解決することがいくらでも出来るのに。』かう和尚さんは笑ひながら言つた。勿論、やさしい和尚さんは、それが爲めに、一度自分の子にした道子を可愛がらなくなるなど、言ふことはなかつた。けれどいくらか氣分が違はない譯には行かなかつた。

寺の上さんは、『一緒になつたら返して了ふ方が好いがね。』とも言つた。

道子は其頃はもうかなり寺の親達に懐いて居た。泣いて泣いて終夜寝られなかつたのは二晩位で、その新しい境遇にもやがて道子は馴れて行つた。やさしい人は解ると見えて、和尚さんにはいつも喜んで抱かれたり負はれたりした。

道子はやがて若い母親の手元にある時とは丸で見違へるやうな子になつた。もう前のやうな綺麗な可愛い子ではなかつた。鼻涙を出したまゝ、汚い顔をしたまゝ、汚れた手足をしたまゝで居ることが多かつた。都會の子の育て方と田舎の子の育て方では其處に夥しい違ひがあつた。

師匠に取つては、道子を見るのが不愉快でもあり辛くもあつた。その爲めに田舎の寺へ行くのを見合せたことも一度や二度ではなかつた。『あゝあゝあの子が居るんで、田舎へも行く氣にならなかつた。』かう細君に言ふことなどもあつた。道子を見れば——見違へるやうな汚い田舎子になつて、それも知らずに莞爾して居る無邪氣な道子を見れば、染々可哀相になつて、何うしてそんな考を起したかとは思ふが、それと共に、憎い無責任な二人が、歴々といつも眼の前を掠めて通つた。『無責任な奴だ！ 子供をかういふ境遇に放り出して行つて。』かういふかれは、續いて無責任な行爲を二人に行はせるに至つた動機を考へて黯然とした。

『離れて居ると、見るのも厭だといふ氣がするが、莞爾してゐる無邪氣な顔を見ると憎むことは出来ないね。』

かう師匠はある時和尚さんに言つた。

道子は段々大きくなつた。母親に別れる時、辛うじてつかまり立ちが出来た位であつたが、此頃ではもうちよこちよここと二歩三歩足を運ぶことが出来るやうになつた。今歳九つになる寺の女の兒はよく負つて外へ行つた。上さんにももう懐いてゐた。寺の兒と近所の子供と庫裡の玄關の處に遊んでゐる中に交つてちやんと坐つてゐる小さい姿は、いつも四邊にくつきりと際立つて見えた。

『かア』『とア』など、いふ言葉も覺えて來た。不思議にも本當の子のやうに我儘をいつたり泣いたり喚めいたりしなかつた。物を貰ふと『あん』と言つてお辭儀をした。

『本當にわがりの好い兒だよ、』と上さんは言つた。

不愜といふ情が一層加はると見えて、和尚さんは『道や、道や、』と可愛がつて育てた。女の兒が根性の悪いことなどをすることがあると、『お前は道の姉さんぢやないか。そんなことをするもんぢやない、』と言つては叱つた。時にはその事で和尚さんと上さんとの間に物言ひが始まることさへあつた。『道は母さんに似たと見えて、しつかりしてるよ、中々敵ひやしない。』こんなことを上さんは言つた。

夜は一度づゝ眼を覺ました。それから和尚さんの床の中に入らなければ承知しなかつた。

夏が來たり秋が來たりした。銀杏の葉はやがて黄くなつて落ちた。裏の林が海のやうに鳴る冬も遣つて來た。田舎へ行つた若い父母からは何の頼りもなかつた。

『何うしても本當の子とは違ふね。』

ある時、和尚さんはかうしたことを東京から來た師匠に言つた。道子の二誕生の頃であつた。

『自分はそんな氣は少しもない。本當の子として育て、居る積だが、何うも違ふねえ。本當の子なら物など欲しがつても、折檻してまでも遣らないやうにするんだけれど、何うもさういふ氣にまではなれない。寧ろその反對に物惜しみをするやうに人に思はれるやうな氣がして、つい多く遣つて了ふやうになるよ。』

『それはさうだらう。』

『肉體の關係といふものがないから、つまりさういふことになるんだねえ。』

和尚さんは平生に似合はないやうなことを言つた。二人は貫子といふことに就いて話した。『何うも矢張本當の親が育てるべきものだ。つくづく僕は貫子といふものゝ不自由だといふことを悟つた。』かう和尚さんは繰返した。

道子は可愛い氣のない子になつてゐた。濃かつた髪の毛も薄く、顔も蒼かつた。お腹と頭とばかり大きかつた。

ちよこちよこ遣つて來て、其處に坐つてゐた。饅頭などを小さい椀に分けてやると、それを手で食つた。悪戯などもよくした。言ふことをきかないと、『養子ツ子に遣つちまうぞ。』かう言ふと、和尚さんの顔をぢろぢろ見ながら悪戯する手を留めた。

和尚さんが道子を抱いて、わざと、

『道は養子ツ子に行くんだな。』

と言ふと、すぐ頭を振つて見せた。

『さうか、行かないのか、父さんは養子ツ子に行くとはかり思つて居た。』

道子には養子にやられるといふことが何より辛いしかつた。

師匠は道子を見る度にいろ／＼なことを頭に浮べた。あの若かつた美佐子の子と言ふことが不思議にも思へた。何時となくあの女の青春の夢の過ぎて行つたことなども考へられた。道子の大きくなつた後——かれと美佐子と道子との間にいかにロマンチックな物語が編まれるであらうかなど、も想像した。道子が物心がついてからの自分に對しての考も想像された。

他人に貫はれた子としては、道子は寧ろ仕合の方である。しかし矢張不仕合の運命のもとに生れた子であつた。

夏は跣足で土いぢりなどをしてゐることもあつた。上さんが畑で仕事をしてゐると、道子は其周圍で遊んで居た。鐘樓の傍に獨りてほつねんとして遊んで居ることもあつた。葬式が來ると、大勢の汚い子供に交つて、撒かれた錢を拾つてなど居た。

落葉はやがて寺の庭を埋めた。
冬がまた來た。

三度目の誕生が來た頃、めづらしく道子の父親から手紙が來た。田舎から大阪に出て新しい新聞事業に従事するといふことが知らせてあつた。新たに子が二人の間に生れたといふ消息も知れた。

もう道子は枕を賣つたり葬式の眞似をしたりするやうになつてゐた。口も大抵のことは利けるやうになつた。夜も一人て寝た。

庫裡の廣い勝手元を、芋の子を箸にさして食ひながら歩いてなど居た。

剖葦はしきりが裏の蘆荻あしの中で頻りに啼いて居た。其日は其月に入つてからの暑い日で、キラ／＼する日影の下で、笠を冠つた男が五六人、熱心に畑の桑の枝を芟つて居た。道子は午前は元氣よく其處へ行つて遊んで居た。別に變つたこともなかつた。處が日の暮れる時分、和尚さんは、道子が勝手に近い一間に疲れたやうにして寝て居るのを發見した。『何うかしたか?』觸つて見た頭は火のやうに熱かつた。眼が釣上つてゐた。

『おい道が大變だ!』

かう和尚さんは思はず叫んだ。

上さんが飛んで來た。女の子が驚いて玄關の方から遣つて來る。水を顔にかけたり、聲を立て、呼んで見たりした。前の長屋に居る傭男は、急いで醫師の許へと飛んで行つた。道子は、和尚さんに抱かれて、氣が附いて、眼を細く明いて、莞爾笑つた。しかし安心して傭男の醫師を呼んで來るのを待つて居られるやうな容態ではなかつた。和尚さんは道子を上さんに渡して、今度は自分がそ／＼と出て行つた。

何處の醫師もぐづ／＼して居て、漸く和尚さんが懇意の醫師を連れて來た時には、もう全く日が暮れ

果てゝ居た。蚊が音を立てゝ寄つて来る中で上さんは薄暗いランプを前にして、道子を抱いて心配さうな顔をして坐つて居た。脈を取つたり眼を見たりした醫師はやがて首を傾けた。困つたやうな表情が顔に上つて来た。

『何うも脳らしいですな。』

『手重いでせうか。』

和尚さんは心配した。

脳膜炎、何うもさうらしく思はれた。誰か他にもう一人立會つて貰ひ度い。かう醫師は言ひ出した。やがてその醫師も来た。矢張診斷は同じであつた。

氷を買つて来て頭を冷したり何かした。俄に湧くやうに起つて来た災害に對して人々は唯狼狽した。『母アちゃん』『父さん』といふ小さな聲が四邊に際立つて高く聞えた。裏の方の八疊の蚊帳の中には道子を抱いて心配さうに坐つて居る和尚さんの顔が蒼白く見えた。

スヤ／＼と眠るかと思ふと、道子は時々大きな眼を明いて周囲を見廻した。『母アちゃん』『父さん』と呼ぶ聲が繼續した。『父さんか、ほら、此處に居るがな。』和尚さんはかう言つて、『道、苦しいか、父さんが見えるか。』

一人の醫師は何彼と深切に世話して遅くまで居て呉れた。長火鉢のある室で、其病氣について種々な話を和尚さんにして聞かせたりなどした。『何うも脳膜炎と言ふ奴は小兒には難病ですな。それは治るものもありますけれど、多くは跡が痴呆になります、すつかり治るものは滅多にありません……知らせる處があるなら今のうちお知らせになる方が好う御座んすよ。』など、言つた。

苦痛と絶叫と烈しい熱とが續いた。其夜は誰も眠られなかつた。闇を額縁にした蚊帳の中には、疲れた上さんの顔と、心配さうな和尚さんの顔と、氷袋を顔に當てた道子の大きな頭とが終夜ランプに照らされて見えた。大きな三毛猫が其處に丸くなつて居た。

夜が微白く明ける頃には、道子はもう屍になつて居た。やさしい和尚さんの眼からは涙が流れた。『縁がなかつたな道！』こんなことを言つては泣いた。『不仕合せな兒だからと思つて、何うか丈夫に育て、仕合せにしてやりたいと思つたのに、駄目だツた。』など、言つた。上さんも眼を赤くしてゐた。女の兒は簞笥の角のところに立つて泣いて居た。

電報を受取つて師匠が其處に行つたのは、其日の午頃であつた。師匠は挨拶をするのも待遠しいやうにして、すぐ道子の屍の置いてあるところに行つた。其處には小さな枕に香爐だの杉箸を逆に立てた茶碗だのが置いてあつた。線香の烟が薄く颯つて、夾竹桃の赤い花が手向けられてあつた。師匠は蔽つてある白い帕巾を取つて、眼を閉ぢて半ば笑つたやうにして死んで居る道子を見た。師匠の眼から涙が流

れた。

『不仕合せな生涯だった。』

師匠は座敷に戻りながら、感激したやうに言った。和尚さんは昨日からの病状を繰返すやうにして師匠に話した。その聲にはやさしい悲しい調子が籠つて居た。道子の父母の處にも昨日電報で知らせ、今朝又打つてやつたなど、言つた。若い人達の何の考もない無邪氣な戀の歡樂が、かうした悲劇を形づくつて行くといふ話なども二人の口の上つた。

『本當にさうだとも……自分の本當の子なら、悲哀があつてもこんな悲哀などはありはしない。あした境遇に出來た子だからと思つて、それで同情して育て、やつたんだが……』和尚さんは又眼をこすつた。

師匠は黙つて居た。美佐子と男と自分との關係、それが無邪氣な何も知らない幼きもの、上に及ぼして行つたことを考へて黯然としてゐた。

それは幼い不仕合せな道子の短い生涯を染々と思はせるやうな夜であつた。小さな棺と線香の烟と赤い花とを前にして、町の上さんや、後家さんや、お婆さんなどが集つて來た。和尚さんと上さんとは、不意に襲はれた恐い病氣の話を繰返し繰返し人々に話して聞かせた。

その一間はさびしい、しかし明るい光に照されてゐた。田舎の夏の夜は早くも更けて、あたりはしんとした。時々思ひ出したやうに蛙のなく聲がした。涼しい夜風が絶えず入つて來て、多い蚊も左程苦にはならなかつた。

菓子が出たり茶が出たりした。十二時近くなつて、和尚さんの親友であつた人の後家さんだといふ、三十五六の意氣な田舎では見られないやうな女が遣つて來た。肥つた上品な上さんも居た。

小さな鉦が前に置かれた。

それを叩く調子につれて人達はかういふ時に此處らに流行る御詠歌を唄ひ始めた。

身は此處に、

心は信濃の善光寺、

導き給へや彌陀如來——

聞いて居ると身も心もそれに引入れられて了ひさうな柔かな悲しい調子が鉦の音につれて繰返し繰返し唄はれた。後家さんの聲には滑らかな艶な巧みな節があつた。

蠟燭の灯が絶えずチラ／＼と夜風に動いた。

鉦の音と柔かな唄の聲とは夜もすがらその一間に聞えて居た。

近所の寺から導師が緋の僧衣を着て遣つて來た。和尚さんは紫の僧衣を纏つて親族席の處に坐つて居

た。

小さな棺を前にして、幼きものを葬る儀式はやがて始まった。本堂には近所の人々や道子の一緒に遊んだ子の母親や寺の懇意にしてゐる人達などが大勢集つて居た。棺の前に蠟燭の灯を配つて、やがて導師の長い長い讀經が続いた。

外では子守や子供達が、賽銭箱の處から顔を出して此方を見てゐた。

引導がすんで、これから焼香が始まらうとする頃、寺の上さんは賽銭箱の前に行つて、錢を撒いた。子供等の騒ぐ聲が一しきり喧しく聞えた。

歴代の寺僧の墓地の一隅にやがて人達はその小さい棺を運んで行つた。大きな杉の森の中に篠や雑草や小さな灌木などの茂つて居るやうな處で、暗い淋しい道には、古い落葉がじくじくした地面の上に散らばつて居た。草叢の中には、沼の跡でもあつたかと思はれるやうな黒い汚い水が溜つて光つて居た。

丸い輪塔形の墓が其處にも此處にもあつた。穴を掘つた處は左の隅で、水が三尺位のところまで溜つて居た。『何うも水があるんでかなはない。』人足はこんなことを言つて、棺を納めた後の土を丸くならした。

香爐、位牌、線香の烟——位牌には仙鶴禪尼としてあつた。寺の籍にあるからさうした戒名をつけた

と和尚さんは師匠に話した。尼、幼ない尼、道子の短かい一生には相應はしい戒名である。

寺では世話になつた人達に膳を出すといふので、その支度に忙しかつた。近所の人達が大勢手傳ひに來て大根を切つたり、饅頭を打たりして居た。勝手元には大きな鍋から湯氣が白く立つた。

十二疊の座敷には、導師を中心にして、寺の重立つた世話人だの、町長だの、學校の教員などが並んで居た。東京から來た師匠もその一隅に黙つて坐つて居た。豆腐汁に蒟蒻の刺身にがんもどきの煮附、さうしたものを載せた膳は、やがて人達の前に運ばれた。一しきり可哀相な幼い子のことが繰返されたが、それが濟むと、今度は地面の話だの、町の人々の噂だの、作物の話などが出た。老いた導師は、盃を唇に當てながら、梅干をつける時の話を隣の鬚の生えた男にして居た。

町より山へ

上野から久喜に来るまで、女中はあらかた居眠をして居た。昨夜は近頃でない忙しい晩で、客が三組まで立込んで、トロ／＼する間もなかつた。旅の支度を其間にした。小雪も十二時過から来て泊つた。汽車に乗る時には、もう生憎な雨が細く降り出した。

王子、赤羽、大宮――

『くき。』

と白い板に黒く書いた字がチラと眼に入つたので、小雪は、

『ほら、もう此處が久喜だよ。』

と女中に注意した。

女中が眼を覺すのを待たなかつた。停つた汽車の窓に降り懸る朝の細かい雨を衝いて、茶色の中折帽、縞の裕のインバネス、金縁の眼鏡、肥つたにこ／＼した顔が、車内の丸髻に結つた色白の小雪の顔と相對

して立つた。

客が扉を開けて車内に入つたのと、女中が眼を覺したのとは同時であつた。『まあ、先生――』と驚いたやうに眼を睜つた。此男の行く家では、女將も女中も皆な先生々々と言つて居る。『先生と言はれるほどの馬鹿でなし――』などと小雪は三味線の撥を下に置いて、古臭いことを言つて笑つたことなどもあつた。それは横に長く二つに仕切られてある二等室であつた。後ろにはこれから長い旅を白い毛布に寝て行かうとする中年の紳士もあつた。夏蜜柑の剣き懸けたのや、ウキスキーの小瓶や、あけび細工で出来た籠や、辨當の折や、空土瓶などがそこら一面に散らばつて居る。紳士は成程讀めたといふやうな顔をしてちつと此方を見た。

近くの窓の處では、そんなことには眼も呉れずに、熱心に厚い本に讀耽つて居る三十前後の男が居た。車室の混雜して居ないのに、先づ少なからず安心したといふ風で、客は二人の女に相對して腰を懸けた。女の細い白い指と、純金の指環と、勝色に白く草花の出た派手な襟とが眼に留つた。

『此人は眠つてばかり居て仕方がないのよ。久喜だと言つても知らずに居るんだもの……折角連れて来て貰つて、何も見ないで、眠つてばかり居る氣がしれないわねえ。』

小雪がかう言ふと、女中はくしゃ／＼した眼を摩りながら氣安げに、

『私は眠らして貰ひさへすれや好いんだよ。遠出にお客様に連れて行つて戴く時には、いつも存分に

寝かして戴きさへすれや——本當に一晚だつて緩くり寝た時なんかありやしないんだもの——今夜は宵の中から眠らせて貰ふんだ。』

『たんとお寝なさいな……眼が流れるほど寝ても好いわ。』

かう言つて小雪は笑つた。

續いて昨晚の話が出た。二時から二人で寝ようとしたが、何うしても寝られなかつたことやら、宵の中に鮎屋に折詰を頼んで置いた處が忘れて持つて來なかつたことやら、昨夕の客が酒に酔つて寝かしても寝かしても起きて來るので藝者も女將も困つて居たことやら、丸鬻に結つてある處に行つて居たら、お客から『小雪お目出度いな、』と言はれたことなどを話して聞かした。女中も小雪と同じやうに矢張丸鬻に結つて居た。

『お慶さんもお目出度いぢやないか、よく似合ふよ。』

かう客は軽い調子で言つた。

女中は大きな鬻を自分で撫でて見て、

『昨夜も散々冷かされちやつた。高公がこん畜生丸鬻に結やがつたなツと言つて酔つぱらつて、ぐんぐん押附けるんだもの、困つて了つた。』

『本當によく似合ふよ、これからいつでも鬻にお結ひよ。お茶屋の女中らしくつて好いわねえ。』

『いやなこつた!』

と女中は小雪に舌を出して見せた。二人は心安い間柄であつた。

汽車は駛つて居た。五月の末はもう稍暑かつた。衣更をしてから彼は二十日以上にもなる。勝色の鶉縮緬の九重羽織が瘦削なすなりとした藝者の姿に似合ふ頃には、野は濃い薄い若葉に彩られて、櫛のやうな樹にも嫩々しい葉が簇生した。右も左も麥の縁が波を打つて際限なく續いて居る。厚ほつたい葉の常磐樹の垣の傍を通るかと思ふと、今度は子供を負つてやぶれ番傘をさした田舎の唄が、色の褪めた旗を出してゐる踏切の小さい番小屋の傍を、汽車は凄じい音を立て、通つた。周圍には綺麗に刈込んだ櫛の垣、門の中には廣い庭に鶏が繪のやうに遊んで居て、母屋の裏に白壁が三つまで見える豪農の家もあれば、田の青々とした向うに、藻だの藺だの葦だのの生じた小さい河があつて、それにザン／＼と雨が降頻つた。

風も少し出て來た。それにつれて、雨が室内に降り込むやうになつた。窓際に腰をかけた小雪は、細い白い腕を惜し氣もなく見せて、顔を少し蹙めて、硝子窓を上げた。雨はその硝子窓にザン／＼と降りかかる。時の間に點滴が流れて落ちるやうになつた。

『生憎なお天氣ねえ。』と小雪は染々言つた。

利根川は雨に烟つて居た。鐵橋を通る音に氣が附いたといふやうに、後ろにゐる紳士は寢ながら首を據げて、赤い顔を窓の處に出して見たが、すぐまた元のやうに寝ころんで了つた。そして今度はむかう向きになつた。半孕んだ濡れた白帆がさびしさうに遠い處を一つ通るのが見えた。

停車場では、車掌が雨を外套に浚いで、小さくなつて、着いた驛の名を觸れて通つた。驛長が丸いものゝ受渡しを機關長にして歸つて行く向うに、大きなボン／＼時計が懸つて、硝子窓の中の卓や書類や電信課の役員などがそれと見える。出口からは、下りた客がぞろ／＼と續いて出て行く。尻ばしよりをした上さんもあれば髪を箒のやうにした百姓男もあつた。子守が柵の處に立つて、ボカンと退屈さうに此方を見て居た。

野が野に續いた。小松原の中の路を傘をさして行く女もあつた。

麥畑の縁の中に、一軒ほつねんと立つて居る小さな藁葺屋根があつた。軒が低く、障子は黒くなつて居た。それに四邊には家らしいものも見えなかつた。降頻る雨は一層それを淋しく見せた。

『こんな處に住んで居る人も世の中にはあるんですかねえ！』

かう言つて、女中はそれに見入つた。

小雪も客も其方を見た。さびしいといふ心地は客にも小雪にもあつた。

『あゝいふ處にあゝして暮して居る人間もあるんだ！』

かう言つた客の聲は重かつた。

小雪は黙つて居た。

『よく泥棒なんぞ來ないもんねえ。』かう言つたが、女中はすぐ調子を更へて、

『いやなこつた。こんな處に住んで一生を暮らすのなんざアいやなこつた。』

『お慶さんは、いづれ其中、貯金を出して、いい人と炭團屋でも始めるんだらう。』

かう言つて客が笑ふと、

『炭團屋は結構ねえ。』と女中は濟してゐる。

小雪は傍から、『ところが、貴郎、此人の貯金は大したものよ。』

『さうか、それぢや男にだまされないうやうにするのが専一だねえ。』

『ところが何うしてそんな甘いんぢやないんですから、此人は——』

『雪ちゃんおよしよ、馬鹿な。』

女中は打消した。

しかし三人は三人とも銘々の身の上を思はぬ譯に行かなかつた。廣い野中にまた一軒さびしい藁葺家があつた。

小山では、人が乗つたり降りたりした。本を讀んで居た男の代りに、地方の豪家らしい田舎紳士と若い綺麗な丸鬚の細君とが乗つた。プラットホームを思ひくくの身なりをした人がぞろ／＼と通る。驛夫の手荷物を載せた車を運ぶ音と、人のせはしく通る足音と、物を賣る停車場商人の呼聲とが一緒になつて、廣い天井に反響した。女中の急いで厠に行く間を、小雪はサイダと夏蜜柑とを買ひ、客は敷島とビールとを買つた。飲む器がないとて、其處等にうろ／＼してゐる大きな藥罐を持つた男を呼留めて、入りもせぬ茶を二箇買つた。銅貨でよこした五十錢銀貨の釣錢を客は一方ならず持餘して居た。五分停車の間がやがて盡きる。車掌が客車の扉をガタン／＼と閉める。その頃になつても女中は戻つて來なかつた。小雪は顔を車窓の外に出して厠の方を見て居たが、やがて手招きをした。慌て、驅け込んだ女中はセイ呼吸を切らしてゐた。

小雪のそれ者らしい姿と、客の無骨な様子とは、此處で乗つた若い丸鬚の細君の注意を惹いたらしかつた。見ぬ振をしてじろ／＼と見て居た。小雪の眼も幾度となく其細君に注がれた。その小雪をまた客は見て居た。

しかしそれも長い間ではなかつた。お互に見て了へば——途中で邂逅した犬と犬とが其毛色を見るやうに見て了へば、それでお互に氣がすんで、小雪はサイダを飲み始めるし、細君は夫に話し懸けるし、客は巻煙草にマッチを摩り出した。女中は自分の信玄袋から紙に包んだ菓子を出して『これは昨夕貰つた

のをこの中に押込んで來たのよ。何んな菓子だか知らないけれど、』と言ひ懸けて明けて見て、まア厭だと打捨るやうに言つた。中には大福と金罌とがごろ／＼ころがつて居た。それでも捨てもせずやがて食ひ始めた。小雪はサイダを飲んでから、夏蜜柑の厚い皮を細い指で骨折つて剥いて、帶の間から楊枝入を出して、楊枝を二本取つて、一本を蜜柑の身にさして、客の方に出して勧めた。

續いてビールの罌を取上げると、客は頭を振つて見せた。

『召上らないの？』

『まア、今少し経つてから。今は飲みたくない。』

小山から小雪と女中とは位置を變へた。今度は女中が窓の近くに居た。女中は其窓からサイダの空罌と夏蜜柑の皮とを捨てた。蜜柑の皮は丁度汽車が通りかゝつた小さい川の流に落ちて沈んだ。

三人は段々退屈して來た。客は平生から餘り戯談を言はなかつた。座敷でも藝者の弾く三味線を黙つて聞いて居るばかりで、唄一つ唄つた例がなかつた。小雪も藝者としては餘り狭な方ではなかつた。二人相對して黙つて坐つて居ることなども幾度かあつた。其處へ女將や女中が入つて來ては、『いやに氣が詰るわねえ、』とか、『いやにしんねこねえ、』とかいつも言つた。女中は女將が此旦那に京都へ連れて行つて貰つた時の話を兼々聞いて知つてゐる。『本當にサツパリして氣が置けない人だよ。だから私達はね、先生を放つて置いて藝者と一緒に勝手に騒ぐんだからね。』女將は常にかう言つて居た。けれど女の

身に取つては餘り話がなさ過ぎた。

汽車の通る道の景色にも段々飽きて來た。行つても行つても同じ野山であつた。それに雨が降らなければ、外を見ても氣がまぎれるし、元氣も出るといふものだが、かうびしよく本降りになつて、行着いた先からも、幌をかけた車に乗つて、ある道程の間、山道を行かなければならぬと思ふと、昨夜からあれほど楽しみにしたものはないうやうな氣がした。

小金井驛を通る時、客は女共に僧道鏡の話をして聞かせた。道鏡の流された寺は此處から十五町しかなかった。其處に墓が今日まで残つて居るといふことを話した時、小雪は『まアこんな處で歿くなつたんですか、』と言つた。けれどそれよりも雀の宮といふ停車場の名の方が却つて女の心を惹いた。この次驛が宇都宮だと言つて聞かせると、すぐ釣天井の話が出た。

宇都宮で日光行に乗換へた。

乗客が皆變つた。今度は白い鬚を生やした七十近い品の好い爺さんと、切下げのこれも矢張品の好いお婆さんが一緒に同じ車室に入つて來た。お婆さんは信玄袋を上綱に載せて、お爺さんの手提を其傍に置いた。その他に縣廳の役人らしい洋服姿の男が三人ほど居た。

汽車の發車しない中から、客は麥酒を飲み始めた。今度は女中と客とが並んで、小雪は客の前にな

つて居るところに横向きに腰をかけた。そして肱掛に凭り懸つて、此方を見ながら、客の持つた茶碗に麥酒をついで遣つた。客のさす茶碗を受けて、二三杯小雪も飲んだ。女中は頭を振つた。

客の顔はやがて赤くなつた。汽車が砥上の原あたりを通る頃には、麥酒の饅ももうあらし空になつて居た。品の好いお婆さんは客と小雪が麥酒を飲み合つて居るのを、めづらしいものを見たといふ顔色をして先刻からちつと見て居た。土地のさまの段々變つて來たのが小雪にも知れた。麥や稻はもうなくなつて、廣い野の一面には、生れてまだ見たことのない青々とした低い草のやうな木のやうなものが繁つて居る。

『それは麻の木だよ。』と客は言つた。

『あれが麻？ 蚊帳にする？』

眠つて居たかと思つた女中が傍から不思議さうに言つた。

雨は矢張降つて居たが、しかし近い處の山々は見えた。白い雲が大きな綿のやうに簇々と山から昇るのを見ては、退屈であつた今までのあくびも忘れぬ譯には行かなかつた。『お慶さん、御覽よ、雲が丸で繪のやう、』などと小雪は言つた。

小雪も酔つて、顔がほんのりと色づいて居た。

汽車は煤煙を颯けて、凄しい息づかひをして登るやうになつた。鹿沼の停車場を過ぎると、廣い野か

ら段々狭い山に入つて行くやうな氣がする。麻の野原はいつか樅や榛の林に變つて、下には笹や萱が茂つた。雨にぬれた若葉は鮮かな新しい目も覺めるやうな色をして、時には明るいトンネルをつくつたり、時には濃淡の幕を張つて見せたりした。汽車の線路の縁には、綺麗な小川が流れ、それに仕かけられた野碓は、水の満ちて來るのを待つて、をりくく白い小さな瀧を見せた。

林を通つて野に下りて行く屈曲した道も見えた。

人々の心は次第に都會に離れて行つた。この漲るやうな豊富な色彩は、都會にのみ馴れた小雪の眼を驚かした。三味線の音のする世界とは全く別の世界であつた。

緑葉が絶えずチラ／＼した。

その緑葉の下を縫つて、紅い色がをりくく低く交つて見えた。餘りに低く、餘りに小さいので、客も初めはそれをしどめの花だと思つた。しかしそれは誤りであることが段々知れた。後には丈の高い色の濃い同じ花が目まぐるしい位に多くなつて來た。言ふまでもなくそれは躑躅であつた。

『綺麗ねえ。』

と小雪は感に堪へたといふやうな調子で言つた。

小雪の眼にはさまざまな色彩が消えたり映つたりした。緑葉の下を汽車の通る時には、その濃淡の影が細い雨を透して、小雪の白い顔や衣の上に動いた。

暗い大きい杉並木を指して、

『これが日光に名高い杉並木だよ。これが二筋になつて、一方は宇都宮から一方は鹿沼から七里の間續いて居るのだからね、大したもんだ、』と客は言つた。

其杉並木の中にある小さな停車場では、上りの汽車が煙を立て、下り列車の來るのを待つて居た。其處には薪が山のやうに積まれてあつた。一とこ並木の絶えた處には、板葺の軒の低い家が二三軒さびしさうに立つて居た。鬚の茫々と生えた山の男が、其家の裏で大きな木根に鉞を當て、居た。

今市では、五分間停車した。

車窓の前は下り客のプラットホームになつて居た。勿論板を打附けて圍つたばかりのプラットホームであつた。前には神橋や中禪寺湖や華嚴瀧を色彩澤山で描いたホテルの廣告札が無數に立つて居る。建物の蔭になつた處は雨の細い脚が濃くはつきりと見えて、田圃を越して、緩い山の連続が灰色の空を劃つて居る。ふと小雪の眼が深くあるものに注がれて居るのに客は氣が附いた。

其處には、低い道路に添つて、こけら葺の棟割長屋が三四軒續いて居た。一軒は雨戸が堅く閉められてあつた。一軒は入口に仕事場があつて、中年の男が汚い筒袖を着てせつせと下駄の齒入をして居る。一軒は駄菓子屋で、平に並べた硝子箱の中に豆菓子やねちり棒やかかりん糖が入つて居て、其上の竹筒に

は三角のトンカチ棒のついた小旗が幾本となくさしてあつた。一間しかない部屋の中が明かに見透される。畳の汚れたさまなどもそれと見える。其處に肥つた上さんが生れて一年位経つた子をあやして遊ばせて居ると、これも矢張肥つた上さんが、發育の好い、巾着頭の、足なぞのはち切れさうに肥えた同じ年恰好の子をたゞ負ぶして、さも苦勞のなささうに笑つて話をして居る。——小雪はそれをちつと見て居る。

ちつと見て居る……

客もちつと小雪の眞面目な熱心な顔を見詰めた。

小雪の心持がはつきりと解るやうに客にも思はれた。

小雪は今年二十四である。淺草でお酌で出て、それから日本橋に二年、新橋に一年、今の處に一年半、それに、ある客に引かされて一年、上州のある田舎町に半年ほど居た。體も平生餘り丈夫な方ではなかつた。それに借金もかなりに多かつた。

ふと宇都宮から一緒に乗つて來た老人夫婦の話が耳に入つて、客は心を其方に奪はれた。

『何うしますか、今日お宮にお詣りして、すぐ歸りやすか。』

かうお婆さんが言ふと、お爺さんは、

『折角來たんちやから、一晚ゆつくり泊つて行かう。』

鷹揚な、しかしやさしい調子で言つた。

『こんなに雨が大降になると知つたら、寄らずに置いてゆくぢやつたにな……』

此の近國の人でないことは、言葉の訛でも知れた。世の中のつとめを果して、娘は人に遣り息子には嫁を取つて、少しの心配もなく、かうして旅をして見物して歩く人は幸福である。客はいろ／＼なことを考へずには居られなかつた。

先程から頻りに珍らしさうに此方を見てゐた老人夫婦は、今度は却つて此方から見られるやうになつた。

五分は経つた。

車掌は笛を鳴らした。

小雪は喪心した人のやうに猶ほちつと見詰めてゐたが、汽車が動き出して、その光景が見えなくなる、急に思ひ返したやうに客の顔を見た。莞爾と笑つて見せた。

日光の停車場は混雑した。幌をした車が幾臺となく出口の處に集つて、汚い股引の車夫が客の顔を見詰めて乗車を勧めた。話が決つて逸早く曳き出して行く車も一二臺はあつた。暗い古い杉並木を背景にして、此地に著名な旅籠屋の支店の繪看板と字看板、其家々の入口には、番頭が聲を呷して、『小西屋は手前でございます。』『神山は此方でございます。』と呼んでゐる。遊覽者のつどひ來る土地といふにほひが誰に

も逸早く感じられた。

小雪の一行は停車場の雑選の中に暫らくの間見えてゐた。色の白い、大丸髻の姿が四邊にくつきりとした。車が三臺一行を丸く取巻いて梶棒を下した。雨が降頻つても、山近い道路は、泥濘むやうなことはなかつた。

幌の中から顔だけ出した小雪には、何も彼も目新しく見られた。あのやうに名高い日光の町がこんなにくけら葺の軒の低い家が多い處かと先づ驚かれた。例の四角の羊羹が絶えず眼に附く。狐の皮や鹿の皮を下げた家がところ／＼にある。小さい旅籠屋が門並につゞく。自然にのぼり具合になつて居ると見えて車夫は梶棒を胸の處に上げて曳いて行くので、體はおのづと前路になる。前の山の樹の上には鼠色の雲が懸つたり晴れたりした。

水道らしいものが路の畔にあつた。赤い襷を懸けた色白の肥つた娘が、傘を片手に栓を捻ると、綺麗な水は小さい瀧をなして手桶の中に落ちた。柳川、大蒲焼、料理屋らしい家の構がところ／＼に見え出した。丸い御神燈の懸つて居る家もあつた。小雪はあるお客から聞いた日光の藝妓の話と思ひ出した。其處に照子といふ流行子が居た。それがある夜日光のお宮の技師をして居る旦那と口説をして、ランプを引くりかへして町を半分以上も焼いたといふ話を聞いたことがあつた。さう思つて見ると、成程兩側の家屋は皆新しい建築であつた。此處では夏場には宇都宮や東京から出稼ぎが入つて来て、藝者が百人以上にもなるさうだが、多くは西洋人相手だと聞いた。

町は段々綺麗になつた。大きな家屋が其處にも此處にも見える。繪葉書を賣る店や、水彩畫を並べた硝子戸や、西洋人相手の美術品商や、林檎玉菜オレンジなどを並べた西洋物貨店などのさまざまの色彩がチラ／＼した。

大きな旅籠屋では番頭が聲を揃へて迎へた。

三階の八疊に通された。欄干からは雨にぬれた日光の町の通りが見えた。電信柱には燕が飛び違つた。三人は此處で中食をした。鮭のてり焼や、ソボロや、玉子焼などは客にも小雪にも口に適はなかつた。

『西に行くと食物が總て旨いが、此方に來ては駄目だねえ。西洋人相手だから、西洋料理はかなり旨いのが食へるが、カツレツやオムレツでは酒は飲めない。』

こんなことを客は言つた。

『貴郎も西洋料理は嫌ひねえ。』

と小雪は笑ひながら言つた。

女中は傍から、

『雪ちゃんも嫌ひ?』

『え、く、私、大嫌ひ。』と小雪は力を入れて言つた。

町より山へ

小さい徳利には藍模様で山水に瀧が落ちて居た。小雪も一二杯飲んだ。飯が済むと、土地訛の、メリンスの赤い帯をしめた女が膳を下げに来る。女中は欄干の處に立つて降りる雨を見て居たが、不圖思ひ附いて、

『此家の別荘つて言ふのは何方なの？』

『それ、向うに見えるぢやないか、それその向うの山の處にある。』と客は指さした。

『あゝ、あれがさうなの、あの二階が！』

高い處に古い二階屋が一棟見えた。上下にある幾箇ともない室が指さされる。障子が半ば開いて、庇の女學生らしい姿のチラク／＼見える室などもあつた。

女中は室内に戻つて来て、

『女將はあの別荘に長く来て居たことがあるんだつて。』

『此間、そんなことを言つてたね。藝者をして居る時分だらう。』

『えゝ、』と笑つて居る。

『お客に連れられて来て居たんだらう。』

『それが面白いんですよ、』と女中は得意さうに笑つて、『此處の旦那がね、其頃東京で女將を買つて居

たんですよ。』

『さうねえ、そんな話をして居たこともあつたわね、』と小雪も笑つて、『何でも此家のお上さんになるつて言ふ話もあつたんだつてねえ。』

『それが可笑しいんだつて……』と女中は愈よ得意になつて、『別荘に居て、晝間は知らん顔をして居るから誰も皆なお客だと思つて居るんですよ……。此處の旦那もね、晝の中は、店で雇人と一緒に働いて居て、夜になると、こつそり遣つて来るんだつて……』

『そいつは面白いな、』と客は笑つた。

女中は、『けども今の方が結局氣樂よ、こんな處のお上さんになつたつて、女將の氣象ちやとてもぢつとして遣つて居られはしませんからねえ。』

『さうねえ。』

と小雪も言つた。染々した調子であつた。

兎に角、中禪寺までは行くことにした。馬返までは車、其處からは籃輿といふことに話を決めた。東照宮の見物は歸途にすることにした。

旅籠屋の入口に車が三臺待つて居るのを、『鳥渡、神橋を見て行くから、』と言つて、客は先に立つて歩

いて出懸けた。屋號をくろくくと書いた大黒傘を宿の男が小雪にわたさうとすると、

『私は好いわ、』と言つて、小さい勝色がかった蝙蝠傘をさつと開いてさした。縞の夏コートに雨が降り懸つた。

女中は大黒傘をさして、厚ほつたい色の褪めた冬コートを着て、股をひろげたやうにして後から遣つて来た。

眼の前には、綺麗な谷川の瀬が開けた。其處には寫真で見馴れた朱塗の橋がゆつたりと懸つて居る。白い處と碧い處とを巧に織り込ませた瀬は、淙々と音を立て、流れて居る。向う側の石段の間からは、清い水が瀧のやうになつて白く碎けて漲り落ちた。

客は先に行つて、假橋の欄干のところ立つて、それに眺め入つた。斜にした蝙蝠傘には雨が降り濺いだ。其處に小雪も来て立つた。

『綺麗ねえ。』

いつもの調子で言つた。

『あ、これが日光の神橋ね。』

と後から遣つて来た女中は始めてそれと氣が附いたらしく言つた。

三人は暫し固まつて眺めて居た。三臺の車はぞろぞろと後から跟いて来た。車夫は孰れも屈強な男であ

つた。馬返に行つて人足が足らぬといけぬから、一人餘計にあと押を増して呉れといふ意味を、其の一人が客の傍に来て言つた。客は軽く點頭いて見せた。橋を渡つて、日光名物を賣る店の前で三人は車に乗つた。店の前に坐つて居る藝者でもしたことのありさうな細君は小雪の蝙蝠傘を疊んで車に乗るところをしげ／＼と見てゐた。

車は暫し谷川の岸を駛つた。

幌の中から見る四邊のさまは、活動寫真を見るよりも飽氣なかつた。それに景色が小さく縁で劃られてあつた。屋根が見えたり、草鞋を吊した家が見えたり、通りすがりの皺くちや婆さんが見えたり、谷川の泡立つ瀬が見えたりした。雨さへ降らなければ、此處等は歩く筈であつた。そのめづらしい處々を香氣に楽しく歩く時のさまを三人は前から想像して居た。瓢箪でも下げて行きませうかと小雪は言つた。『三里！三里位何でもありやしませんよ。私、歩くわ、ねえお慶さん、歩くともねえ、』とも言つた。今日、幌に包まれて行くのがいかにも佗しかつた。

含満が淵では車を下りた。雨に遊覽者の立寄るものもなく、縁臺からは毛布が皆な取去られてあつた。客の來たのを見て、髪を蓬にした上さんは、慌て、赤毛布を一枚抱へて来て、谷に臨んだ縁臺の上に敷いた。丸い粗末な卓の上には躑躅の根つこで拵へた火鉢が置いてあつたが、其處には徒らに灰が白くなつて居た。欄干の下には恐ろしいやうな谷が瀬を爲し渦を卷いて凄しく流れて落ちる。其向うには、首

が取れたり鼻が缺けたりした苔の蒸した地藏尊が無数に並んで居るのが見える。小雪は卓の傍にある粗末な椅子に腰を掛けて、帯の間から繻珍の小さい煙草入と赤銅に細かい彫のしてある煙管を出した。其處に上さんは馬の小便のやうな茶と金米糖を入れた器と、片手に十能におきを入れたのを運んで来て、そのおきを無造作に火鉢にあけた。灰がばつと立つた。

晴れた日なら、下まで降りて見るのだが、そんな心地には誰もなれなかつた。小雪は丸竹の欄干に凭つて唯谷を覗いた。

やがて出懸けた。

清瀧の足尾への岐れまで来るには、かなりあつた。山は絶えず巖に入つた。雨はまだ降つて居たが、それでも段々小降になつて来て、空も少しは明るくなつた。清い水の流を前に、釜を洗つて居る女もあれば、山から伐り出して来た木で下駄の臺を削つて居る男もあつた。冬の積雪を凌ぐ爲に、家屋の庇は皆長く出て居て、瓦で葺いた屋根などは見たくも見られなくなつた。足尾に岐れる路には、トロコが續いて、銅を載せた車が幾臺も幾臺も遣つて来た。山の向うには、富者と貧者との懸隔を歴々と眼の前に見ることの出来る足尾があるのである。

わかれ道を少し行つた時、先に行つた客の車は幌を舉げた。雨はあら方止んで居た。小雪も幌を舉げさせた。

其の頃から、何處かの學校の修學旅行の青年の群が、或は二三人、或は七八人、或は十人以上をりを山から下りて来るのに逢つた。皆な詰襟の黒い制服を着て、ゲートルをつけて居た。熱心に話しながら脇目も觸らずに歩いて行くものもあれば、ステッキを切る爲めに道草を食ひながらぐづく歩いて行くものもあつた。軍歌を一齊に歌つて行く群もあつた。其中には教員らしい鬚の生えた人もをりく交つて居た。

『何だ、あれは、細君ぢやないナ。』

こんなことを態々聲高く言つて行くものもあつた。

群に離れて、唯一人さびしく歩いて来るものもあつた。

馬返の五六軒のさびしい家屋は遠くから小さく見えた。山の中に來たといふ感じは誰の胸にもあつた。こんな處を入つて行つて何處に何う行くのだらうと小雪は心細く思つた。何となく後ろが振返られるやうな氣もする。賑かな電車の響、やけに弾く三味線の音、さうしたものからは全く離れて了つた。かうした世の中があらうとは今まで想像にだに上らなかつた。

藁舟の家の前には青々とした畠があつた。子供を負つた齒を染めた若い上さんが其處から出て來た。其家の入口の壁にはぬれた蓑が掛けてあつた。

大きな昔風の旅籠屋の前に車夫は梶棒を下した。其縁側には草鞋が幾足となく吊してある。長い縁側

の向うに、小高い二階屋の離れがあつて、其前の綺麗な泉水には、目も覺めるやうな紅い八汐の躑躅の大きな枝がさし込んであつた。

其の六疊二間つゞきの綺麗な離れに一行は休んだ。

其處からは裁縫をして居た色の白い肥つた娘が、茶器と菓子盆を持つて長い縁側を此方に遣つて來るのが手に取るやうに見えた。間を隔て、大きな圍爐裏が切つてあつて、其處の周圍に一行を乗せて來た車夫がごた／＼と集つて居た。

此處の名物のきなこ餅は徒らに盆に盛られたまゝで、誰も手をつけなかつた。

『車に揺られて好い心地をしてウト／＼して來た。』

女中は欠伸をしながら言つた。

『よく眠る人だね本當に……』

愛想が盡きるといふ調子で笑を含んで小雪は言つた。

『これから籃輿だ！』

かう客が言ふと、

『何處まで行くんですの、一體……』

『もう一里半だ、ちきだよ。』

『この山はまだ奥が行けるんですか。』

『行けるとも……これから藤村操の華嚴瀧があるんだ。』

『さうなの、これから奥にその瀧があるの？ こんな淋しい處を藤村操は行つたんですねえ！』

『さうさ、』と言つたが、女中に、『お慶さん、今度は眠らずに行かなくつてはいかんよ。こゝからいろ

いろ日光の瀧の名所があるんだから。』

『もう大丈夫、もうこんなに目が覺めて了つたから。』

女中はわざと眼を大きく睜つて見せた。

『大丈夫もないよ、本當に……見物に來たんちやなくつて、眠りに來たやうなものだよ、』と小雪は笑つた。

谷川の瀨の音が林を撼かして聞えた。

馬に乗つた若い西洋婦人が下から二人遣つて來たが、水色の涼しさうな洋服の裾を翻へして、ひらりと馬から飛降りた。馬はやがて前の林の中に繋がれた。暫くすると、また後から金髪を房々させた十七八の少女が同じく馬で遣つて來て、これも巧に活潑に飛び降りた。そして縁側に休んで居る前の二人の婦人の處に來て、何か面白さうに語り始めた。

『西洋の女は活潑で好いわねえ、』と小雪は言つた。

籃輿の支度が出来た。相棒で擔いで来た赤いふつくりした友禪メリンスの蒲團の中に、縁側から頭を低くして、身を沈めるやうにして乗った。ともすれば大きい丸髻のつかへさうになるのを、小雪は頻りに氣にして居たが、先に乗つて此方を見て居る客と顔を見合せて笑つた。人足は桐の杵の駒下駄と繻珍の細い鼻緒のすがつた疊つきと他の一足とを一緒にして、それを女中の乗つた籃輿の上に結びつけた。並んで出懸けた。

好い鹽梅に雨は降らなかつた。車とは違つて、四邊が能く見える。林を通る時には縁の影がチラ／＼と衣の上に動いた。それに籃輿が心地よく揺れた。

客が指す方を小雪が見ると、高い高い今にも落ちて來さうに思はれる崖の上に躑躅が一固まりになつて赤く咲いて居た。

凄じい谷川の水が鳴つて吼えて頭の上に落ち懸つて來さうに思はれた。廣い河原があつたり、大きな石がころがつて居たりした。數年前に水の出た時の話を客は人足から聞いた。

『あの時は豪い騒ぎだつたよなア、馬返が今流されるか、今流されるかと思つた位だつたからなア。』馬返に住んで居る人足はかう言つて話して聞かせた。

修學旅行の生徒は、まだ續々と下りて來た。大きな躑躅を肩にして歩いて來るものもあつた。鼠色の加はつた白い雲が前の山から簇々とする。谷は次第に狭くなつた。

西洋婦人は馬を並べて、楽しさうに話しながら、一行を追越して行つた。十七八の少女は色の白い無邪氣な綺麗な顔をして、此方を見て笑つて通り過ぎた。此處らは日光でも最も深の窪いところであつた。瀨の音は四邊に響いて凄じく聞えた。川の瀨の變る度に常に崩壊する道路を修繕する爲めの人足が其處にも此處にも居る。石を一生懸命に砕いて居るものもあれば、砕いた石を畚に入れて擔つて行くものもあつた。大きな石を動かす爲めに五六人一群になつて仕事をして居る傍は避けて通つた。ふと凄じい音がしたので、驚いて其方を見ると、崖の上の大石が二つに割れて落ちて、其處から白い烟が颯つた。ダイナマイトで、道普請の石を割つて居るのであつた。

瀨の凄じく咆哮するさまを段々と下に見るやうになつた。幾筋にも岐れた瀨に架けられた柴の組橋を渡る時には、白い泡立つた水がすぐ下に鳴つた。ある橋では其の餘沫が小雪のコートから顔にまで懸つた。流石の西洋婦人も馬から下りて、長い洋服の裾をはしよつて、縫ふやうにして歩いて行くのが繪でも見るやうに其前に見える。

躑躅の紅い花が其處にも此處にも咲いて居た。

谷は折れ曲つて、二つになつた。其間を中禪寺へ登る路はついて居る。谷に離れた角の茶屋には、汚い爺さんが一人ほつねんとさびしさうにして居た。半壊れた女人堂の傍を通る時、人足は昔は女は此處から上へ登ることが出来なかつたといふことを小雪に話して聞かせた。

谷がやがてまた前に開けた。レーキサイドホテルの白ペンキの廣告札が立つてゐる傍には、瀟洒な瀑見茶屋があつた。此處の上さんは四十位の年恰好で、毎日朝早く馬返から登つて來るといふ。客も小雪も女中も皆な籃輿から下りて、ほつと吐息をついて、前に展げられた二條の瀑と相對した。

『さつきは恐いやうだつたわ。餘沫が顔に懸るんですもの。……あの水が落ち懸つて來たら何うしようかと思つた。』

こんなことを小雪は言つた。

瀑の名を聞いては『般若とは面白い名ねえ、』などと言つた。

客が酒を飲まうとするに『およしなさいよ、……ちき苦しくなる癖に、』と艶やかに笑つて見せた。何處となくはしやいで居るのが客にも解つた。

中の茶屋までは一のぼり。其處は、今まで通つて來た谷を一一明かに顧みて指點するといふやうな地位にあつた。谷川が深い山の中から出て、寄り合つて哮り合つて世の中に出て行くさまがそれとなく思はれる。高い山と高い山とが重り合つて、今朝から通つて來た廣い野や綠葉の林は何處に行つたかと思はれた。心細いしかし楽しい心地を小雪は経験した。何うした聯想か、多くの客の顔が眼の前を通つてそして消えた。

人足の困難する山路は此處から一層酷くなつた。新道を迂回すればさして難儀をしなくつても好いの

だが、二里の處を一里足らずで真直に突切る舊道の捷きをかれ等は常に選んだ。見る／＼人足の息づかひは荒くなり、シャツ一枚の脊中からは汗が流れた。路は勾配が胸を衝くばかり急なのに加へて、雨にこねられた泥濘は夥しく滑り勝てあつた。木の根や石を力に辛くも登つて行くかれらの息杖はブル／＼と震へた。時には乗つて居る者の脚が胸より高くなることがあつたり、宙にブラ／＼と危く放擲されやうとしたりした。路に出て居る熊笹や小枝ををり／＼小雪の手や顔に觸れた。

籃輿が烈しく揺れる時や、深い谷を脇に釜の縁のやうな細い路を通る時や、泥濘の路に人足が滑つて籃輿が危く覆りかけた時などには、吊手拭につかまつて居る小雪の手にも汗がおのづと滲んで、意氣地なく胸が震へた。人足は荷物か何ぞのやうにして全力を出して擔いでのぼつた。

尻はしよりをして下つて來た東京者らしい二人づれと摩違つた時、

『藝者だ、藝者だ。』

『旨くやつてやがるな。』

かう言ふのが誰にも聞えた。

人足は今や全力を舉げて居た。をり／＼息杖を立て、休むその頭からは湯氣がポツポと立つた。此處が舊道でも一番峻しい不動坂であつた。其處へかますや樽を積んだ馬が下りて來る。

『ハイ、どう／＼！』

町より山へ

後の人足が戯談らしく言つた。

『おい、よして呉れ、馬ぢやねえぞ。』

『何だ、馬ぢやねえ、……馬より好いと思つてやがる。』

『本當だ、』と次の籃輿の人足が受けて、『來世はなア、せめてなア、馬ぐらるにや生れて來ていものだ。』

『本當だよナア、勘公、馬は人間と違つて了簡といふ奴が無いから樂だナア、何んなもんでも平氣で載つて行くアなア。』

『やうともよ……』

やがて登り切つた。

四邊はしんとして居た。霧のやうな雲が林を籠めて、樺の白い幹がところ／＼に立つた。其上をサツと降つて通る雨の音はさびしかつた。

氣候が驚くほど違つた。誰も皆新しい山の空氣の身に迫るのを覺えた。五月ではあるが、何だか三月位の氣候としか思はれなかつた。草でも樹でも、麓にあるものとは皆な種類を異にした。寂とした廣い平らな林の中の路を、人足共のさつさと歩いて行く足音が高く聞えた。

人足は足を留めなかつた。肩をかへても、今迄のやうに休まうとはしなかつた。夕暮近く鳥が埒に急

ぐやうに、もう程もない道を急いだ。一握の錢と一杯の酒とにかれ等は漸く近づいて來た。

水の音が微かに聞え出した。路傍には新しく建てたらしい板葺板圍ひの家があつた。其處には草鞋が下げてあつて、駄菓子や硝子張の箱に入れられてある。鬚の深い熊のやうな山男が、圍爐裏の烟を前にして坐つて居た。

『これよりけごんの瀧』といふ道しるべの石が路の畔に立つてゐた。その岐れ道を籃輿はズン／＼進んで行つた。瀑見茶屋の低い屋根が見えて、其處から立つ淡い紫の烟が見えて、續いて縁臺の上の赤い毛布が見えた。水の音にはドウと物の落ちるやうな氣勢が交つた。大きな谷は前に開けた。

谷の縁に臨んだ時、

『これが、けごんの瀧。』

と小雪は言つた。

暫くしてから、『そして一體何處から飛び込むんですの？』

『そら其處さ、……落口の處に柵が結つてあるだらう。彼處からさ。』

『彼處から……彼處からぢやねえ。』

と見惚れて居る。

やがて縁臺の處に戻つて來て、

『大きな瀑ねえ。』

『日本でも餘り類のない瀑だ。』

『よく思ひ切つて飛び込んだものねえ。』

『此處に来て、瀧を見ると苦勞のあるものは、死ぬ氣で來たのでなくつても、飛び込む氣になるんだつて……』女中は聞嚙つたことを傍から言つた。

『私も飛込まうかしら……』と言つて笑つて、『厭だわ、何んな苦勞があつたつてこんな處から飛込む氣にはなれないわねえ。』

『本當よ……』

かう女中が言つた。

小雪は少し考へ込むやうにして、『どうして藤村操はこんな處から飛び込む氣になつたんでせうねえ。戀人があつたんですつてねえ。』かう言ひかけたが、柄にもないことを言つたのに氣が附いて自分で笑つた。燃えるやうな熱心な青年の心は小雪のやうな境遇の女には分らう筈はなかつた。

客はいろいろ其後の話をして聞かせた。飛び込むものが多くなつて、中禪寺の村はそれが爲めに村税の負擔が増したといふことも話した。其處に茶屋の主人らしい四十男が茶を運んで來た。客は『この頃も身投げがあるかね。』

『えへ、』と男は質朴な笑ひ方をしく、『何うも困りやすんで、一月に三人位あることが御座りますか。』

『見たことがあるかねえ。』

『私はア、見たことは御座りませんが、鼻は見たことがあるさうで……あれ、飛込んだと思ふと、半分位まで、人間の形が黒く見えて居るさうで……』

『まア、ねえ。』

と小雪は其場合を想像した、

『どうも困りもんで……』

男はかう言つて向うへ行つた。

少し下りた處に瀧壺まで見下ろせる位置があつた。其處からは瀧の餘沫の中を飛びめぐる岩燕の群も見えた。樹の枝に縋つて小雪は瀧壺を覗いた。

瀧見茶屋を出て少し行くと、瀧の上流が見えた。普通の谷川のやうに平らな瀬をつくつて靜かに流れて居る。林を切り開いた處には、まだ新しい小屋があつた。東京で見る巡查の交番に似て居た。人は居なかつた。

それは投身者を嚴重に取締る爲めだといふことを人足は話した。やうやく五六日前に出來上つたばかり

りだといふ。『中禪寺ちやえらい眼に逢つたもんさなア。……こんなことが起らうとは、誰だつて知りやしねえからな。』こんなことを言つた人足もあつた。

熊笹と満天星の網のやうに繁つた林の間から、やがて夕暮近い湖水の滑かな碧が見え出した。白ペンキで塗つたレーキサイドホテルの大きな建物は向う岸の小高い處にあつた。前の廣場には西洋の婦人が一人二人静かに逍遙して居た。川の橋近くには緑葉の蔭にボートが二三隻繋がれてあつた。

ホテルの白い廣告札は其處にも此處にもあつた。山國に見る家屋の構、それに避暑に来る西洋人の別荘の戸締にされたのが幾軒か續いた。かうした山の中に珍らしい寫眞屋、繪葉書屋、パン屋、Fine Artsなどと大きく書いた家もあつた。山で圍まれた湖水の汀には漣が寄せて居た。

岸には新しい鉋屑の四邊に散らばつた半造りかけたボートもあつた。

旅籠屋では、角帯を緊めた番頭が出て迎へた。時節外れの今はひまで、室といふ室は大抵明いて居た。小雪は一日の長い旅に勞れ果てたといふやうに、大儀さうに、入口の階段をのぼつた。やがて二階の湖水の見える室へと通される。婢が十能に火を運んで來た時には、皆な寒さうに火鉢の周圍に集つた。小雪は容易にコートを脱がうとはしなかつた。

『くたびれたねえ。』

と客は言つた。

『随分遠かつたわねえ。』

と小雪も言つた。

障子の外は疊を敷いた廊下で、窓にはまつた明るい硝子戸からは、雨の湖水が繪のやうに展げられて見えた。廊下には黒塗の丸い卓に椅子も二脚置いてあつた。何處の室にも客は居なかつた。茶を飲んだり菓子を食べたりした後で、三人は其の部屋々々を見て廻つた。放浪時代に此地に來て描いたといふ廣業の文人畫風の蘭の繪が床の間に懸つて居たり、日光輪王寺門跡から此の旅籠屋の主人によこした手紙が其まゝ、長い額になつて居たりした。名高い漢詩人の七律を書いたのもあつた。三人はこの静かな部屋をわが物のやうにして歩いた。客が卓に凭りかゝつて、ぢつと湖水を見て居ると、其向うの椅子に來て小雪も腰をかけた。

湖水は暮れかゝつて來た。

解 説

前 田 晁

明治四十年に『蒲團』を書き、四十一年に『生』を書き、ついで四十二年にかけて『妻』を書いて、作者の文壇的地位がいよゝ十分に確保せられ、自然主義運動もまた殆ど最高潮に達して、最も強く迫真が叫ばれたころの作品がこの巻に收められてゐる。四十二年の六月、稿を起して、十月に至つて脱稿した『田舎教師』が最も早く、四十四年十月の『ある死』（雑誌『文章世界』所載）が最も後のものである。作者が三十九歳から四十一歳までの三年間にわたつてゐる。

『縁』は新聞『毎日電報』に連載せられ、明治四十三年十月に完結した長篇で、前の『生』、『妻』の二長篇と共におのづから三部作をなすものといはれてゐる。けれども、これを内容をなしてゐる事象の上から見ると、むしろ『蒲團』を『妻』とこの作との間に加へて、四部作をなすものとしたはうが一層適切であらう。即ち『生』において、死の床にある老母を中心とした四人の子女の「生活」の種々相を描いた作者は、『妻』において、その中の一人の家庭生活を描いて、人生の孤獨を痛感してゐる主人公の

心理の上的一道の光明を與へた美しい女學生の出現に及んでゐるが、『蒲團』では、この女學生に對する主人公の祕密な戀を赤裸々に暴露してゐるのである。そして、『縁』は、作中の主人公が『蒲團』を書いて、或意味では、この美しい女學生を藝術の犠牲とした形になつてしまつた後の彼女の生活にからんで、主人公がその責任を感じながら、次第に人生に練れて行く心理を取扱つてゐるのである。ただ茲に一つ注意すべきことは、この作では、すでに彼女に代つて、主人公の家庭生活の空虚感を充たしてゐる女性が別に出現してゐたために、女主人公に對する主人公の氣持は、『妻』及び『蒲團』における時とはすつかりちがつて、落ちついて、寛大になつて、十分に餘裕をもつて客觀し得てゐることである。そしてこれらの諸作は、一面また作者自身の自傳的なものでもあるから、作者が青年時代から中年時代までの生活状態、文壇における交遊關係なども、その一端は思ひ偲ばれるのである。例へば、『縁』で見ると、主人公の服部清は作者自身で、田舎寺の住職は作者の夫人の兄の太田玉茗、友人の西は柳田國男、田邊は國木田獨歩である。迫真をモットーとしてゐた作者であるから、描かれてゐるところは、大體において事實そのまゝであつたと見ていいであらう。『縁』の十二ページから十三ページにわたつて、主人公の故郷の描寫があるが、そこへはわたしも作者に連れられて行つて、あちらこちらと見てまはつたことがある。作者の生れた屋敷址の桑畑の中を歩いたり、生ひ育つた家の門の前に立つて、梅の古木の奥に小さな家の藁葺屋根を眺めやつたりした。をりから極寒のころで、あまり白くもない障子が

座敷のはうにはしまつてゐるが、わたしはその前のところの縁側に、作者がよく書いたり話したりした盲ひた祖母が日向ぼっこをしてゐる姿を思ひ浮べて見たりした。作者は懐しげに低徊願望、容易にその門の前を去らうとしなかつたが、やがて栗の樹や竹藪のそばを通つて、裏の狭い路のはうへわたしたちを連れて行つて、その土手下の細長い壕を指さし示して、昔、そこで雑魚など掬つた話をしたりした。わたしたちは作者が學んだといふ小學校の前を通つて、狸の泥舟のやうな平たい浅い田舟でもつて、ちよつと大きな城沼を渡つて、躑躅で有名な花山のはうへ行つたりした。

さて、『縁』までを四部作とすれば、作者が『生』からつゞけて描いて見せて來た人生は、一先づこゝで終つたわけだが、しかし、この作の結末のところ次に次のやうな文句がある。

其晩、お國さんは清の家へ來て其話をした。

『愈々最後の幕も濟んだね。』

かう言つて清は笑つた。

しかし三人の間にはまだ一つ問題が残つてゐた。それは寺に置いてある子供の問題であつた。

清は其時から其子供に對して一種の憎悪と愛憐とを感じて來た。平行線は猶續いた。

で、この後日譚とも餘談ともいふべきものが、この巻に收められてゐる『幼きもの』（明治四十三年十二月、雑誌『早稲田文學』所載）である。三度目の誕生が過ぎて、漸く夜も獨りで寝るやうになつたころ

に、この子供は、或日、ふと脳膜炎に襲はれて、一夜にして死んでしまつたのである。これで本當に何もかもが一切終つたのである。「若い人達の何の考もない無邪氣な戀の歡樂が、かうした悲劇を形づくつて行くといふ話なども二人の口に上つた」といふ此二人は、『縁』の主人公の服部清と、其義兄の田舎寺の住職とであつた。戀愛、本能の満足、妊娠、それから子供の不仕合せな生涯に及んだところに、作者はどうすることも出来ない「自然」の力を見ようとしたのである。

『田舎教師』は『生』、『妻』、『蒲團』、『縁』などは全くちがつて、これには作者の自傳的要素は少しもない。『田舎教師』は予に取りて全く他人なり。予は小學校の教師をしたることなし。其材料は多く日記、傳聞、踏査等より成る。従つて、不安多きだけそれだけ予に取りては新しき試みなり」と、作者が其當時の日記（本全集第十五卷所収の『インキ壺』の中の『梅雨日記』）にも書いてゐる通り、まことに偶然な事から此作の主人公（林清三）とした小林秀三といふ、小學校教師をしてゐた青年の哀れな一生を知つて、同感を寄するの餘り、この青年の一生を通して、有爲の志を抱きながら、家庭の事情や何かに制せられて空しく田舎に埋もれて行く同時代の青年を書き生かさうと企てたのである。それには、幸ひなことに、この秀三氏の日記が、中學時代のもので、小學校教師時代のもので、死ぬ年一年分と、かう纏つて作者の義兄の太田玉茗氏の手許に保存せられてゐたので、作者はそれを借りて、繰返して讀んで、その中から死んだ主人公の心を發見しようといふと力めた上に、幾度か小林君の歩いたところ、住んだところ、

勤めた學校や、懊惱し、煩悶し、發憤し、冥想したところなどを實際に踏査したりして、なほ其上にも、小林君の親達に逢つたり、友人たちを訪ねたり、わけても小林君に本堂の一間を貸してやつた太田氏からは、其觀察や何かをいろいろと聞いたりして、次第に『田舎教師』の計畫を立てて行つたのである。

けれども、作者の胸には容易に其計畫が熟さなかつた。初めて思ひついた明治三十八年の秋から、一年、二年、三年、四年と經つて、『蒲團』や『生』や『妻』を書いた後の明治四十二年六月になつて、やつといよく書き出すことに心が決したのである。が、其月の十八日から筆を執りはじめると、四ヶ月後の十月二十日には、早くもその書きおろしを直ちに單行本として東京神田の左久良書房から出版させたのである。菊判で、非常な贅澤な組方をした五四二頁の大冊であつた。齋藤松洲氏の裝幀で、岡田三郎助氏の油繪の口繪の外に、主人公が生れて、育つて、住んで、死んだ北武藏地方の地圖を一葉つけてあつた。

卷頭には「この書を太田玉茗氏に呈す」といふ献呈辭が書かれてゐた。太田氏は作者の無二の親友で、すでに前にも述べた通り、夫人の兄でもあつた。明治三十年前後の新體詩人として聞え、當時は埼玉縣羽生町の建福寺の住職であつた。早稻田大學の前身東京專門學校の文科の出身で、本名は三村玄鋼といつた。この書の中には成願寺の住職山形古城として出てゐる。作者自身は原杏花の名でちよつと出

て来るが、その外にも、長谷川誠也氏が、「相原健二といふ有名な『太陽』の記者」としてちよつと出てゐるし、又、そのころの文壇に出版者として異常な勢力を及ぼしてゐた博文館の大橋乙羽が大島孤月の名で其病死した時のことがちよつと書かれてゐる。

この作はまた、その描寫の手法がこれまでのものとは全くちがつて、主人公の生活を、ほつん、ほつんとちぎつておいたやうに、或ひは短く、或ひは長く、印象的に列ねて行つた形になつてゐる。中には三十行、二十行、否、十行にも足りない章さへもいくつもある。そのころ作者が最も深く傾倒し、私淑してゐたフランスのゴンクウルの影響の下に、新しい試みをして見たのであつたらう。この作を執筆中、作者はいつもゴンクウルの『ジュルミニイ・ラセルトウ』のアメリカ版の英譯を座右においてゐた。

この作の反響は、その出版當時に可なり夥しかつた。中には、わざ／＼此本を手にして東京から北武藏の利根川べりまで出かけて行つて、主人公の足跡をもとめ歩いた文學青年などもあつたからである。今日においても、作者の全作品中、常に最も多くの讀者をもつてゐるのは多分この作であらう。

その他の短篇では、生れながらにして愛憎の念を具備してゐる幼児の心理を精細に解析して、人間性のつひに遷すべからざる所以を暗示した『幼兒』（明治四十四年四月、『中央公論』所載）といひ、見も知らぬ男女が、全くの偶然から、豫期だもしなかつた性の衝動に身を任せて行く心理を描いて、人心の機微

を諷示した『けんけ』といひ、『蒲團』前記の一節とも見るべき『拳銃』（明治四十三年一月、『早稲田文學』所載）といひ、元氣よく出かけて行つた牛乳配達夫が、前夜の大暴風雨のために断れて地上に垂れてゐた電燈線を、ふと取除けようとした瞬間に、あつといふ間もなく感電して死んだことを書いた『ある死』といひ、いづれも作者が常に力説してゐた「自然」の力の偉大さと其無關心とを如實に具體化したものに外ならない。自然主義全盛時代の短篇として、其體様の一端を示したものと見るべきであらう。

『町より山へ』（明治四十四年一月、『早稲田文學』所載）は、そのころ作者が特に主張してゐた平面描寫を實例によつて示さうとしたものと見ていゝであらう。町より山へ向つて、まるで繪卷物なんかのやうに次第に展開して行く景と情とを作者はその最も熟してゐる山水の上に表現してゐる。普通の作品が事件の累積と展開とから成るものとすれば、これは、背景の變化と展開との上に情緒をそれとなく織り込んで行つてゐるのであるが、しかし、ここには大して人生的の意味があるとは思はれない。それにつけて想ひ起すが、作者は此作を發表した時に、可なり得意で、快心の笑みをわたしに向けたのであつた。が、わたしがすぐにはそれに同感を表し得ないでゐるのを見ると、「さうかな、君には此作の面白がわからないかな！」と、さも情なげな表情をして見せたのであつた。但し、同じく平面描寫ではあるが、ずつと後年になつて、悪左府頼長が傷ついた身を奈良に落ちて行つたことを題材とした歴史小説の『流

矢』については、わたしは此作とはまたちがつた興味と意義とを感じてゐる。

(昭和十一年九月二十五日)

昭和十一年十月十一日印刷
昭和十一年十月十五日發行

花袋全集第二卷
豫約價金壹圓八拾錢



不許複製

著者 田山 錄 彌

發行者 川 俣 馨 一

印刷者 井 上 源 之 丞

東京市小石川區竹早町三十二番地

(内外書籍株式會社内)

發行所 花袋全集刊行會

電話小石川(85)一〇五四番
振替東京二八七九〇番

(刷印場工分所本社會式株刷印版凸)



